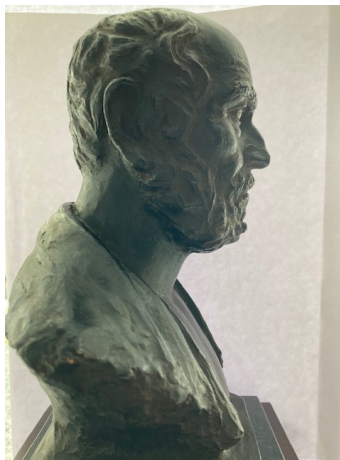


日本の温泉の今後を考える－有識者からの提言集

温泉への思いと心を絆ぐプロジェクト2021

新型コロナウイルス感染症パンデミックを超えて



since 1986

2021年8月

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム

「日本の温泉の今後を考える－有識者からの提言集」

目次

「日本の温泉の今後を考える－有識者からの提言集」－発刊に寄せて－

三友 紀男（特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 会長、温泉療法専門医）	1
（以下、太文字は小括寄稿者）	

行政

首藤 勝次（前・大分県 竹田市長）	2
石田 耕太郎（鳥取県 倉吉市長）	3
伊藤 康志（宮城県 大崎市長）	4
江頭 実（熊本県 菊池市長）	5
片山 健也（北海道 ニセコ町長）	6
門脇 光浩（秋田県 仙北市長）	6
楠本 浩史（元・環境省 自然環境局 温泉地保護利用推進室 温泉保護係長）	7
工藤 栄光（前・北海道 豊富町長）	8
館 逸志（一般社団法人離島振興地方創生協会 理事）	8
福井 崇弘（兵庫県新温泉町 おんせん天国室 室長）	9
藤永 義彦（株式会社SD-WORLD 代表取締役）	10
松浦 弘幸（鳥取県 三朝町長）	11

旅館

大沼 伸治（百年ゆ宿 旅館大沼 五代目湯守）	13
石松 裕治（有限会社石松農園 岳の湯・地獄谷温泉 裕花 代表取締役）	14
一條 一平（合資会社一條旅館（時音の宿 湯主一條） 代表社員）	14
大関 松男（有限会社清風荘 代表取締役社長）	15
大沼 伸治（百年ゆ宿 旅館大沼 五代目湯守）	15
河津 誠（有限会社地獄温泉 青風荘 代表取締役社長）	16
倉沢 章（旅宿 上松や 会長）	17
小山 芳久（株式会社塚原緑地研究所 増富エリア担当 主任研究員）	17
鶴田 浩一郎（株式会社鶴田ホテル（ホテルニューツルタ） 代表取締役社長）	19
内藤 陽子（温泉津温泉 薬師湯 代表）	19
中道 幸子（べにや無何有 女将）	20
畠山 米一（株式会社玉川温泉 取締役副社長）	20
林 泉（有限会社川古温泉浜屋旅館 代表取締役）	22

医療・保健

猪熊 茂子（医療法人社団誠馨会 千葉中央メディカルセンター アレルギー疾患リウマチ科 部長、温泉療法専門医）	23
東 威（元・聖マリアンナ医科大学 教授、温泉療法専門医）	23
猪熊 茂子（医療法人社団誠馨会 千葉中央メディカルセンター アレルギー疾患リウマチ科 部長、温泉療法専門医）	24
小笠原 真澄（医療法人楽山会 大湯リハビリ温泉病院 院長、温泉療法専門医）	24
齋藤 真由美（豊富町ふれあいセンター 健康相談員(保健師)）	25
ミハエラ・シェルブレア（ホメオパス）	26
畑田 素子（酸ヶ湯温泉健康相談室 看護師）	27
早坂 信哉（東京都市大学 人間科学部 学部長・教授、温泉療法専門医）	27
藤澤 重樹（医療法人社団アップル会 藤澤皮膚科 院長、温泉療法医）	28
牧野 直樹（九州大学 名誉教授、温泉療法専門医）	28

研究・教育

坂本 誠（政策研究大学院大学 政策プロフェッショナルプログラム 在学）	29
石川 理夫（温泉評論家）	30
石田 心（一般財団法人日本健康開発財団 代表理事 理事長）	31
井上 晶子（立教大学観光研究所 特任研究員）	32
内田 彩（東洋大学 国際観光学部 准教授）	34
大塚 晃弘（公益財団法人中央温泉研究所 主任研究員）	35
大野 正人（観光リサーチ＆プランニング事務所 代表）	36
神崎 宣武（民俗学者）	37
甘露寺 泰雄（元・公益財団法人中央温泉研究所 専務理事）	37
栗原 茂夫（特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 常任理事）	39
後藤 健太郎（公益財団法人日本交通公社 観光地域研究部 地域戦略室 主任研究員）	40
斉藤 雅樹（東海大学 海洋学部 教授）	41
坂本 誠（政策研究大学院大学 政策プロフェッショナルプログラム 在学）	42
桜田 一洋（国立研究開発法人理化学研究所 情報統合本部 先端データサイエンスプロジェクト プロジェクトリーダー）	43
鈴木 輝隆（立正大学 研究推進・地域連携センター 地域連携チーフプロデューサー）	43
関口 陽一（独立行政法人経済産業研究所 上席研究員）	44
滝沢 英夫（公益財団法人中央温泉研究所 研究部長）	45
布山 裕一（流通経済大学 講師）	45
松坂 健（オフィス アト・ランダム 代表）	46
桃井 謙祐（信州大学 社会基盤研究所 特任教授）	48
森田 浩司（大阪国際大学 国際教養学部 国際観光学科 准教授）	49

オピニオン・リーダーズ

関口 陽一（独立行政法人経済産業研究所 上席研究員）	50
石井 宏子（株式会社温泉ビューティ研究所 代表取締役）	51
伊豆 芳人（株式会社トラベルジップ 顧問）	52
江淵 敦（インフォーママーケティングジャパン株式会社 Diet&Beauty編集長・事業部長）	52
大國 道夫（大國道夫・都市・建築総合研究所株式会社 代表取締役）	53
岡田 友悟（特定非営利活動法人日本スパ振興協会 理事長）	55
川崎 義巳（フェローニア株式会社 取締役）	55
北出 恭子（杏林大学CCRC研究所 客員研究員）	57
木地本 朋奈（株式会社トリリオン 代表取締役）	57
重 隆文（株式会社アクアエンタープライズ 代表取締役）	58
竹村 節子（旅行作家）	59
谷口 江里也（有限会社エリアス・クリエイティブ・スターシップ 代表取締役社長）	59
野添 ちかこ（温泉と宿のライター）	60
野中 ともよ（特定非営利活動法人ガイア・イニシアティブ 代表理事）	61
坂内 和孝（皆生温泉観光株式会社 代表取締役社長）	63
丸岡 幹男（湧有限会社 代表取締役）	63
水島 達也（株式会社ユニックス 代表取締役会長）	64
米原 暢男（株式会社日本経済新聞社・テレビ大阪株式会社 客員）	65

温泉への思いと心を絆ぐプロジェクト2021

「日本の温泉の今後を考えるー有識者からの提言集」へのご寄稿のお願い	66
月例研究会開催実績	68
あとがき 上口 昌徳（石川県加賀市山中温泉 かよう亭 亭主）	71
編集後記 合田 純人（特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 常任理事）	72

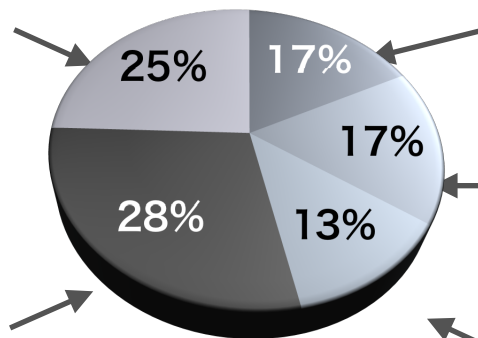
寄稿者全国分布図



寄稿者の属性図

オピニオン・リーダーズ
(メディア、関連産業)

研究・教育



行政

旅館

医療・保健

「日本の温泉の今後を考える－有識者からの提言集」

－ 発刊に寄せて －

三友 紀男

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 会長
仙台社会保険病院 名誉院長 温泉療法専門医
前・日本温泉気候物理医学会 温泉療法医会 会長

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラムは日本の近代温泉医学研究の祖である大島良雄東大名誉教授によって1986（昭和61）年に設立された組織である。

官学民が一体となって、温泉の調査・研究を進め、その成果を広め、以って我が国における温泉の正しい利用を豊かにしていくことを願っての発足であった。以来35年、そこに集う多くの人達の地道な努力により、多くの成果を得てきている。

その矢先の新型コロナウイルス襲来である。鳥インフルエンザの出現を最大の恐怖と考えていたところへ、2002年のSARS（重症急性呼吸器症候群）、2009年の新型（豚）インフルエンザ、そして2012年のMERS（中東呼吸器症候群）と新たなウイルスによる感染症が局地的ではあるが世界の各地で流行を来し、いずれは世界的なパンデミックに襲われる日が来ることが予想され、伝統的な安全保障の枠を越えて、気候変動や感染症などに対する非伝統的な安全保障のグローバルな取り組みの重要性が叫ばれてはいても、十分な取り組みにまでは至っていないこの時期に、全世界が新型コロナウイルスの襲来を受けている現状である。健康と温泉フォーラムの最近の活動の中で特筆されるのは、2008年12月より開催されてきた月例研究会活動であろう。間もなく迎える第100回には、それにふさわしい記念の月例会として企画を立てようとしていた矢先の新型コロナウイルス発生であった。そのために、2020年の年次総会も変則的なものとなり、例年の各地をめぐってのフォーラムも開催できずに過ぎてしまった。同時に、最大の新型コロナ蔓延対策施策として取られたstay homeの取り組みにより全国各地の温泉地は極めて大きな打撃を受け、新型コロナに負けずpost coronaを目指した新たな取り組みを求めて模索が始まった。しかし、過去には経験したこともない、先の見通しのできない状況の中での模索は極めて困難であり、悲鳴にも似た相談がフォーラムにも聞こえてきた。そこで、フォーラムでは運営委員会で検討を重ねた結果、多くの有識者の方々から、現状を如何に捉えておられ、また必ずや来るpost coronaの時代にどのように対応するかなどについてご意見を収集する試みを取り上げることとし、2021（令和3）年3月に合田純人常任理事を委員長と、関口陽一、坂本誠の専門委員をメンバーとする「日本の温泉の今後を考える－有識者からの提言集」委員会を立ち上げ、別掲のような呼びかけを、「温泉への思いと心を絆（つな）ぐプロジェクト2021」として、これまでに当フォーラム諸行事にご参画頂きご指導頂いた各方面約100名の方々に行った。提言は自由記載とし、1）新型コロナウイルス禍をめぐり動向に際し感じるこ

と、考えたこと、2）日本の温泉の今後のあり方（温泉政策、グローバリゼーション、健康福祉利用など社会的活用、入湯税の戦略的な活用、温泉地の連携、温泉人材の育成、温泉文化の保護、その他、3）健康と温泉フォーラム活動への期待や提言（全般的な方向や月例研究会の課題・テーマ案含む）、4）その他（自由な発想で日本の温泉の将来への課題を教えてください）の4点に視点を向けた提言を求めることとした。その結果、70人の方々から貴重なご意見を頂くことができた。

お寄せ頂いたご提言は、関口、坂本の二人に整理頂き、1）行政、2）旅館、3）医療・保健、4）研究・教育、5）オピニオン・リーダーズに分類し、その方面の識者の方々にお読み頂き、小括をして頂くこととした。突然の、そして極めて短時間でおまとめをお願いしたのであるが、皆様進んでお引き受け頂いた。温泉が現在おかれている危機的な状況の中で、果たすべき役割を感じ、実践に移して頂いたものと感謝している。これがその冊子である。

皆さんから頂いたご提言に接し、心強く感じることは、第一に、温泉を愛する多くの日本人が、コロナ禍の中にあっても温泉を愛するその気持ちを失っていないことである。困難な状況の中から、来るべきpost coronaの時代の、伝統を乗り越えた新たな日本の温泉文化の構築を描こうとしている力強い息吹が感じられることである。そして、さらにその先頭に立って、当フォーラムにその一翼を担うことを期待する声の大きさに責任の重さをひしひしとを感じるものである。

感染症の代表であった天然痘の歴史を振り返ってみれば、奈良時代には大仏を造営してその撲滅を祈った歴史があり、1796年のジェンナーによる種痘法の開発を経て、1980（昭和55）年にはWHOによる天然痘世界根絶宣言に至るという長い歴史がある。また、1929年のフレミングによるペニシリンの発見に始まる多くの抗菌剤の発見により、歴史上パンデミックを来したマラリア・結核・コレラ・ペスト・赤痢などの多くの感染症に人類は打ち勝ってきた歴史がある。新型コロナを乗り越えることによって、その経験を糧にして、今後、温泉を取り巻く多くの分野に新たな変革が求められる時代が訪れても、それらの危機に対応する力を身に付けていかなければならない。来るべきpost coronaの時代に、我々日本の温泉人はどのような方向を目指して進むべきか、模索を続けるなかで、その羅針盤となるであろうことが確信できる本冊子が完成し、お届けできることは望外の喜びであり、ここにご執筆頂いた各位に深甚なる感謝の意を表するものである。

行政

(小括) 首藤 勝次

前・大分県 竹田市長

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 理事

コロナによって、日本はもちろん、世界の社会環境や生活環境は一変した。温泉地においてもその規模が大きい小さいかは別にして、経営的にも経済的にもかなり厳しい環境が強いられているのは全国同じであろう。テレワークやワーケーションに対応するための環境整備に腐心している温泉地も少なくないようであるが、そもそもこれまで主流だった短期滞在型の温泉地から、長期に『住むように滞在する』温泉地づくりへの移行がコロナを契機にして見出された新たな方向性ではないかと思う。新たなと言ったが、実はこれが温泉地の基軸の理念ではなかったかと私は思うのである。

もちろん、観光地としての魅力が大きい温泉地と長期滞在の心地良さを満喫できる温泉地の姿というのは、自ずとその手法が異なっていて当然である。

ここで、行政が果たすべき施策にも違いが生じるのは当たり前で、たとえば、自然環境整備は民間だけでやれるものではない。その一方で、民間の施設整備に公金が充てられるということにもならない。

いまこそ、官民がしっかりと議論して、温泉を持っている地域の目指すべき方向に対して合意形成することが大切だ。

行政の役割というのは社会資本の整備で、地方行政が国や県の支援を受けて個性的な魅力を創り出す努力をすべきであろう。並木の整備、遊歩道の整備、河川環境の快適さを創出する作業。これらは民間で投資し実現できるものではない。そして、もう一つ大切なのは、泉源保護という使命である。ドイツのバーデンバーデンの手法のように、カジノで得た収益を観光局が受け、専門のデザイナーが快適な環境を整備していくという役割分担。つまり、行政ができること、民間でなければできないことの棲み分けを認識しながら、50年、100年のスパンで温泉地づくりを考えることが大切だと提唱したい。

さて。これまで日本の温泉地は幾度となく流行に踊らされた。大型バスによる観光旅行の受け入れ合戦、インバウンドの誘致による経済浮揚と日本の伝統文化の喪失、そしてコロナ対応のワーケーションやテレワークの画一的導入。いつも経済だけに気を取られて荒ぶれてきた。個性ある温泉地づくりへのテーマはどこに葬られたのか。そしてまた、新たなブームに揺さぶられていくのか。

ところで。私は県議会議員を経験し、それから12年間基礎自治体の首長として温泉行政に関わってきた。市長になってすぐに導入したのが、『温泉療養保健制度』の

新設であった。世界的に見ても良質の炭酸泉が湧出する地域であることを背景に、温泉で健康づくりをすることの提唱を国内で初めて政策化した。3泊以上の長期の滞在に宿泊支援を行うというものである。1泊につき500円。4日間で2,000円が支給されるというもので、1か月でも、2か月以上でも同じように支援する。だから、高血圧・糖尿病などの患者や職業病を改善したいという来訪者に人気の出た制度である。もちろん、スポーツ合宿などをする青少年も対象で、そのほとんどが市外からの来訪者。その支援金の原資は何か。いつも、市長会などで聞かれたものである。正解は、入湯税なのである。もちろん、全国初の試みだったが、これが功を奏した。入湯税の使い道に新たな手法があることに自治体や、特に宿泊施設の経営者らが気が付いたのである。入湯税を新たな観光振興に役立てるというのだから、だれも文句が言えない。と同時に、温泉地で健康づくりを目指すというこれまた新しいスタイルが注目を集めることになったのである。

こうして、長湯温泉に世界で初めての天然炭酸泉のかけ流しによるクアハウスが誕生した。そして厚生労働省は、公衆浴場の御前湯とクアハウス、さらにB&G体育館をトライアングルで温泉利用型健康増進施設として認可した。クアハウスなどの施設整備には国の地方創生交付金が充てられ、さらに総合インストラクターの養成事業にも同様に交付金が充てられた。竹田市内には、すでに50人を超えるインストラクターがいる。

イタリアのアーバノ・テルメという温泉地では、友人マッシモがファンゴ(泥)による温泉治療に国の保険を充てるという制度を確立させた。

ここは加賀・山中温泉のかよう亭とパートナーシップ協定をしているが、わが竹田市がドイツのバードクロチンゲンと姉妹都市になっているように、世界に通用する個性的な温泉地を目指して、揺るぎない理念を抱いて歩むことこそ、日本の温泉地の進むべき道ではないかと、私はそう思っている。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

令和2（2020）年から全世界に拡大した新型コロナウイルス感染症の影響により、私たちの生活や価値観に大きな変化が見られると感じています。

首都圏への人口集中は、感染症拡大を前にした時、大きな弱点となりました。一方、地方は、リモートワークやワーケーションなどの多様な働き方に適していると再評価されており、地方へのオフィス移転やワーケーションの拠点活用などの試みも見られています。地方の人口減少という、これまでのピンチをチャンスに変えるため、多様な価値観に対応できる柔軟なまちづくりや地方の新しい役割が重要になっています。

また、コロナ禍の影響により、海外旅行ができないため、温泉地をはじめとした国内旅行の需要が高まり、普段、温泉地に訪れなかった方々も温泉旅館に泊まる機会が増えています。

コロナ禍の今だからこそ、日本のかけがえのない文化である温泉の魅力に触れていただけるチャンスだと思います。

2. 日本の温泉の今後のあり方

本市にある関金温泉では、平成23（2011）年の日本の名湯百選の選定を契機に、「観光」「介護」「健康」を連携させ、地域住民に多く利用され、親しまれる温泉地を目指す「プラチナプロジェクト」をスタートさせました。このプロジェクトの一環として、温泉に浸かりながら運動する「湯中運動」に取り組み、温泉を健康増進に活用しています。取り組み始めた当初は、行政が音頭を取って進めていましたが、現在では、リーダーが育ち、自主サークルとして湯中運動が続けられ、地元住民の方々の憩いの場となっています。

また、関金温泉周辺の豊かな自然、文化、食等を活用したウェルネスウォーキングを実施し、温泉入浴のみならず、温泉地での中長期の滞在モデルの創造も模索しています。

さらに、ラグビー場等の機能を有する関金総合運動公園を活用したスポーツ合宿、サイクリングなどスポーツツーリズムの受け入れ環境を整備し、関金温泉で心も身体も健康になれる国民保養温泉地「ウェルネス・リゾート関金」を目指していきたいと考えています。

人口減少、少子高齢化が一層進むことが見込まれるなか、高齢者が生きがいを持ちながら、社会活動に参加することの重要性が高まっています。温泉地で中長期滞在し健康増進に取り組み、温泉地が賑わうことを期待しています。また、健康増進をキーワードとしたスポーツツーリズム等を組み合わせた温泉地の創造による若年層などの関係人口の創出も目指しています。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

健康と温泉フォーラムは、12年間にわたり、月例研究会等を通じて、温泉の専門知識、温泉地の取り組みや課題の共有などにより、温泉地の活性化の方向性を示してこられました。

温泉は守る者がいてはじめて次世代に引き継がれていきます。本市にある関金温泉は、開湯1300年の歴史がありますが、歴史に幕を下ろさぬよう、温泉を守り、引き継いでいくため、地域住民の方々の御協力のもと、様々な取り組みを行っております。

また、湯中運動を始めて間もなく10年となります。参加者も歳を重ね、介護が必要な者も出てきています。小さな温泉地の小さな取り組みですが、続けてきたからこそわかる課題や成果もあります。健康と温泉フォーラムにおいては、これからも先進地や新しい取り組み等の情報共有をしていただき、温泉地の活性化を図っていただければと思います。

4. その他

近年、温泉旅行のあり方が、社員旅行等で利用する団体旅行型から個人や比較的小さなグループで利用する個人旅行型へとシフトしていることに伴い、温泉に求められるニーズも多様化しているように思われます。

今後、温泉地を活性化するにはその温泉地が持つ歴史、自然、食、文化等の地域資源と温泉資源を結びつけ、温泉地のテーマとターゲットを明確にして温泉地を創造していくことが重要ではないかと考えています。温泉地の持ち味を活かし、温泉ファンに巡ってもらい、温泉地全体で交流人口を創出し、日本の財産である温泉を盛り上げていければと思います。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナウイルスの感染者が国内で初めて確認されてから既に1年以上が経過し、未だ収束の目処が立っていない状況が続いております。これまでに経験したことのない不自由な生活を余儀なくされ、各事業者にとっては危機的状況の中で、感染拡大防止に努めていただきながら経営維持にご努力いただいていることと存じます。また、命がけで、最前線で働いておられる保健・医療機関の皆様にも深く感謝を申し上げます。

感染対策の決め手となるワクチン接種も医療関係者から始まり、高齢者へと順次接種が進められておりますが、今後もワクチンの安定供給が万全に進められ、早期に全ての方々への接種が完了し、社会全体でその効果が表れることを願ってやまないところです。

さて、本市にはご存知のとおり「鳴子温泉」「東鳴子温泉」「川渡温泉」「中山平温泉」「鬼首温泉」と5つの温泉地があり「鳴子温泉郷」として、環境省から国民保養温泉地の指定を受けており、毎年多くのお客様にご利用いただいております。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の拡大により、令和2年4月に緊急事態宣言が発令されたことから、4月・5月は観光客や宿泊客が激減しました。

まずは、宿泊事業者に対する緊急支援が必要であると考え、宿泊事業者への事業継続支援として鳴子温泉郷応援宿泊助成事業の実施とともに、旅館・ホテル・公衆浴場に係る水道料金及び下水道料金の減免、市有源泉使用料の減免を行いました。その後、国のGo Toトラベル事業などが開始されたことにより、11月頃までは徐々に観光宿泊客が戻ってまいりました。

しかし、本市の支援事業の効果も表れてきたところでの第2波、第3波によるGo Toトラベル事業の休止、更に令和3年3月に入ってから、宮城県内の感染者数増加に伴い県独自の緊急事態宣言が発令され、鳴子温泉郷においても昨年同様に観光客や宿泊客が激減し、再び各事業者等は窮地に陥り、厳しい現実を突きつけられている状況となっております。

今後も国に対し更なる支援をお願いするとともに、一日も早い収束に向けワクチンが全国に行き渡るよう併せて要望してまいりたいと考えております。

収束後は以前のように多くの観光客や宿泊客が鳴子温泉郷へ訪れ、温泉に浸かってゆっくりゆったりくつろぎ、健康になって日々元気に暮らしていただけるよう、改めて魅力ある温泉地づくりに鋭意努力してまいりたいと思っております。

2. 日本の温泉の今後のあり方

源泉は天然資源であり、枯渇しないよう常にメンテナンスが必要であります。

しかしながら、鳴子温泉郷においてもこれまで源泉を管理していた方々の高齢化や後継者の確保には苦慮しており、先祖代々から受け継がれてきた源泉を守り続けることは、容易ではない状況になっております。

鳴子温泉郷には、掲示用泉質名10種類のうち8種類の源泉が分布しており、この大切な源泉を守り続けていくためには、地域一体となって源泉の維持管理に努めていくことが最重要であります。

全国各地の温泉地で活躍されている技術者の方々との人事交流や実技研修などを行える体制なども、今後検討していく必要があるのではないかと考えております。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

コロナ禍で活動に制限がある中、毎回様々なテーマを考案され活動を継続いただいていることに感謝を申し上げます。

コロナ禍での移動制限や他公務と日程が重なり、なかなか参加が難しい状況ではありますが、オンラインでの開催や期間を設けての動画配信等の対応をしていただくことにより、皆様との情報共有が可能となりますので、引き続きご対応よろしくをお願いいたします。

4. その他

日本の温泉地は長らく治癒の場としての役割を果たしてきましたが、保養や休養の役割に加え、また特に戦後は観光地として発展してきました。

しかしながら、日帰り温泉施設の増加や旅行形態の変化、旅行者のニーズの変化等により多くの温泉地で来訪者や滞在時間の減少が生じております。また、過疎化、高齢化といった問題も抱えており、特に将来、地域の担い手となる若者の減少が顕著な状況となっております。そのような中、日本の温泉文化を後世に引き継ぐためにも、多くの方に温泉や温泉地の魅力を伝える必要があり、それらを伝えるためにも、温泉地から積極的に温泉の価値を高める行動が必要不可欠と考えます。

温泉地が昔のような賑わいを再び取り戻すためにも、ニーズの多様化に対応できる若手人材の育成支援や、温泉保護と泉質保持など魅力的な温泉地づくりのための自然環境行政の支援強化、また健全な温泉利用のモデルとして、各温泉地の主体的な取り組みを促すための支援策など、国の積極的な支援のもと、旅行の目的として温泉地での癒しが一位となるよう官民一体で温泉地の魅力を発信し続けることが大事ではないかと考えております。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

今回の新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ禍と略称）が全世界的に与えた影響について、医療・行政、産業変革、生活様式、国際政治問題に至るまで、これまで多くの識者やメディアで語られているが、私の関心はとりわけ、コロナ禍が人の心や価値観を根底から揺さぶる契機となったことが、今後の社会の在り様を大きく規定していくのではないかと。それがどのように変化していくのか。その点に集中している。

特にコロナ禍が私たちに対して、いのちや健康といった本源的な価値にあらためて気付かせ、近年臨界点に達していた経済グローバル化の様々なひずみを否応なく突き付けたことから、誰しもが幸福の定義を自問し始めたのではないかと感じている。

しかも今回はこの「幸福の再定義」の動きが世界同時に起きていることから、新しい考え方や価値観は今後数十年に及ぶような世界の潮流になると予想する。それがどのような社会につながるかは、私の乏しい想像力の及ぶところではないが、大きな価値観の変動の下で再構築されるであろう新しい社会というものは、少なくともこれまで私たちが過去の延長推計線上で考えていた進歩・発展の姿とは異なるのではないかと。

私自身は地方自治体の長として、確実に終息するまで市民の健康と生活の確保に全精力を費やすのは言うまでもないが、それを克服したあとに出現する世界に（誤解を恐れずに言えば）ワクワクするような期待感を持っている。

2. 日本の温泉の今後のあり方

これまで行政の立場で温泉政策に従事してきた様々な経験（成功よりも失敗の方が多いが）や今般のコロナ禍を通じて、温泉のあり方そのものについて反省を含めて考えるところが多い。まだ自分なりの総括に至っていないので雑感の域を出ないが、現時点で感じる反省点を今後の自身の取り組みテーマとして書き留めておきたい。

端的に言えば、これまで自分の温泉政策は視点を間違えていたのではないかと。多くの地方都市と同様に、菊池市は観光と農業が経済のエンジン。JRも高速道路もない本市ではとりわけ泉質の良い菊池温泉を観光集客の中心看板の一つとして位置付けてきた。これは言葉を変えれば、旅館業界を基幹産業として、そこから飲食業や運輸交通・物販へのトリクルダウンの経済波及効果を狙う考え方。

しかし、このことは旅館業界自体の競争力や体力に左右されることとなり、行政の立場での政策推進には限界がある。加えて今回のコロナ禍で宿泊客は激減して存続の危機にある。

一方でコロナ禍により菊池渓谷など本市の自然スポットは県外からの癒しを求める人が絶えない。また折からのアウトドアブームに拍車がかかり、本市のキャンプ場などのアウトドア拠点は活況を呈している。つまり、本市のお客がいなくなった訳ではなく、求めるニーズが明確に変わったということ。こうした新しい客層に共通しているのは癒しや健康を求めるニーズ。

こうした健康志向・自然回帰の動き自体は本市でも早くから観光戦略の中心コンセプトに取り入れており、8年前から本市のキャッチフレーズを「癒しの里菊池」と銘打ち、都市部の人々の「命の洗濯場所」として訴求してきているのもこうした考え。また、温泉宿泊と特定健診を結びつけたヘルスツーリズムにも官民連携で取り組み、一定の成果につながりつつある。

しかしながら、今回痛感したのは、温泉政策が観光集客の視点を中心に構築されていたこと。勿論、温泉による観光集客自体は決して間違いではないが、観光客向けの温泉活用が市民生活と切り離された別物になっていたのではないかとこの反省である。コロナ禍で観光客が激減した結果、無人の浴場から良質の温泉が空しくあふれ出る状況が出現している。

一方で、本市のまちなかには温泉を使った銭湯や老人福祉施設・家族風呂などが多数あり、温泉が日常の暮らしに溶け込んでいるといえる。しかし、温浴を積極的に市民の健康増進と結びつけたものは現在はない（かつて、湯中運動に取り組んだ時期があるが、現在は廃れている）。

温泉客のために健康増進策を考えるのではなく、市民のための温浴健康施策が共感を呼び、結果として多くの旅行者につながるといった、本来の王道に立ち返るべき時が来ているのではないかと。その思いが日々強まるばかりである（健康と温泉フォーラムの基本思想がこうした点にあることは承知しており、あらためて敬意を表します）。

この戦略はしかしながら地道で時間がかかり勇気のいる方策と言えるが、他方で背中を後押しするような環境の変化も窺える。それは観光に求めるニーズの変化である。先述の様に、豪華なホテルのおもてなしではなく、自然の中で自己解放感を求めるアウトドア型が急速に増えて来ているし、それ以外でも地域ならではの体験をしたいといういわゆるコト消費ニーズに変わりつつあることを実感する。更には、コロナ禍の副産物と言えるテレワーク型滞在も増加することが予想される。

こうした動きに共通するのは、「健康志向」であり、環境も含めた「その地域の暮らしへの共感」であると考えられる。世界の大都市生活を永年経験した後でふるさとにUターンした自身の経験から、日本の地方には都会に比

べ足りないものはいくつかあるものの、それを補って余りある豊かで魅力的な暮らしがあると実感している。

温泉はその最も重要な要素の一つであるが、それだけでは平板に過ぎると思う。そもそも、一日中温泉に浸かれるものでもない。私が思い描く今後の戦略は、「健康×温泉×グルメ×アウトドア×テレワーク×文化」これらを

うまく組み合わせて、菊池の日常的なライフスタイルに定着させること。そのための各論のアイデアは割愛するが、テレワークの様な長期間型滞在が想定される中では、様々なアクティビティと温泉との組み合わせがますます重要になると考える。

片山 健也

北海道 ニセコ町長

国民保養温泉地協議会 副会長

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

医療をはじめとする科学、研究への取り組みを「コスト」とみなして軽視、削減してきたことの反省の上に、国家としてこれらへの予算を拡充し、今後のパンデミックへの危機管理対策を強化していただくことに期待したい。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉の効果、効能についての研究への国の支援を拡充するとともに、健康維持や人々の暮らしの豊かさに資する価値について、広く啓発していくことが望まれる。

また、自治体においても、日本温泉協会や国民保養温泉地協議会などに加盟し、連携した温泉振興を実施するとともに、温泉の魅力や価値を内外に発信する必要があると思う。

近年、温泉ソムリエなど住民の主体的な活動が温泉の普及、振興に大きな力を発揮している。温泉をとりまく各種の団体の多様な活動を支援していくことが不可欠と思う。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

別府市が取り組んできた「温泉アカデミア」など、各自治体が実施する温泉フォーラムは、大きな効果を生んできているものと思う。また、竹田市の湯治への保険適用の取り組みも素晴らしい取り組みである。是非、全国各地での多様な挑戦が行われることに期待したい。

また、「健康と温泉フォーラム」が、世界に日本の温泉の豊かさ、魅力を発信いただけることに期待したい。

4. その他

パンデミック禍が今後繰り返される恐れもあり、温泉施設の衛生管理と入浴客のマナー向上も極めて重要と思われる。日本の義務教育の中に、温泉や入浴に関して学ぶ機会があると良いと思う。温泉を世界に広くPRするHPやプラットフォーム（AI活用型）が必要と感じている。

門脇 光浩

秋田県 仙北市長

1. 日本の温泉の今後のあり方

この春は、角館の桜まつりを何とか開催できました。昨年は行事の一切を完全中止しましたが、今年は桜や武家屋敷のライトアップ、歩行者天国などを中止し、静かに桜を愛でていただく縮小開催としました。来場者数は50万人と従来の半分以下でしたが、これからの観光事業は、お迎えする側と来訪者の協働作業になりそうです。ワクチンは切り札の1つに違いありません。しかし安全対策には何より両者の思いやりが不可欠です。

2. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

地元の温泉に通うことが当たり前だった日常、全国に誇れる温泉が周辺に多数存在する立地が、実は奇跡的な環境だったことをコロナ禍の中で強く感じています。この恩恵は広く分け合うべき資源です。社会に還元する手

法、健康増進の領域の高度活用等について、さらに医療との関係も併せた議論が国も地方も必要です。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

長く活動を重ねて来られた健康と温泉フォーラムに、心からの感謝を申し上げます。特に6年前、仙北市内で発生したカラ吹き源泉事故では、再発防止に向けた作業マニュアル、安全対策の各種取り組みで多くの知見をいただきました。これは健康と温泉フォーラムのネットワークの賜です。今後も温泉の未来を拓く中心組織であり続けて欲しいことを切望します。

4. その他

日本の湯治文化を世界遺産に登録する活動等もどうかご指導ください。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナウイルスによって、世界は物理的な「旅」ができなくなりました。現代社会においては、旅は現地にとっては貴重な財源でもあり、旅行者にとっては現地の生活を体験し、また交流を深める機会であった。その反面、オンラインという形式が発展し、周知の仲の者同士が議論をする機会が増えた面もある。

しかしながら、現地を訪れ、現地で交流し話を聞き、風土を感じることは「百聞は一見にしかず」であり、移動を伴う旅の重要性を改めて浮き彫りにしたと考えている。温泉地は古来から「人が集う場所」であった。温泉地は、あり方や形を変えつつも、これからも「人が集う場所」としての役割が求められる。

2. 日本の温泉の今後のあり方

これからの温泉地にとって必要なことは、「多様性」ではないか。温泉地は、その時々、世の流れで「湯治場→当初旅行の目的地→団体旅行→個人旅行」と、そのあり方を変えてきたが、これからの温泉地には訪れる人が持つ多様な目的を包含できる多様性が求められるだろう。湯に重きを置きたい人、現代医療からも見放されてしまった人、旅館を楽しみたい人など、様々な人が訪れることのできる温泉地が必要である。これは必ずしもハード面ということではなく、また1つの旅館、1つの温泉地で達成すべきものではない。温泉郷と呼ばれるように、広域単位で考えることも重要である。温泉地は、自然資源というものを背景に、食といった人間が創ってきた文化の融合された場所である。自然と人がベースにあることを忘れてはいけない。

また、温泉地はサステイナブルな場として、温泉熱、地熱発電といった地球規模の問題である気候変動にも深く関わる場であることを認識しておく必要があるだろう。

温泉政策については、国が大所高所から方針を決めるのではなく、地域のニーズへサポートできる政策が重要ではないだろうか。重要なことは画一的な方法論を示すことではなく、多様な温泉地のあり方を許容し、サポートすることである。行政の施策では、成功事例を

ピックアップして、その横展開をはかるものが多いが、優良な個々の取り組みをサポートすることが必要である。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

フォーラムの強みは、「強い想いの個のネットワーク」。これにより濃密な議論がなされ、様々な提言がなされていることに尽きます。これからの期待は、この濃密さを次代にどう受け継ぐかだと思っています。旅館においても、第2世代、第3世代と言われるようにフォーラムにおいても、大島先生の想いからはじまり、合田さんの熱量を第3世代にどう渡していくかがポイントです。テーマは、時代時代で変化していった当然なのですが、温泉地・温泉の本質を語れる場としてのフォーラムがあることを願うばかりです。そういった意味では、大小様々な温泉地や多様なバックグラウンドを持つ人が議論をぶつけ、語り合う機会が大事だと思っています（つまりとこる今の研究会ですね）。

温泉地で語らしましょう。

4. その他

課題は多岐にわたるが、万葉の時代から歌われる温泉地には、課題を超えていくチカラが備わっている。ただ、課題を超えていくプレイヤーは、あくまで「その温泉地を真剣に考える」人であり、その人達が集い、語らっていくことで課題が解決される。

温泉地は、古来から脈々と、湯も文化も受け継がれてきているが、その時代にあわせてあり方も変容してきている。特に旅館は、個別の事業者としての側面が近年は強かったが、個別の事業者という単位を超えて、地域という単位がより押し出されるべきだろう。近年では、地域で共同浴場を運営するといった動きが見られるが、温泉地がまるごと会社化されるような事例があっても良いと思う。地域会社（持ち株会社をイメージ）が温泉地全体を見ることで、より大胆な街づくりを実施、価格帯にも多様性を持たせた宿泊事業を展開、共同仕入れといったことが可能となるだろう。道のりは困難だが、例えば黒川温泉のように、地域のことを若者は真剣に考えている。こういった動きを支援していくことも必要だ。



1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

正直現場の状況を理解しておりません。行政からの目と承諾いただけたら現場からも状況を聞きたいと思っています。

2. 日本の温泉の今後のあり方

関わってきて、当温泉（豊富温泉）だけでなく全ての温泉についてそれぞれ個性が有り効果も違いますが、温泉の凄さ、重要性を日本の国民の方々に再認識を頂きたいと願うようになりました。「豊富温泉」がそれを牽引できる「力」を持っていますが、大先輩の温泉地に敬意を表しながら広めていく事が最も大事だと思います。（こ

れを踏み外さずに）全国の温泉地の皆さんと共に「温泉は地球から贈られた奇跡の水（である。）」（原案）を全国展開できないか願っております。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

健康福祉利用の現状、厚生労働省の温泉利用型健康増進施設認定からの利用数（月別・年次別）、その他の福祉の利用（例えば老人介護施設等での温泉又は温泉水利用-癒され等も-）があれば教示いただければと思います。又は現在までの課題やポジティブな改善・提言などもザックバランに教示いただければ…。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナのようなウイルスは人類発生の遥か昔から地球に存在して、生態系を維持する役割を果たしていたとも言われています。コロナの脅威は地球環境を破壊して全ての生物の生存環境への脅威となっている人類に警鐘を鳴らしているとも考えられます。ついこの前まで、当たり前と思っていたグローバリゼーション、飽くなき成長の追求が、強制的に鎖国的な生存優先のモードになってみて、市場メカニズムに全てを任せる今の社会のあり方に警鐘を鳴らしているとも解釈できます。アジア通貨危機を乗り切ったタイで、名君プミポン国王は「足るを知る経済」を主張し国民の統合を維持しました。全てを市場経済に委ねるのではなく、最低限の生活の安全保障は非貨幣的な倫理あるコミュニティが確保し、余裕の部分を市場に任せるという中庸の勧めでした。

今回のコロナ禍は以上のように、いままでの市場メカニズムの世界的な暴走と地球の生態系の維持のバランスをとることを人類に警告しているとも解せると考えます。

2. 日本の温泉の今後のあり方

日本の温泉は世界に誇るべき伝統療法の中核であり、予防医療、難病治療、終末期医療の領域ではもっと大きな役割を果たすべきと考えます。残念ながら明治維新以降の近代化、西欧化、第二次世界大戦後の民主化、国民皆保険の流れの中で、温泉療養は医療の世界から遠ざかってしまいました。しかし、世界の医療をみると、西欧医

学による対症療法に対して自己免疫力向上を目的として伝統療法を補完的に活用する流れも目に付きます。

特に、自然から遊離した現代生活の中で、人間本来の自己免疫能力が低下して、アレルギー症状、精神疾患、ストレスによる疾患などの現代病が深刻化しています。こうした現代病への対応として、先進国を中心に漢方、アロマセラピー、ヨガ、タイマッサージ、アーユルベダ、禅の西欧的な解釈によるマインドフルネスなど様々な伝統療法が補完的に用いられています。

例えばタイにおいては、1990年代後半以降、経済政策の中核にウェルネスリゾート化による健康・観光産業の振興を位置づけ、施設整備やホリスティックメディケーションの推進を行ってきました。これによって、タイは、インバウンド医療を含めた観光立国で一定の成功を収めたと評価されています。

ポストコロナ、ウィズコロナにおける日本のインバウンドの再開に当たっても、こうした事例は依然参考になると考え、インバウンド医療、日本の伝統文化としての温泉滞在なども組み合わせた振興策を考えていけるのではないのでしょうか。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

健康と温泉フォーラムは、これまでの月例セミナーの多様な講師、題名を一覧で見ても分かるように、温泉を取り巻く産官学医地の各界からのインプットを皆で討議して、今後の温泉療法や温泉地のあり方を論じてきたところに特徴があると考えます。特に、日本の温泉への一つのアイデンティティを維持しながらも、時代の変化の

中で、新たに取り入れるべき潮流を敏感に取り入れてきたことは誇るべきところではないでしょうか。

特筆すべきは、北海道の豊富温泉が乾癬、アトピーの治療に一部皮膚科からの推奨を得ていることを背景に、医師、患者、温泉、地域の関係者を招聘して連続して月例セミナーで議論を喚起し、温泉利用型健康増進施設基準の見直しへと繋げていった取り組みは具体的な政策提言を実現した例ではないでしょうか。

最近の潮流としては、ポストコロナ、ウィズコロナの時代において、リモートでの働き方が定着し、地方居住とリモートワークの連携、温泉地でのリモートワークやワーケーションなどが新たなテーマとなってくると考えられます。新・湯治セミナーなどで既に取り組んでいるところではありますが、今後、一層そうしたDXと温泉をテーマとして研究会を行っていくことは有意義であると考えます。

4. その他

日本の温泉の将来については、以上に述べたような様々なチャンスもあると考えますが、現下のコロナ禍の状況は温泉旅館の経営、温泉地のまちづくりに深刻な影響を与えています。

集団免疫が世界的に完成するまでは、当面は、コロナ感染が観光面に与える影響は継続することが懸念されます。この間に、どのように安全な温泉入浴を行っていくか科学的に、また温泉施設の経営的にも合理的なあり方を検討し、提言していくことが重要であると考えます。

東日本大震災による原発事故以降、放射能に関して誤解が蔓延した際に、ラドン温泉などの放射能泉に関するガイドラインを纏めたことなど良い例と考えます。

福井 崇弘

兵庫県新温泉町 おんせん天国室 室長

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

ニーズの多様化により、団体から個人へ、泊食分離、滞在の長期化など、温泉地の観光産業の転換が少しずつ進んできました。感染者がほとんど発生していない当地において、コロナ禍に対してもう少ししなやかな抵抗ができるかと思っていましたが、緊急事態宣言、一律に自粛、活動再開をムードで繰り返す状況は、地域の産業に大打撃を与え、為す術がありませんでした。受け入れ側もお客様も、実は従前と大きく変わっていなかったのではないのでしょうか。

一方、ワーケーション等、少数ですが滞在型の来訪者においては、交通機関の減便や飲食店の休業により不便をきたしたものの、テレワークを行いつつゆったりと入浴、散策を楽しむ等、三密のない生活・ワーク環境を上手く楽しむ滞在スタイルが見られました。

引き続き、滞在長期化、リピーター増を目指し、温泉が持つ癒し、くつろぎを最大限に発揮できる環境をハード・ソフト両面で整えていく方針に変わりなく、まちづくりを進めていきます。温泉・観光に携わる皆様の苦境は痛切に感じます。それでもこれをチャンスと捉えて推し進めていかなければなりません。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉で食物を湯がき、暖をとる生活が今も残る当地としては、温泉は、「湯」であり、「湯を使う生活」であり「湯を使う人々とその空間」であって、これを短期、長期に感じ、滞在・体験いただくのが理想的なあり方だと考えています。地域の生活や時間の流れを感じられる個性ある温泉地としてそれぞれが磨きをかけ、多様性に

富んだ「温泉地巡り」が楽しめるような各地の魅力づくりが進んでいけばと思っています。

過疎地の温泉が多く、人口減少による地域の衰退がそのまま温泉街の魅力喪失に陥っている現在、当地においても温泉街の空洞化は深刻です。住民生活と温泉振興はかつての観光公害による利害相反ではなく、来訪者の消費増によるインフラ維持・住民生活の利便向上の部分でベクトルを同じくする状況に変わってきました。地域振興・住民福祉と温泉振興の相乗効果が発揮できるよう、地域の企業・住民・行政の連携強化が求められているように思います。

併せて東京から地方への人の流れの創出の観点で、温泉街は、観光地としての一定の基盤もあり、住民プラス来訪者の比較的大きな商圏をターゲットに小さな投資で成功し得る、スモールビジネスの拠点としての潜在力が高いと考えます。ワーケーションなどの滞在型来訪者も、複業目的の二拠点居住や移住につながる可能性を秘めており、関係人口を獲得する強力なきっかけとなりえます。

人口約1,000人の当温泉地に、コロナ禍のこの半年の間に、移住者を含めた3軒の飲食店が開業しました。温泉を関係人口増大のツールとして多面的に活用すべく、観光、定住、企業誘致等、行政においてもセクション間の連携が重要になっています。

環境面においては、温室効果ガスの削減効果についてもっと評価し活用していくべきと考えます。当地でも冷暖房や入浴、配湯システムなどの熱利用を行っています。イニシャルコストのみの補助では継続が難しく、既存施設の更新に苦労している状況があります。電気の買取制度のように、熱利用の継続性が高まる仕組みが必要です。

また、浴場については、LGBT、障害がある方、外国人、あらゆる利用者の存在を前提とし、温泉の文化を守りつつ皆に楽しんでもいただける温泉として、その提供方法を改めて考える必要があります。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

温泉振興にかかる施策を企画・実施していく中で、経済性にとらわれすぎて温泉そのものの意義を置き去りにしがちに（私は）なります。幅広いながらも、温泉の価値を見失わない「健康と温泉フォーラム」のご研究、また発信頂ける情報は非常にありがたく感じています。運営に携わっておられる皆様に改めて心から感謝申し上げます。

引き続き少しでも多くのことを学ばせていただきたく、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

4. その他

「温泉に行こう」「スキーに行こう」と並列して表現できるほど温泉のイメージは癒し、懐かしさ、賑やかさ、露天風呂、豪華な食事等、皆が共有できるものでした。しかし現在では温泉も多様化し、もはや「賑やか」でなく「ひなびた」のイメージが強い人が多いのかもしれませんが。そして次に失われるイメージは「癒し」「懐かしさ」であっても何ら不思議はないと考えます。

消費の多様化から「温泉」ではなく「○○温泉に行こう」となるのは当然の帰結ですし、実態として価値提供がなければイメージを失うのも当然です。癒しや懐かしさなどの価値を提供する主体である「地域」を、過疎化が進む中でどう維持していくかが課題です。

藤永 義彦

株式会社SD-WORLD 代表取締役

元・山口県長門市経済観光部 観光課長

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナウイルスの蔓延は全国各地、いや世界中の観光産業に計り知れないほどの影響を与えている。ここ依山温泉においても、宿泊客は一昨年の3分の2程度に落ち込み、旅館経営を圧迫している。幸いにも外湯文化の残る依山温泉では積極的にインバウンドに取り組んでこなかったため、渡航禁止等による影響は些少なものの留まっている。

依山ではコロナ感染者は皆無であるが、昔からの湯治場としてファンは多く、北九州や県内山陽側の各市など感染者の多い地域からの入湯客は後を絶たない。温泉関係者をはじめ、我々のような飲食や宿泊業もかなり神経質になっているが、それでも感染者を出さずに済んでいることは、温泉による免疫力の向上と何かしら関連があるのではないかと考える。

草津温泉には新型コロナウイルス感染を抑える高い効果があるそうだが、全国的に効能の高い温泉地でのコロナウイルスに対する効果について検証してみたら、その関係性について新しい発見があるのかもしれないとさえ感じている。いずれにせよ、コロナが早期に収束しなければ業者の廃業が加速してしまう事態ではあるが、終息後の温泉地の取り組みについては今のうちから協議しておく必要があり、インバウンドも含めて、10年後の方向性について温泉街全体で話し合いを進めている。

2. 日本の温泉の今後のあり方

日本では、古くから温泉と健康の結びつきがとても深い。農村の人たちは農繁期が終われば、湯治と称して1週間近く温泉地に滞在し、心身の疲れを取り、健康の回復を図ってきた。依山でも昭和40年代くらいまで湯治客で賑わい、宿も自炊可能な簡易的な宿泊施設として

成り立っていた。現代のライフスタイルにおいてこのような旅ができる人はいない。湯治であっても逗留期間は短く、快適さを求めるようになってきた。その変化に対応できなかった依山では、入湯客が右肩下がり、旅館や商店も廃業が続くなど、温泉街の活力は急速に衰えている。

しかしながら、効能の良さを知る高齢者や、以前家族で湯治に来ていた子や孫など、依然として依山の湯に対する人気は高い。トロトロのお湯に浸かり体の芯まで温めて、うちの店で冷えたビールを飲み干すお客様は、「この湯は日本一だ」と言う。成分分析を見ても何の変哲もないアルカリ単純泉だが、入湯客の経験値として体に良い、健康になる温泉だと認識をしている。そんなお客様が非常に多い。

日本は屈指の温泉大国であり、日本人は無類の温泉好きだ。温泉街への需要は減少しても、温泉へのニーズは不滅であろう。環境省では「新・湯治」と称して、温泉街も含めた周辺の地域資源を楽しみながら温泉地に滞在することで心身ともにリフレッシュすることを提案している。つまり、ストレス社会の中で体のケアだけではなく、異なる環境に身を置くことで本来の自分を取り戻そうという取り組みだ。となれば、温泉街や周辺環境も含めたレベルの高い温泉地を構築する必要がある。依山は国民保養温泉地としてその環境はお墨付きである。入湯客の声もそれを証明している。

コロナ禍のなか、元気を失いかけている温泉街が独自で再生していくことは困難であり、国策として温泉地の活性化、観光振興策の支援が必要である。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

私は、俵山の湯がなぜ健康づくりに効くのかを証明すべきだと考える。医学的、科学的見地からの検証が必要だ。そうすることで温泉療養に対する医療費控除への道も開けるし、もしかしたら、湯治に医療保険を適用できる仕組みが整備されるかもしれない。結果としてお客様の増加も見込まれると思うからだ。ところが、温泉街の中には、そこに経費をかけても勿体ないという意見もある。何故かしら体に良い、ミステリーこそが魅力。湯治で勝負する時代ではない。ワーケーションやリトリートを取り入れつつ、新たなターゲットを開発すべきということだ。

いずれにしろエビデンスを掴んでおくことは無駄ではない。行政などからの支援があれば理想的だ。健康と温泉フォーラムには、見識ある人材が豊富におられる。コロナ禍が去った暁には、地方の温泉地で研究会などを開催され、地域の人たちに必要性を訴えけるとともに、温泉療養に対するエビデンス調査への道筋をつけていただくことを期待する。

4. その他

日本は温泉大国であり、日本人は無類の温泉好きではあるが、コロナ禍と人口減少社会に突入した現在では、どこの温泉地も観光客でにぎわう時代ではない。お客様のニーズにマッチした温泉地が残り、残念ながら淘汰される温泉地もあるのではないかと考える。

俵山温泉と隣り合わせに位置する長門湯本温泉は、星野リゾートが進出するにあたって街づくり計画から関わり、素敵な温泉地に再生された。星野佳路代表が言われるには、人気の出る温泉地は3つのパターンで、①圧倒的な温泉資源を有する、②歴史資源で人が集まる、③自然を生かした魅力的な温泉街を持つ、のいずれかだそう。

俵山は自然豊かで、昭和レトロな温泉街、そして抜群な泉質を誇っており、③に該当するはずである。近代的な建物や街づくりがされる温泉地が多い中、昔ながらの雰囲気を残しつつ、自分で仕事や遊びをクリエイティブに人々をターゲットとして、何とか生き残りを図りたいと考えている。

松浦 弘幸

鳥取県 三朝町長

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

令和3年の今も新型コロナウイルス感染症は、収束の願ひかなうことなく感染拡大の渦中にあります。住民生活、観光サービス業等への、多様な対応を迫られる中で、何かを批判するわけでもありませんが、我が国の社会や医療の構造、更には有事に値するコロナ感染症渦中における課題が明らかになり、これまでの社会の仕組みについて大きな不安と不満を抱く町民の声が絶えません。

三朝町は、コロナ禍の一年を、町民や観光事業者の徹底した感染防止対策の努力によって陽性者ゼロで乗り越えております。この間、地域経済を維持するために、観光誘客では、近隣県域をエリアとした誘客対策を図るほか、観光事業者の雇用を維持するために農業などの業種との雇用連携を進め持続のための方策を講じて参りました。引き続きアフターコロナの観光動向にも着目しながら、ワーケーションやテレワークといったことへの環境づくりを図って行きます。

2. 日本の温泉の今後のあり方

三朝温泉は、1164年に白い狼によって発見されたと伝えられ、1916年には三朝温泉のラジウム含有量が世界屈指であると認定されました。1955年には当時、遊興・娯楽の施設に重きを置くことなく、健康増進・保養湯治の落ち着いた温泉地を温存するという国民保養温泉地を選択、湯治場として温泉街を形成し1955年～

1969年まで入湯客を大幅に伸ばし発展した歴史があります。

三朝町では10年ほど前から、三朝温泉の原点に戻る温泉地づくり「現代湯治」を始めました。三朝温泉＝ラドン温泉の発信が大きなテーマであります。町では、2007年から岡山大学、日本原子力研究開発機構と連携しラドン温泉の効果研究調査を実施しております。このことは、今から80年ほど前（1939年）に、岡山医科大学の温泉研究所（その後岡山大学温泉研究所、三朝医療センターへと再編）が三朝の地に開設され、それ以来、疾病治療をはじめ、温泉治療を特徴としたプログラム、温泉の医学的効果研究が進められてきました。ラドン温泉療法は医療として現在に受け継がれており、今も研究が継続されております。超高齢化社会が現実となった今、健康寿命を延伸する対策を考えたとき、温泉を介護、福祉等に活かす社会的活用が、地方創生の中では観光利用と並ぶテーマであり、温泉地の持続的な発展を図ることにつながるものと考えます。

さて、2008年、三朝町での健康と温泉フォーラム「医療と地域の連携」が現代湯治へのキックオフとなり、10年後に開催した本町での「温泉地から始まる健康づくり」をテーマとした健康と温泉フォーラム2019では、観光地として、競合関係にあった全国の温泉地が、限られた資源である、温泉を地域の資源として、有効に活用するために、自治体のみならず産官学が立体的に連携することを提唱いたしました。

昨年の夏に、三朝温泉街の中心に、温泉療法を誰でも体験できる天然ラドン熱気浴泉「すーはー温泉」がオープン。これは、岡山大学三朝医療センターが治療を行っていた温泉熱気浴治療施設を譲渡していただき、同じシステムのまま改築整備したものです。現在は、コロナ禍の中で利用制限をしながらの運営としておりますが、健康増進や病気療養といった方々に利用していただいておりますし、ラドン温泉のファンを育てていく温泉施設として大きな期待を寄せているところです。さらに、この施設内には、近代温泉医学の第一人者として活躍され、三朝の地で放射能泉の研究でご活躍された、大島良雄先生の著書を温泉医学文庫として設置しています。三朝温泉にとっても温泉研究の歴史の貴重な財産となっている1983年（昭和58年）に発行した三朝温泉誌の学術編は、大島良雄先生の執筆によるところであります。

このようなことから、私は、町にある温泉資源を生かし、そしてラジウム・ラドン温泉地広域連携からの学びも活かしながら、令和3年度、温泉利用型健康増進施設を核とする「三朝町メディカルwithフィットネス事業」の構想提案をいたしました。観光関係者における、これまでの健康と温泉フォーラムを通じての合意形成の果実、また、三朝温泉での現代湯治の実践、ラドン温泉の健康効果研究の成果、温泉療法への期待などの、三朝での様々な過程を集約して新たな健康づくりを目指したいとの思いから生まれたものであります。

三朝温泉の将来の振興を考えたときラドン温泉の特色を人々の健康増進、地域の医療との連携、高齢化社会における地域課題への対処と併せて、三朝温泉が健康保養を標ぼうする温泉地として展開を図って行くことを求めています。温泉観光地としての賑わいは、旅館をはじめ観光サービス業を営む町民の活力を拡大させながら多様な魅力を発信しなければならないと考えます。

先に紹介した温泉を活用した健康づくり全国大会2019・健康と温泉フォーラム2019 in 三朝町では、温泉を活用した健康づくり広域連携会議三朝宣言が採択されました。その宣言を文末に紹介します。

この宣言内容は、国内のラジウム・ラドン温泉地、また温泉を健康増進に活かし個性的な温泉地づくりを新たな戦略とする広域連携を着実に進めるという私の目指すところでもあります。

日本遺産に認定された、三徳山とラドン温泉、国の重要無形民俗文化財の大綱引き「陣所」、数々の郷土芸能、そしてラジウムの発見者キュリー夫人を讃えるキュリー祭は、多くの人々によって継承された温泉地三朝の文化であります。いつの時代にも温泉は天与の恵みとして感謝を忘れてはならないと思いますし、人と風土、その魅力を創造する不思議な水とも楽しく向かい合っていきたいと思います。

温泉を活用した健康づくり広域連携会議三朝宣言

本日、私たち、全国屈指の温泉地代表は、日本遺産の地、三朝温泉に集結し「温泉を活用した健康づくり広域連携」をテーマに産官学の多様な視点で論議し、温泉の健康・福祉などへの社会的活用可能性とその課題を共有しました。

超高齢化社会の中、健康寿命の延伸、医療費削減など社会保障政策の基盤要請によって、温泉地活性化は急務であり、全国の温泉は自然の恵みとして、また風土・風習の重要な社会文化遺産としても益々評価されなければならないと確認いたしました。

人々の身体や心を癒してきた日本の伝統的湯治文化が、今世界から注目を浴びている中、同じ志を持つ全国の温泉地が、地域の枠を超え、国や自治体そして関連する学会や団体と連携して、自然と調和した豊かで活力ある温泉地づくりを市民と一緒に推進することを新たな決意として、ここに宣言いたします。



旅館

(小括) 大沼 伸治

百年ゆ宿 旅館大沼 五代目湯守

東鳴子温泉観光協会 会長

特定非営利活動法人東鳴子ゆめ会議 理事長

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナウイルス禍はワクチン接種の遅れもあり、発生より1年経過した今も収まる気配はなく再拡大の様相さえ呈している。こうした状況が1年以上も続くことで、旅館業界においても経営に重大な影響が及ぼされていることは疑う余地もない。

こうした状況に対して「メディア、マスコミの過剰な報道が恐怖と不安を与えている」（一條氏）との声や、「観光産業は安心・安全産業である」（鶴田氏）としコロナ禍の長期化が業界の大きな阻害要因になっているという指摘があった。コロナ禍の影響でインバウンド需要はほぼ消滅しているが、「インバウンドが消滅するリスクは今後もありうるが、それでもインバウンドの重要性は変わらない」（中道氏）という意見や「心が折れないように声をかけあっている」（大関氏）という地域の現状も届けられた。また、長期滞在の現場においては「交流があまり見られなくなったことを非常に懸念している」（畠山氏）とあり、コロナ禍は滞在療養型の客同士のコミュニケーションにも影を及ぼしている。Afterコロナ、withコロナにおいて旅館（業界）がどうあるべきかについては「日ごろの清掃と殺菌をより一層丁寧に行うことをこころがける」（石松氏）という基本的な事項から、「昭和型観光からの脱却のチャンスととらえ、次の100年に向けての温泉地づくりと温泉活用の考え方を変えてゆくべき時だ」（河津氏）という意見、「生き残るためにもう一度原点に戻る必要があるのではないか」（林氏）、「個別の宿として未来を明るくするために自社の『旅館経営の方程式』を発見すること」（倉沢氏）などが挙げられた。

2. 日本の温泉の今後のあり方

日本の温泉の今後のあり方については、様々な角度からの意見を頂戴した。入湯税の扱いは地域によって違いがある。その使い方の方向性について「入湯税については一般財源に入っているところが多い。目的税としての基本ができていないので、今一度議論する必要があると感じる」（一條氏）や「入湯税はキャンペーンでなく街の景観整備に重点を置いた活用が必要」（中道氏）との意見があった。また温泉資源を活用した地域内外に対する健康増進等の取り組みなどにおいて、行政の縦割り組織の壁があり「なかなか理解してもらえない」（林氏）などの意見もあり、氏もふれている大分県竹田市の首藤前市長のようにトップ自らがリーダーシップ力を発揮す

ることも大胆な事業展開には必要であろう。温泉や湯治の効用に関して、温泉をより国民の健康や地域活性化に役立てるために「温泉を正しく理解して幅広い人々に浸透する」（内藤氏）ことや「お客様のより深化した深層心理にある不安を具現化し温泉力や地域資源を発揮し解消する仕組みを作る」（小山氏）ことの必要性に加え、「湯治の効果として温泉入浴等に加え精神的に安定することも必要」（畠山氏）、「心を病んでいる現在、湯治の役割は飛躍的に大きなものになるだろう」（河津氏）といった＜心の湯治＞の必要性を強く感じている意見も印象的だった。コロナ禍を経験している中、今後の温泉のマーケットや動向に関しては「グローバリゼーションは止まらないので欧米圏の富裕層をターゲットにした2泊以上の滞在を狙いたい」（中道氏）というインバウンドの回復後のマーケットを見据えた意見もあれば、コロナ禍の影響で一気に進んだリモートワークの流れから「滞在系マーケット創出の可能性が高くなってきた。今後温泉地でウェルネスのための長期滞在の可能性がみえてくるかもしれない」（鶴田氏）といった意見も出された。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

フォーラムへの期待や提言としては「コロナ禍明けにどのような、温泉地滞在系のマーケットが生まれてくるのか、今こそ研究してゆく必要がある」（鶴田氏）、「リゾートワークはニーズにマッチしていないのでマッチしたリゾートワークを提言してほしい」（大関氏）といった今後のマーケットに関する意見や、「入湯税の活用方法に関する討論・意見交換の気運の醸成に動いてほしい」（内藤氏）という意見が出された。また、企画が素晴らしいので「これからの時代を担う学生や若者たちにも気軽に受講できるようにしたほうが良い」（大沼氏）といったフォーラムを次世代へどのようにつないでゆくかについての提言もあった。

他にもフォーラムの活動について「温泉を営む人と色々なスキルを持った人が『温泉で日本をどう変えられるか』という共通の意志と意識を持ち語り合える場が必要です。その場がフォーラムです」（小山氏）、「月例研究会の課題、テーマを見せてもらい大変充実していると感じた」（中道氏）などの意見が出された。

4. その他

「温泉は自然からの恵み」（中道氏）であり、自然そのものと言っても良い。温泉に浴してさっぱりする（禊

ぐ)ことは八百万に神が宿ると考える日本人の自然観に通じる。世の中の移り変わりにしたがって温泉の利用法も変わってきた。その時代その時代の日本人の心身を、温泉が支えてきたことは歴史が証明するところだ。「ジェンダーをはじめとする利用側の多様性」(河津氏)、「脱炭素化の掛け声とともに源泉を脅かす地熱発電の開

発」(畠山氏)、新型コロナウイルスのような疾病の流行等温泉や温泉施設を取り巻く環境は様々だ。混沌とした時代の中、私たちは「定番、オールド」(一條氏)といった伝統の良さを踏まえつつ、訪れる未来も飲み込みこんだ新しい温泉観を人々に提示しなければならない瀬戸際にある。

石松 裕治

有限会社石松農園 岳の湯・地獄谷温泉 裕花 代表取締役
わいた温泉組合 組合長

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

私たちは温泉業にて生業を立てさせていただいております。温泉とは本来、ご利用いただくことで、健康を増進するものでありますので、施設利用時に感染症に感染させてしまうのは本末転倒でありますので、日ごろの清掃と殺菌をより一層丁寧に行うことを心がけるようして参りました。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉の成分が定期的に変化するよう、温泉を取り巻く環境も変化すると思われます。私たちのような温泉業

を生業とする者は、難しく考えず、その流れに任せて共存していく柔軟さを併せ持つ方が自然ではないかと考えています。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

日頃から温泉業界のことを考えて頂き、いろんな知恵を頂き感謝申し上げます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

よりたくさんの方に携わって頂き、より多くの知恵をお借りできますことを期待いたします。

一條 一平

合資会社一條旅館(時音の宿 湯主一條) 代表社員

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

メディア、マスコミの過剰な報道が恐怖と不安を与えていると感じています。

恐怖と不安はストレスを与え、それが蓄積することで免疫力も低下します。

温泉はストレスからの解放と、自然治癒力そして免疫力を高めます。

健全な温泉の利用は人々の活力を向上させ、経済も活発にさせると考えます。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉についての法律がありますがかなり前のもので、現代に沿うものなのか疑問です。

また旅館の廃業や休業で源泉が活用されていないものについては、行政や地元温泉組合などが主体的に管理できるようになるといいのですが、地権者が絡んでいるので難しいでしょうか。

入湯税については一般財源に入っているところが多いようです。当市(宮城県大崎市)においてもそうです。目的税としての基本ができていないので、いま一度議論する必要があると感じます。

4. その他

新型コロナウイルスの影響で、変化が求められるようになりました。これまでは大型旅館がメインで発展してきたように思われがちですが、木賃宿→湯治→レジャー→団体→インバウンド・・・のような流れを汲んできたと思います。新型コロナで一気に個人にシフトしました。安心・安全・騙されたくない・損したくない・新型コロナに感染したくないという旅行者にどう対応して行くか。まさに小規模、個別対応、高付加価値、そこに行かなければならない理由付けができるところが息の長い商売になると感じます。まさに温泉の定番といったところでしょうか。流行り廃りがない、スタンダードがいいのでは？

コンビニに行っても残っている商品は昔からあるもの。古いということ、オールドというのがとても価値あることだと思います。温泉はまさに古くからあるもの、定番、オールドです。それをどう活用するかがこれから求められるのだと思います。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

湯田中温泉は1400年近い歴史をもち、様々な疫病、天変地異、戦争を乗り越えて、脈々とつづいてきました。先人たちがどのように歴史的難局をのりこえてきたのか、子供のころから不思議でした。まさかこのような事態に自分たちが置かれるとは思ってもいませんでしたが、日々同業の先輩、後輩、業者さん、お客様、地域の皆様と、心が折れないように声をかけあっています。単純な事かもしれませんがこれにつきと感えています。

2. 日本の温泉の今後のあり方

数年前から源泉地の管理の役職を受けていますが、温泉は自然のもので、日々の管理に気を使います。また当組合は当初は12軒で管理していましたが、人口減少の影響で、今は実質4軒4人で管理していますがそのうち70代以上が3人です。またパイプ等の交換をする業者さんもおなじような状況で、これから先の管理に非常に不安を感じています。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

テレワークの普及と盛んに言われていますが、実際にはテレワークのほうが精神的にはストレスを感じるようです。またリゾートワークは、既存の現地体験プログラムを焼き直しただけで、ニーズにマッチしてないような気がしています。そこにマッチしたリゾートワークをご提言いただければ幸いです。

4. その他

今はまだ、目先の問題としてコロナ対応に国も企業も地域も気を使っていますが、二年後三年後のほうが、経済的な部分を含め、様々な問題が起こると推測されますので、地方の温泉地への長期的な活性化プロジェクトを考えていく必要があると思います。人口減少が進む地方では、観光業が衰退すると、人の動きが止まり、地域の力も衰えていくことをこの一年改めて感じました。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナウイルス禍は宿泊業界に大きな影響を及ぼしました。10年前に起きた東日本大震災の時も甚大な影響を受けましたが、目に見えない脅威と先行きへの不透明感において全く異質のものです。移動を制限されるということは温泉地に行けないということであり、いくら良い温泉が湧いていても意味をなさない状態です。こうしたパンデミックが起きるといことは想定外でしたが、今後はこうした事態もあり得ると覚悟して旅館や温泉地経営を進めてゆく必要性を感じます。よくアフターコロナ、ウィズコロナなどと言われますが、コロナ禍前の世界に戻ることはないほどの社会変革が起きたことは事実です。このことをわが温泉業界としてどうとらえてゆくのか、コロナ禍とつきあいながら探ってゆくしかないと考えています。

2. 日本の温泉の今後のあり方

日本の温泉の今後のあり方について、改めて「温泉」とは何かということをそれぞれが認識することから始めなければならないと考えています。いうまでもなく日本は世界一の温泉大国であり、日本人は世界一温泉の好きな民族です。我々が当たり前に享受している温泉は自然そのものであり、自然の循環が狂ってしまえば温泉の利

用も叶いません。温泉に携わる人たちが都合の良い温泉利用だけに終始していることで、温泉の本質が忘れ去られることを危惧します。温泉の社会的活用や温泉（宿）地経営、温泉文化の保護に関してはまず自分が置かれている環境においてまず何を軸にして取り組むかを明確化する必要がありますと考えます。正直申し上げて私どものような細々と小さな宿屋を営むものにとって、多くのことに取り組める余裕はありません。物事を自社のみに限定して考えるのではなく、業界内外を問わず様々なジャンルの方々と連携してゆくことによってはじめて見えてくる地平線もあるかと思います。幸いなことに湯治場は昔から人や情報のプラットフォームとして成り立っていました。情報化社会の現代だからこそ、リアルな自然や温泉をベースとしながらも人と人の触れ合いやつながりを醸成してゆくことがより可能であり、そこに温泉の未来も拓かれると考えています。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

長年にわたり、健康と温泉にかかわる諸問題に対して様々な専門家団体、観光サービス関係者、自治体そして市民を巻き込み世の中に多大なサジェスションを与え続けてこられたことに心より感謝と敬服の念を捧げたいと思います。

毎回素晴らしいゲストをお招きしての月例研究会の課題やテーマは秀逸で、まさに時流をとらえながら温泉の考察を重ねられていると感じております。

毎回これだけ素晴らしい企画を催されているので、年に何回かはこれからの時代を担う学生や若者たちにも気軽に聴講できるようにすると良いかと思いました。

すでに行われていると思いますが、オンライン配信を使えばより多くの人が気軽に聴講できますので、是非若い世代にも素晴らしいお取り組みを聴講する機会を。

4. その他

コロナ禍で歴史はまた新たな転機を迎えました。人類は狩猟・採取の生き方（分散社会）から農耕、定住の生き方（集中社会）へと移行してきました。その「集中」社会が加速する中でコロナ禍が起きたことはまさに時代の転換を象徴しているかのようです。

日本中にある温泉地の数は3,000か所を越えると言われておりますが、人生100年時代と言われる現代において、心身の健康を創出しながら自分らしい生き方ができる場として温泉地は大きな可能性を持っていると考えています。

その主な根拠の一つがインターネットの発達です。ネット環境があればどこでも仕事ができるようになりました。ワーケーションという言葉が生まれ、一部企業による導入の兆しもあるようです。しかしながら温泉地でも仕事ができるワーケーション自体まだ話題が先行しているくらいもあり、ワーケーションが日本にしっかりなじむまでには制度上の問題をはじめクリアしなければならないことも多くあります。

とは言え、ネットをはじめとしたテクノロジーの発達は現在のリモートワーク的な働き方を超えて、産業全般を変えてゆくことになるでしょう。

人間が生きてゆく上で最もベースとなるのが心身の健康です。いくらテクノロジーが発達しようとも人間という生物はそれに合わせて急に変化するわけではありません。今後、急速な時代の流れと人間生活の間に生じるひずみが様々な問題を引き起こしてゆくことでしょう。

そうした時に、人間は自然そのものである温泉に抱かれて心身を調整する必要があります。昔、湯治が人々の暮らしの一部だったように、現代においても温泉を大切に、上手に暮らしに取り入れてゆくことがより良い人生を生きてゆくために必要と考えます。

河津 誠

有限会社地獄温泉 青風荘 代表取締役社長

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

インバウンドや観光頼りの温泉や宿泊施設の営業は、感染症や紛争、世界的な景気の悪化などでもろくも崩れ去ることが露呈された。コンサルと共に考えるような短期中期の事業計画も無意味とさえいえるほど脆弱なものとなった。今こそ、昭和型観光からの脱却のチャンスととらえ、次の100年に向けての温泉地づくりと温泉利用の考え方を変えていくべき時だ。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉の価値を「見える化」することが必要だと思う。考え方としてはフランスのワインやチーズのようなAOC（アペラシオン・ドリジヌ・コントローレ）のような法的認証制度を導入すべきと考える。温泉や、それに伴う宿泊施設等の最終的な品質評価において、特定の条件を満たしたもののみに与えられるものとして、ミシュランガイドなどに荒らされることのない日本独自の法的温泉評価基準を設けるべきである。

コロナ禍にあって、この先は湯治が見直される時代が来る。体の傷や痛みはもちろんコロナ禍で多くの人が知

らず知らずのうちに心を病んでいる現在。湯治の役割は飛躍的に大きなものになるだろう。しかし、今までやってきたような湯治のコピーを繰り返せば繰り返すほど、そこに挑戦のないコピーは劣化の一途をたどるだろう。コロナ禍という大きな波を、今までを変えるチャンスととらえて積極的に挑戦し未来の湯治を描き進むべきだと思う。

特に若い人々に対して、長年築いてきた湯治文化を引き継ぐためにも、彼らの時代を想像しながら今を一歩ずつ進めていくことの大切さを感じている。

4. その他

今後の温泉利用のもう一つの課題として、今までの温泉施設が単に性別だけで2つに分けられていることに疑問を持つべき時代だと思う。ジェンダーの問題への取り組みは重要で、今後、進むであろう社会の多様化へ温泉地自身が対応していく上で重要な課題だと思う。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

コロナ禍の中で今できること 旅宿上松や六代目

今から38年前私が33歳のとき1983年11月18日に新生上松屋旅館新築オープンしてから444ヶ月経過中です。2019年は台風19号災害で上田電鉄別所線千曲川赤鉄橋が崩落し、その風評被害により10月は売上高がワースト6位、人数ワースト3位でした。

その5ヶ月後、新型コロナウイルス感染症禍に突入し、ダブルショックとなりました。2020年5月はすさまじいお客様の減少で、猫しか歩いていない温泉場と化しました。7月には県民割クーポン券があり、前年とほぼ同じ売上高に戻りましたが、8月は前年比5割と先行き不安が続きました。

9月よりGo Toトラベルでステイナビ等予約受付が効力を発揮し、別所温泉『松茸王国』の観光資源松茸ブランドそして「レイラインがつなぐ『太陽と大地の聖地』〜龍と生きるまち 信州上田・塩田平」日本遺産認定が相乗効果を醸し出し、10月売上高は歴代5位（前年はワースト6位）を記録しました。因みに歴代1位は長野五輪の年、1998年のことでした。このコロナ禍の体験でたくさんの前向きな課題が発想され、いつ終息とも判らない事態に光が差し込んだ実感でした。

しかし、感染がさらに拡大し12月28日から2021年1月11日までGo Toトラベル政策は一旦停止となってしまう、多くのキャンセルが発生しました。その後、長野県

の県民支えあい 家族宿泊割キャンペーンが開始され、2月末には家族規制が解除されました。おかげで3月には売上目標を上回る水準に回復しました。特に創業152年を記念した覚書企業を中心とするコロナ除菌装置を駆使しての営業が実りつつあります。そして4月からは38年前（1983年）に発した顧客囲い込み作戦『信濃路の村談話会』で紡いだネットワークを視野に入れた長野圏内の営業に主力を注いでいます。

Go Toトラベル再開未定の状況で不安ですが、落ち着いてインバウンド整備、社員教育、ハード整備、ひとり旅への特化、日本遺産を浸透させるまちづくりに取り組んでいます。3月28日の上田電鉄別所線千曲川赤鉄橋全線開通というビッグイベントに加え、百年に一度と言われる世界で一つしかない国宝安楽寺八角三重塔大日如来様の御開帳がなされ、温泉地に御光が射しました。未来は明るいですが、ただ、明るくなるようにできるのは旅館の経営者自身が自分のオリジナルの統計数値を長い年月をかけて積み重ねて、その中に潜む『旅館経営の方程式』を発見することから、近い未来でも遠い未来でも安心経営ができるものと信じています。統計ストック歴年分を眺めてみて、このコロナ禍でどう動いたらいいかいくつかの指標に気づかされました。コロナ禍でも安定客層の存在はあるということでした。ウィズコロナガンバリマショウ。

2. 日本の温泉の今後のあり方

・多面化する健康福祉利用に対する考え方と増富地域の取り組み

経済優先から安心・安全優先への変化が急激に訪れ、それに対応できない人の不安やコロナ感染者の復帰後の社会的な圧力に対する不安解消の仕組みづくりが急務であり、お客様のより深化した深層心理にある不安を具現化し温泉力や地域資源力を発揮し解消する仕組みを作る事です。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

いつの時代でも病気、経済や人間関係などで簡単に社会的な絆や接点が無くなってしまおうという不安や恐れはありましたが、コロナにより、その構造がより複雑化して精神面を深くえぐるような深刻な時代になってきました。

健康と温泉フォーラムの人的ネットワークは大きな頭脳集団であり温泉による社会的な貢献を考えその価値を産み出す集団だと思います。

今こそ温泉という自然の恵みの宝を活かし世の中に貢献する時代です。

特に国民保養温泉地の役目は重責です。

温泉で日本を救う為の話し合いの場が欲しいです。

今まで表面化されず社会に知られていなかった人の不安を解消する仕組みは、それぞれの温泉地がその地の特徴をどう生かすかがカギになります。

その為の話し合いを通し、温泉地の人たちが日本を平和に明るくする目的の一つにつながる仕組みは健康と温泉フォーラムの人的ネットワーク力が無くては実現できないと思います。

コロナが収まってコロナ以前には戻らない事を前提にこれからの計画を立てる必要があると思います。

だからこそコロナで閉ざされた人との出会い、その中から生まれる深い絆や仲間づくりを大切に再構築して、日本を良くしようと思う人たちと小さな事から地道に進める気持ちが大事だと思います。

温泉を営む人と色々なスキルを持った人が「温泉で日本をどう変えられるか」という共通の意志と意識を持ち語り合える場が必要です。

その場がFORUMです。

4. その他

とある平凡な一日の様子です。

朝、増富に向かって車を走らせていくと岩下という紅葉のきれいな谷を通り過ぎると雰囲気が変わってきます。

そこが増富の入り口です。

標高約700メートル、そこから一気に1,000メートルの増富温泉まで向かいます。さらにさらに雰囲気が変わってきます。自然の鼓動がぴりぴりとつたわってきます。

「増富の湯」の中庭ゾーンには木々に囲まれた石の上に座り瞑想をする場があります。

朝早く来て30分ほどの瞑想をするのですが、新芽の強いエネルギーが整い始めた今、小鳥たちの合唱がいつも始まります。立体的な角度から色々な方向で様々な音色を奏でてくれるのです。

贅沢な自然の中の貸し切りコンサート会場です。誰かとシェアしたい気持ちになります。うぐいすが一生懸命さえずりの練習をしています「ホーホケキョ」と鳴けず「ケキョケキョ」と、発声をしています。若いうぐいすはメスの気を引くために一生懸命さえずりの練習をしているのです。

ふと10代の若い頃の自分に意識が飛び、あの頃はもしたら女の子にもてるんだろう？とかっこづかりを気にしたりギターを習ったり洋煙を吸ってみたり懐かしいなあと考える自分がいました。時折、やさしい風が私の周りにまわり付きほほ笑みささやいてくれます。

本谷川の渓流の流音は私の体全体に朝の目覚めを感じさせてくれます。太陽が出てきてその光が身体を和らげ中まで光の振動が入りこみ細胞の一つ一つに生きるエネルギーが伝わり活力がよみがえります。真冬の零下15℃前後の時も防寒服を着て身が引き締まる思いをしながら自然との対話を楽しみながら意識がその時々でどんどん変わっていくのが解ります。

水には自然のリズムの色々な情報が入っています。

水蒸気となって空気中に溶け込んでいますので見えませんが、空気中には水の情報が一杯詰まっています。

呼吸を整えながらゆっくりとその情報を吸い込むと、呼吸を通し生きる為の色々な知恵やひらめきの元が溶け込んできます。

夜の星を観ながら焚火の優しい炎を見つめていると自然に心が柔らかくなり炎は一瞬たりとも同じ様相を見せず、絶えずファジーな揺らぎを通して私たちに何かを訴えています。肌寒いグラウンドの隅で小さな炎の温かさが心にしみてきます。枯れ枝が燃えて色々なにおいを煙になって運んでくれます。

時折風の向きが変わり一気に煙が全身覆った時は咽てしまったり涙が出たりして体の防衛本能が発揮されます。火を見つめて時折上を眺めると月あかりや星の瞬きが私に何かを訴えてきます。そんな時は意識が色々な次元に飛んでいる自分に気が付きます。勝手に宇宙旅行をします。すると自分が宇宙空間の中で細胞よりももっと小さな原子や原子核、もっと小さな一部に思えてきます。すると社会生活での「しがらみ」がどうでもよくなる瞬間があります。

温泉に入ると太古の遺伝子をくみ上げ完熟させた水の情報を体全体に浴びます。衣服をまとうず、だからこそ直接肌に自然の情報が伝わるのです。お風呂の中で「空っぽの自分」を演出すればするほど情報が伝わりやすく成り、体の中に溶け込んでいきます。さらに意識を深化させると心の中にどんどん良い感情が入り込みます。

温泉浴は生まれた時のそのままの姿をするからこそできる、自分を深く見つめる事のできる、とっておきの時間、自分だけの時間です。だから周りの事は気にしないで下さい。自分が本当にしたい事はなんだろう。本来の自分の素の姿を見ることができなのが「温泉の持つとんでもない力です」。ピュアな自分を取り戻す事のできる自然界の再生装置が温泉です。

温泉は今の世の中で本当に大事な、大事な、人類にとっての宝物です。私たちは自分を幸せにする義務があります。それは誰もが与えられた命そのものだからです。

せっかく授かった人生ですから輝いて生きてください。温泉を通して私たちにそのお手伝いをさせてください。



鶴田 浩一郎

株式会社鶴田ホテル（ホテルニューツルタ） 代表取締役社長
特定非営利活動法人ハットウ・オンパク 理事
一般社団法人オンパク 代表理事

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

観光産業は安心・安全産業であり、世界が平和である限り発展・成長していくが、それ故に阻害要因も下記のとおり多い。

- ① 経済変動；1990年のバブル崩壊、97年金融不安、2007年リーマンショックなど大きな経済変動の波。
- ② 自然災害；東日本大震災、熊本地震、豪雨災害などの頻繁に起こる自然災害。
- ③ 感染症；今回の新型コロナに代表されるSARS、MERSなどウイルス等による。

長期にわたる阻害要因は、人間のライフスタイルを変えていく。とくに、今回の新型コロナの長期化は以下の変化をもたらす。

- ① さらなるデジタル化による変化；とくにわが国のデジタル化の遅れは顕著で深刻。
- ② コミュニケーションの変化；ネット会議など働き方のデジタル化が進む。一方でface to faceの価値の再認識も。

- ③ 起こる可能性があること；都会から地方への移住や移転。中小企業の退廃業が早まる。

2. 日本の温泉の今後のあり方

- ① 新型コロナ禍ではワーケーションを含めて、長期滞在の試行錯誤が続いている。このためわが国でも滞在系マーケット創出の可能性が高くなってきた。今後温泉地でウェルネスのための長期滞在の可能性がみえてくるかもしれない。
- ② コロナ禍、旅行マーケットが縮小しているなか、DMOによるマーケットのセグメントなど、さらにビッグデータの解析が必要になってきた。ただ、実現できている組織はほぼないといってよい。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

コロナ禍明けにどのような、温泉地滞在系のマーケットが生まれてくるのか、今こそ研究していく必要がある。

内藤 陽子

薬師湯 代表
温泉津美肌観光協議会 会長
ノルディック・ウォーク学会 理事

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

コロナ禍だからこそ、しっかりとコロナ対策をとって、1人でも多くの方々に温泉が活用され、体力アップの一助になって欲しいと思い、営業はコロナ禍でも止めることなく続けています。

温泉施設は単に入湯客を受け身で迎えるのではなく、自身の温泉を正しく理解し、お客様に合ったオーダーメイド型の入浴方法を案内できる施設・ノウハウが求められる時代になったと一層思うようになりました。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉は全国各地にありますから、温泉をより正しく理解することで、日々の養生として活用する術、知識を深める事が幅広い人々に浸透することで、国民の免疫力アップ、ひいては医療費の削減、更にはそれが地域の活性化につながります。

温泉それぞれ泉質・個性が異なりますから、入浴方法も異なります。ですが一般的に、温泉は好きな方法で、

好きなだけ入るのが温泉だという感覚の方が多いです。入浴事故や入浴効果を最大限に得る・楽しむために、温泉地間でお互いの情報を交換しながら、より良い温泉地の姿を模索できると良いと考えています。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

入湯税の活用方法に関して、全国的なテーマとして、意見交換ができる時代になって欲しいと思います。

討論・意見交換をすることすらタブー視されている地方も、遅れている県もありますので、今後全国的に見直しが図られ、温泉地の将来に活用して欲しいので、気運の醸成に動いていただきたいと思います。

中道 幸子

べにや無何有 女将

べにや無何有「スパ庭施術院」 ディレクター

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

2020年は、緊急事態宣言による休業要請により約2か月完全休業することになった。その間、お客様の満足度を高めるため、徹底して修理改修を行った。さらに従業員に連続休暇の機会を付与。その間の給与も有給消化を使い保証している。

・インバウンドについて

べにや無何有では40%以上海外客に依存。外国人従業員やインターンシップの受け入れを延期した。国のワクチン接種への対応が遅く、ワクチンパスポートを持つ外国人への入国の対応も決まっていない。日本に来たくても来ることができない。

災害の多い日本では約10年サイクルでインバウンドが消滅するリスクは今後もありうるが、それでもインバウンドの重要性は変わらない。

終息後はインバウンド比40%を目指していく。

2. 日本の温泉の今後のあり方

・グローバリゼーション

グローバリゼーションの流れは止まらない。べにや無何有は日本に2週間から1か月滞在する欧米圏の富裕層をターゲットにする。2泊以上の滞在。その間に加賀の自然、文化、食、歴史を体験できる独自のプランを充実させる。

今年の後半からは外国人インターンシップや外国人従業員の受け入れを検討している。

・入湯税の活用

入湯税はキャンペーンでなく街の景観整備に重点を置いた活用が必要。景観が悪いということはその温泉地の精神的貧しさを物語る。そういうところに人は来ない。

逆に景観が美しければ、宣伝をしなくても、必ず誰かに見いだされ、活路が開かれる。人々の目は確かである。宣伝で人を集めることはできない。本物を目指すべき。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

参加したことはありませんが、添付資料の月例研究会の課題、テーマを見せていただいて、たいへん充実していると感じました。

4. その他

温泉は自然からの恵みであり、日本の神道や仏教の考え方と深く結びついています。

日本人の自然観「自然の中に自分の居場所を見つける」「自然の祝福を感じ心が満たされていく」という精神性を日本はもちろん世界に発信していければと思います。

例えば、山代温泉の歴史は、霊峰白山との深いつながりの中で育まれてきました。

奈良・聖武天皇の御代、行基が、白山登錫の途上で温泉を発見。その守護の為に薬師如来、日光月光両菩薩及び十二神将を自ら彫刻して石窟に安置し、さらに白山大権現を鎮守としたのが、山代温泉と霊峰山薬王院温泉寺の始まりであると語り継がれています。

その後1300年にわたって、温泉と薬師如来が人々を癒し続けているというところ、そのあたりの有難さをどのように表現できるかが鍵になるのでは？

最近では、山口県長門湯本温泉の「恩湯」とか、宮崎県「おゆのみや」が、温泉の有難さを伝えていて、とても良いと感じました。

畠山 米一

株式会社玉川温泉 取締役副社長

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナウイルス感染症は、あらゆる分野で想定を超える影響を及ぼしており、温泉旅館も例外なく大きな打撃を受けております。チェックイン、チェックアウト、食事の提供、掃除の仕方、付属施設や大浴場の営業など全てにおいて体制の見直しに追われました。

看護師が常駐する「入浴相談室」を併設しておりますが、最初の緊急事態宣言のあたりは、お客様が少ないことに加え、対面で相談することでの感染リスクを恐れてか相談室にいらっしゃるお客様はほとんどいませんでした。このような状況から当面は対面での相談を中止して電話による相談に切り替えて対応しましたが、看護師がお客様と対面して知り得る情報もあるので、この

方法は長続きしませんでした。現在は飛沫防止シートを設置して、換気を良くして、相談時間も短く設定して対応しています。このような状況下で相談に来る方は初めてのお客様が多く、自分の病気を事細かく話して入浴の方法を相談するケースがほとんどでコロナ以前と比べて大きな変化はありませんが、必ずコロナ感染の恐怖を語ります。必要以上に恐怖心をもっており神経質になっているお客様が多いと看護師が心配しております。

また、宿泊している方の多くは、自身で感染しないよう、感染させないようそれぞれに注意され静かに過ごしています。長期間の湯治滞在では、温泉地で出会う方々との交流も大事であると思っており、その交流があまり見られなくなったことを非常に懸念しています。湯治の

効果として温泉入浴等に加え精神的に安定することも必要であり、コロナの影響で他者との会話を避ける傾向はこれからの湯治スタイルを大きく変えかねないと心配しています。

2. 日本の温泉の今後のあり方

全国の温泉地は、その地域に根差しながらいろんな姿で歴史を刻んできたことと思います。現在、湯治場と言われる温泉地は、時代の流れに多少は変化しつつも湯治文化を守り、貫いた温泉地ではないかと考えます。

現代湯治、新・湯治など新しい湯治のあり方が提唱されております。昔ながらの湯治、つまり温泉地に長期間滞留して特定の疾病の温泉療養を行うことを守ってきた温泉地にとっては、関係ないと思っている人も少なくないと思います。私もその一人でしたが、今は湯治場であるがこそ取り入れるべきことではないかと考えております。

玉川温泉は湯治場として今に至っておりますが、強酸性の希有な温泉と天然の岩盤浴を目的として湯治される方がほとんどであり、温泉の効能を最大限に療養できるように看護師を常駐させて「入浴相談室」を置き、その人にあった入浴の仕方や湯治療養の仕方など、お客様の相談に応じており、月に数回ですが温泉療法医による無料相談を行ったりもしています。これらは今後も継承していくべきと考えていますが、昨今の医師不足で医師の確保が厳しく、今後はリモート診療など医療機関と連携した対応に変えていかなければならない変革の時期ではないかと考えております。

しかし、それだけでは足りない何かを感じています。湯治場では、滞在期間中にいろんなグループができ上がるのを見てきました。一人で湯治している方も自然に友達になって会話しています。湯治者同士のコミュニケーションは重要な湯治文化のひとつであると考えています。ただ入浴療養するだけでなくお客様同士のコミュニケーションは心も元気にしてくれます。温泉地としてそのコミュニケーションの場を提供する環境を整えるべきではないかと。

また、自炊設備のある温泉宿においては、炊事場は食事を作る「作業の場」から「楽しく料理するコミュニケー

ションの場」へ変革させなければならないのではないかと。心の癒しを意識した湯治文化を醸成させるべきではないかと考えています。

更には、ライトな湯治ができる環境の整備です。健康増進や心身をリフレッシュできるプログラムを用意できれば、幅広く湯治ができるのではないかと思います。館内のできるものや近隣施設とタイアップしたプランなど整理して、1泊ではもったいないと思わせるようなプランを用意して滞在に結び付けることが必要ではないかと思っています。息抜きの温泉巡り、近隣観光地の日帰りツアー、アクティビティ、滞在期間を楽しく過ごせる環境の整備は必要ではないかと思っております。

私は、働き盛りの中高年の方にこそ湯治をして欲しいと願っております。未病の状態から湯治で体を元気にすることが、これからの健康寿命を伸ばすのではないかと。しかしながら、働き盛りの中高年の方は1週間以上の湯治は厳しいのが現状なので、自分のライフスタイルに合った2〜3日のプチ湯治から始めて、心身ともにリフレッシュできる環境が望ましいと思います。どの世代でも自分にあった滞在期間の過ごし方を選択できるプログラムがあれば、湯治が一層楽しくなるのではないのでしょうか。楽しくリフレッシュできる滞在環境の整備が今の湯治場に必要ではないかと考えます。

「湯治」とは何か？今一度、じっくり考え直してみたいと考えております。

4. その他

・地熱発電開発について

環境省が国立公園外からの斜め掘りを認めて以来、地熱開発業者は一層熱源を求めて新しい掘削を進め、温泉地を恐怖にさらしています。環境省は地熱発電所の稼働までの期間短縮を図るため手続きの簡略化を図るとし、国は脱炭素化の流れの中で再生可能エネルギー開発を推進しています。地域と合意形成のうえで開発すると謳っているものの、実際は自治体も推進しており温泉業者へ説明さえすれば反対しようが推進されるのが現状です。脱炭素化政策の流れで温泉の保護が軽視されているのではないかと非常に懸念しております。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

世界的な新型コロナウイルス感染症の影響で人の流れが停滞し、旅館経営者として、かつてないほど追い詰められたと思います。普段通りであれば多くの方々に来ていただけるのに、受け入れることもできない状況の中で、どうやって経営を維持していくか、今後の見通しはどうかなどと、答えが見つからないまま、もどかしく時間が経過していくばかりでした。

とにかく営業が続けられるよう、今できることをやっておかねばと考え、まずは「お金」をどうするか思案し、返済の猶予、補助金の獲得などを銀行や関係機関と相談し、そして当面の資金を確保（結局借金が増えたのですが、資金ショートするわけにはいきません）することに注力しました。

コロナの影響がこの先数年にわたって続くようであればどうにもなりません、3年ほどで収束してくるのではないかと想定し、そこまでは何とか続けていけるだけの方策は整えることができ、気持ち的にも多少の余裕が生まれました。そこで改めて考えると、今までのような旅行形態や観光産業のあり方は大きく変化し、これまでのような状況にはもう戻らないのではと考えざるを得ません。また旅館・ホテルをはじめとして観光産業自体に大きな淘汰の波が訪れることは避けられないでしょう。これから先、何が残り何が消えていくのか、まだまだ見通すことはできませんが、私としては生き残るためにもう一度原点に戻る必要があるのではないかと考えています。そして、それはやはり温泉そのものということになるのではないかと思います。当館にとって豊富な源泉を有することは何よりの強みになります。さらに言えば周辺の自然環境も併せて重要な要素になると思います。

2. 日本の温泉の今後のあり方

当館が営業を始めて約100年になりますが、隔絶された群馬の山奥で、湯治すなわち温泉療養を中心に営業を続けてきました。営業形態は時代の要請に応じて変化してきましたが、基本は湯治のお客様を受け入れることで

す。かつてこうした湯治客を受け入れる旅館は日本全国に多数ありましたが、現在では減少の一途です。それでもなお温泉や自然環境に魅力を感じて訪れる方はいくありません。確かに1週間程度の長期滞在のお客様は稀ですが、2・3泊の短期の滞在客は少なからずいらっしゃいます。さらに、現代の医療をもってしても改善しないような病気・疾患、また現代社会において深刻なストレスに悩む多くの方々にとって、温泉は残された拠り所であり、医療機関を受診する以外の選択肢を提供することは意味があることだと考えます。これまでのようなレジャー・行楽型の旅行だけではなく、心と身体を癒すための旅行、普段のストレスから離れる、いわば転地としての旅行が重視されてくるのではないかと考えます。

既に何年も前から繰り返し補助・代替医療として温泉を活用することが議論されてきていますが、一向に成果を上げることはできません。私としてもみなかみ町国民保養温泉地の計画作りに際して、町外からの観光客だけではなく、地域の住民の健康づくりに寄与するような温泉地の利用のあり方、さらに言えば地域の医療費の削減にも貢献できる可能性があるのではないかと模索してきました。しかし、観光政策と保健福祉政策は所管する課も異なり、行政をはじめなかなか理解していただけないことに忸怩たる思いがあります。

もう2年前になりますが、国民保養温泉地協議会の総会で訪れた大分県竹田市長湯温泉、当時首藤市長のもと展開されていた温泉地づくりが大きな刺激となりました。豊富で多様な温泉資源を有するみなかみ町でも観光と保健福祉の両面で温泉を活用した施策は十分可能だと思うのですが、なかなか実現できずもどかしい限りです。

このコロナ禍で温泉を取り巻く状況にも否応なく変化が訪れることは間違いありません。生き残れるのかどうかさえ確信を持たない状況ではありますが、この機会に温泉についての議論が一層深められることを望んでいます。また、今後も引き続き保養温泉地としての地域づくりを提起していこうと思います。

医療・保健

(小括) 猪熊 茂子

医療法人社団誠馨会 千葉中央メディカルセンター
アレルギー疾患リウマチ科 部長 温泉療法専門医
元・一般社団法人日本温泉気候物理医学会 理事長

9名（医師6名、保健師1名、看護師1名、ホメオパス1名）からの考えが寄せられた。

1. コロナ禍に感じる事、考えたこと

温泉地は即ち医療が脆弱な地域であって、行き難い場所となってしまった（齋藤氏）。

しかし、社会的交流の制限の緩やかな過疎地であることを逆手にとってみたら如何か（小笠原氏）。

2. 日本の温泉の今後のあり方

現況では唯一の医療費補助対象として温泉利用型健康増進施設訪問があるが、利用者から見ても施設側から見ても、手間の割にリターンが少ない（齋藤氏）。

科学的根拠提出は主柱となるべき活動で、省庁研究班設置が望ましい（猪熊氏）。

入湯税の研究費利用に道を開くべき。我が国は研究すべき責務あり（早坂氏）。

研究課題としては、COVID-19下のストレスへの効能（東氏）、見知らぬ者同士の接触でのリスク回避法（畑田氏）、（その他の）入浴関連事故低減のための研究（猪熊氏）。

新しいライフスタイル、例えば長期「逗留」生活を支えるモデル開発（小笠原氏）。

子供のいる家族の場合の案開発（シェンブレア氏）。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

活動をしている幾つかの主な団体を横断的に取り纏める機能を果たしている（早坂氏）。

COVID-19下でなくとも、会合への出張参加は難しい。これを機に、Live会合/On Demand配信を活用したい（小笠原氏、齋藤氏、牧野氏）。

参加者であっても知らない新旧の知見を共有するNetworkとしたい（猪熊氏）。

また、例えば、同じ泉質の温泉地グループでの共同作業（東氏）で、差別化の基礎となるDataを採るなどは如何か。

将来への課題

医療を求めている温泉利用者の増加は期待し難い。重症化抑制、介護度軽減、医療費低減に役立っていることのDataによる指摘が必要（早坂氏、牧野氏）。例えば、メンタルヘルスにつき、内服薬治療の限界を広げるなど（齋藤氏）。

更に、「休日3日」よりも労働時間/日の設定の自由度を変える動きによって、温泉利用を広げるのが、適っている（小笠原氏）。若い人の興味も生じ得る（東氏）。文化として扱って行く方向もあり（猪熊氏）。

東 威

元・聖マリアンナ医科大学 教授 温泉療法専門医
元・一般社団法人日本温泉気候物理医学会 理事長
特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 顧問

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

収束が見えないことに関する不安。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉関連団体（日本温泉協会、日本温泉気候物理医学会、日本温泉科学会、健康と温泉フォーラムなど）の共同作業。

例えばCOVID-19によるストレスに対する温泉の効用調査など。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

同じ泉質の温泉地グループを作り、悩み、活動を共有し、あるいは差別化（特色）を検討。

4. その他

若い人たちの温泉への興味を持たせること。

猪熊 茂子

医療法人社団誠馨会 千葉中央メディカルセンター
アレルギー疾患リウマチ科 部長 温泉療法専門医
元・一般社団法人日本温泉気候物理医学会 理事長

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

何よりも感染症の収束を第一とすべき。

2. 日本の温泉の今後のあり方

科学的根拠の提出が、上記何れにも基本的に必要。

環境省、厚生労働省などで研究班を組織する。

入浴関連事故についても、温泉地で集計、解析をする。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

毎回、新旧の知見を共有するミニ報告をしたら如何。

4. その他

文化として扱う。

小笠原 真澄

医療法人楽山会 大湯リハビリ温泉病院 院長 温泉療法専門医
一般社団法人日本温泉気候物理医学会 理事

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

感染症のパンデミックは、これまでも歴史を変えるほどの影響をもたらしてきたと言われているが、今現在その変わりゆく渦中にあることを感じている。社会的交流が制限されることにより、年齢・性別等を問わず多くの人々に、身体的・精神的衰退をもたらしているのではないかと危惧している。

このようなコロナ禍にあるからこそ、過疎の温泉地はそれをメリットとして生かすことができるのではないだろうか。従来から人口減少が課題とされ、いかにして他所から交流人口を呼び込むかに苦慮していた過疎地域は、コロナ対策としての社会的交流の制限による影響は、比較的緩やかなのではないかと思われる。過疎地の発想の転換に取り組む時である。

2. 日本の温泉の今後のあり方

私の居住地域（秋田県鹿角市十和田大湯）はまさしく過疎地であるが、国立公園十和田八幡平の中間地点にあり、自然の景観には恵まれている。過疎地であることのメリットを十分に活かして、賑わいを求めない温泉地の過ごし方を提案していく時期がいよいよ到来したと思う。当地域を例に過疎地の温泉のあり方を考えてみる。

キーワードは「ソロ活動」であり、敢えて賑わいは求めない。都会のコロナ禍でのlonelinessから過疎の温泉地でのsolitudeへの誘いである。現在あるものを利用していくことが基本であるが、ソロ活動しやすい環境はある程度整備しておくことが必要であろう。1週間から1か月程度の「逗留」をイメージした環境整備を以下に列挙する。

- ① 一人利用かつ長期滞在がしやすい宿泊施設を整備する（費用も低価格帯に設定）。
- ② 食事は地域の福祉施設等で提供されるようなバランスのとれた内容に加え、地元特有の食材を取り入れたメニューを基本とし、時に豪華メニューを選択できるようにする。

- ③ 長期滞在の目的として仕事（ワーケーション）、健康保持増進、療養、観光などを設定してもよいし、何も目的を持たずに滞在することも歓迎する地域の雰囲気醸成する。目的に合うプログラムメニューは大枠として準備しておき、対応窓口を介して個人が組み立てていく。至れり尽くせりのサービスを提供するものではない。

- ④ 目的にかかわらず、宿泊施設を拠点として、近場の温泉や景勝地への日帰りもしくは1～2泊程度の小旅行を可能とするシステムを構築しておく（移動手段として電気自動車等のレンタルを準備）。

- ⑤ 長期逗留拠点地と幾つかの小旅行先（温泉地）は連携し、連携施設間で送迎もしくはレンタカーを利用するのも公共交通機関を利用するのもよし、多くの選択肢を提供できるようにする。

ソロ活動を推進する温泉地の在りようは、温泉地の多様性につながるものであり、アフターコロナの時代においても温泉地の過ごし方の選択肢の1つとして重要な位置を占めるのではないかと思う。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

これまでも温泉の過去・現在・未来について、多方面からアプローチしていると思う。月例研究会は都合がつかず参加できないことが多々あり残念に思っていた。コロナ禍でオンライン開催が普及したが、アフターコロナにおいてもLIVE及びオンデマンド形式での配信を期待したい。

4. その他

働いている人が温泉地に出かけて「温泉」を利用しやすくするとしたら、「働き方」を変えるとともに、土・日などの休日の設定を変える必要があるのではないかと思う。働き方の平準化をめざし、曜日を問わずに労働時間を設定できるようなシステムの構築が求められる。「休日3日」よりも労働時間（日）の設定の自由度を変える方が先かと思う。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

（参考として、コロナ禍での営業経過です）

- ・ 2020年2月北海道緊急事態宣言
- ・ 2020年3月9日より館内休憩室（1階、2階大広間共に）閉鎖
- ・ 2020年4月18日より全館休館、温泉街各宿泊施設も各々休止
- ・ 2020年5月18日より週3回、町民及び長期滞在者を対象に登録予約制で臨時開館
- ・ 2020年6月1日より感染対策を取ったうえで時短営業開始（10：00～20：00、毎週月曜休館）各浴場の利用人数制限、1枚の入浴券で2回まで入館（これまでは制限なし）、検温、手指消毒、換気、休憩室閉鎖、各種掲示と館内放送での注意喚起等
- ・ 2020年8月より定休日を火曜に変更、他は変更なしで営業継続
- ・ 2021年4月中旬より感染対策の一部見直し予定（各浴場利用人数制限の緩和）

豊富温泉全体がお客様の受け入れストップをしていた時期、「観光ではなく療養」目的なので「不要不急ではない」のだから受け入れてほしい、という切実なお声も多数頂きました。医療が脆弱な地域にて、万が一複数の方が発症した場合の大変さを思いお断りの説明を繰り返すしかない、とても切ない日々でした。

そして、それだけ必要とさせていただきながら改めて気づくことができた日々でもありました。

全国的な緊急事態宣言下の最中、湯治で症状緩和をされている方々にとっては我慢するしかなく、本当につらい期間だったと思います。いつでも行ける場所としての「よりどころ」が、行きたくても行けない場所となったことは、きっとお客様の心にも影響したのではないかと感じます。日頃から、そうありたいという気持ちで皆様に接していましたが、いざという時にその役割を果たせていないことを痛感し、「よりどころ」という表現をためらう気持ちは今もまだあります。

コロナ禍での営業は共に働くスタッフも各々不安を抱えながら、感染対策と言う新たな業務も加わり、これまでとは違う心身の疲労が生じましたが、今まで以上にスタッフ全体で考え意見交換する機会は増えました。管理元である町も現場の意見をくみ取った中で情勢にあった営業内容を後押しして下さっています。お客様には色々と窮屈な思いをさせてしまっていますが、皆さん本当によくご協力下さっています。これからもコミュニケーションを取りながら、お客様も働く者も安全にご利用頂ける環境づくりを進めて参りたいと思っています。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉利用型健康増進施設認定を得、それを機に豊富を知って下さった人やリピーターのお客様の中にも制度利用で来湯して下さるなど、豊富温泉としては波及効果を感じています。

半面、宿泊費が該当にならない、医師によっては温泉療養指示書を書いて頂けない、諸手続きの手間の割にリターンが少ない等のご意見もよく頂きます。

受け入れる側としては有資格者(温泉利用指導者、健康運動指導士)の確保、医療費控除に関する対応はすべて無料で行っていることで事務処理等の結構な負担が増える中、ふれあいセンターの大きな収入にはなかなか結び付かない現状があります。

制度そのものの周知はまだまだ道半ばと感じていますが、日本温泉気候物理医学会や温泉療法医学会等の積極的なご協力を頂いています。

そもそもこんなに良い温泉を町民の皆さんにもっとご利用頂きたいという思いは理事者はじめ関わる者の多くが感じ、現場でも町民利用促進に向けた色々なアイデアを出したところでしたが、コロナ禍となり積極的に取り掛かれていないのは残念です。

豊富温泉は類まれなる恵まれた泉質から、効能の特異性をご利用の方々に感じて頂けやすいと思いますが、全国に約3,000あると言われている温泉も、それぞれ疾病予防や症状からの回復、悪化防止等の力を持っていると思います。西洋医学の最新治療だけでなく、古くからある身近な温泉を医療に近い位置づけで見直して頂けるような施策に向かってほしいと思います。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

いつも戦略的な企画をありがたく思うのですが、なかなか地方から伺うことができません。今月行われる月例研究会だけでなく、ぜひ今後もオンラインでの聴講の機会をご検討願います。

また、コロナ禍でワーケーションへの期待がぐんと進みました。働きながら今までより少し長く湯治滞在することは、今後地方の温泉地にとっても明るい材料となります。

何をするにも経済的にゆとりのない小さな温泉に活力を頂けるノウハウや、活用できる施策などご教授頂けたら幸いです。

4. その他

豊富温泉の場合は皮膚症状の改善が目に見える形で感じられ、相乗効果として気持ちの向上も図られているようです。メンタルヘルスの問題はコロナで更に増加の

リスクが高まっているように思いますが、内服薬で治療するだけでは限界を感じます。

温泉は観光資源のイメージが先行しているように思われますが、「温泉に行く=健康づくり」と誰もが感じて下さるようになってほしいです。

ミハエラ・シェルブレア

ホメオパス 医学博士

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

太陽が毎日登ると同じ確実さで、新型コロナウイルスが発生します。突然、この言葉は毎日何千回聞かされるようになってすぐに“おかしい”と思いました。実は、2020年の成人式の日に新横浜でたくさんの振り袖姿を観た時の事でした。若者たちはみんな、例外なしに、スマホを手に持っているのを見て、思いました：誰かが、どこからか、変な情報、命令など流したら、この人達はそれを真に受け入れて、信じて、行動するだろう。ゾクッと来ました。まさか、たった数週間後にこのことが起きるのは、想像しなかったですが、やはり、大げさだと思いました。

世界的な動きを観ても、おかしいと思ったこともいくつかありますが、日本の温泉状態などと関係がないので、省略します。また突然の学校閉鎖になった時にも、意味が分からなくて、そして、国境も閉まり、戦争状態と感じました。

幸いなことに2月末に予定通りに友人と家族で念願の温泉旅行にも行けて、嬉しかったです。

7月8月にも予定をたてて、温泉に行きました。秋にまた毎月何回も行きました。Go Toでどこでも大歓迎されて、もっと行きたいと思いました。具体的な場所なども書けますが、書かなくても大丈夫でしょう。11月から2月にかけて月に一回、全部で4回東北旅行に行きました。素晴らしいところ、人、温泉を体験できて、思いがけなく、日本を満喫しています。私の外国籍の友人の何人かも同じように、日本の素晴らしい温泉地、文化を（再）発見して、とても嬉しいです。欧米よりは日本の制限が緩くて、感謝しています！

2. 日本の温泉の今後のあり方

テレワークが普及することによって、どこでも仕事ができるようになったら、温泉旅館に拠点を置いて、旅をしながら、人生を楽しむ人が増えてほしいです。子供がいる家族もこのようなライフスタイルを歩むのには勇気が必要かもしれませんが、“新しい生活様式”って悪いだけではないと思いたいです。

以前からも言いましたが、今までの日本人の温泉の楽しみ方が“一泊二食”では、もったいないだけでなく、身体に悪いです。少なくとも2泊同じ所に泊まって、ゆっくりするのは前提だと思います。できれば、1～3週間素

泊まりか素朴な家庭料理を出してくれる所で、気楽に泊まれる宿が増えてほしいです。ヨーロッパでも旅行していた時に、一泊のみで予約しようとしたら、嫌がられるところも少なくありませんでした。やはり、毎日シーツを変えたりなどは大変で経済的でもないです。みんなにとってWin-winという状態が嬉しいはずで

それは、一つの良い意味で“グローバリゼーション”でしょう。いつまで“鎖国状態”が続くか分かりませんが、日本の温泉文化を復活させるチャンスだと思います。今まで海外に行っていた人は国内の素晴らしさを再発見するチャンス。現在、インターネット検索すると、まず大手旅行会社の予約サイトにつながります。個人的は直接宿に電話して、お声を聴いて、決めたいと思いますので、個々の宿泊施設にアクセスしやすければ、嬉しいです。どちらかが宿に経済的分かりませんが（大手に委託するか、自分たちで電話に出るか）。施設の大きさにもよりますが、私は家族経営の施設のほうを応援したいです。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

健康と温泉フォーラムのご活動をいつも通りに再開していただきたいです。人と人のコミュニケーションは人間にとって第一の栄養源だと思います。そして、微生物とも遺伝子レベルでのコミュニケーションをしないといけません。いつまでも一つだけのものを怖がって、避けようとするのはあまりにも不自然です。因みに、私の思うコミュニケーションに次ぐ次の栄養源（重要性順に：太陽、空気、水、そして、やっと5番目は食事です）なので、人間の健康に欠かせないものを与えたら、自然に生きることができると思います。いろんな“予防対策”によって、それらが欠けることで、病気が深いレベルに広がります。簡単に言いますと、ウイルス感染の死亡者より自殺者の数が日本では多いです（2020年）。年齢層も考えると日本の将来は危機感を覚えるはずで

日本の素晴らしい自然と文化を快く活用して、明るい未来を築きたいと思います。

4. その他

お声をかけて下さって、幸栄です。正直に書かせていただきましたので、かなり“意外”な回答になったかもしれませんが、お許しくだされませ

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナウイルス(COVID-19)のパンデミックにより、私たちの生活や、働き方が急激に変化しました。リモートワークやオンラインでのモニターを介したかわりが増え、人の体温を感じる会話が少なくなってきたように感じます。

弊社でも、県を跨ぐ出張、旅行は制限され、社内での会議、ミーティングも距離を取ってバラバラに着席し、研修もオンラインになるなどお互いの顔を見て話し合うということがほとんどなくなりました。大学生である我が子たち(薬学、看護)も自宅にこもってオンライン授業を受けている状況で、病院実習も1時間程で終了とのこと。このようなことで資格を取得してから、医療現場で通用できるのかと不安を感じます。

感染を恐れて閉じこもっているばかりでも限界があります。たまには温泉に入って気分転換をしたいというのも自然の欲求ではないでしょうか。温泉に入って体温を上げることは免疫力の向上に繋がると考えられています。温泉だけではなく適度な運動も体温を上げてくれます。免疫力の向上は、新型コロナウイルス感染に対しても、その発症や重症化の予防に何らかの効果があると思われ、そのような基本的な体づくりが必要ではないかと感じています。温泉地に関しては、コロナ禍での感染対策として不特定多数の人たちの接触を避けるため、家族風呂や、客室に温泉が設置されている旅館の需要が高まっていると思われます。酸ヶ湯の千人風呂のような大浴場での感染リスクは実際にはどうなのでしょう？現時点で有効と考えられているできる限りの感染対策を行なって営業

を続けていますが、営業と感染リスク回避のバランスをとることはとても難しいと感じています。

2. 日本の温泉の今後のあり方

本来温泉保養施設は人と人とのつながりが基本であり、見知らぬ人どうしの接触が当たり前で、感染症に対しては脆い面があります。温泉にはいることそのものは問題なくとも、温泉を取り巻く環境が感染についてはリスクとなります。昔から温泉地を訪れる人たちには、温泉に魅力を感じて訪れる人や温泉を中心とした保養施設の利用および人とのふれあいを求めてくる人などいろいろでした。コロナ禍以前の日本の観光は、グローバル化の流れに乗り、国を挙げてインバウンドの増加を目指し収益を上げることに夢中でした。その中で酸ヶ湯温泉は、インバウンドはもともと5%くらいと少なく、日本国内各地からの訪問客が多数でした。コロナ禍の現在もリピーターのお客様など感染対策を十分に行いながら、全国から多くのお客様に来ていただいています。

パンデミックの収束にはあとどのくらいかかるのかはわかりません。また収束後も未知のウイルスの出現の可能性もあり、しばらくは感染対策と生活を切り離して考えることはできないでしょう。感染対策を強化すれば、宿泊者を無闇に増やすことはできません。収益をあげなければ経営が立ち行かなくなります。新型コロナウイルス蔓延の結果、私達の生活様式が一変しましたが、ワクチンが全国民に行き渡り、治療薬が開発されれば、お客様の健康と安全を守りつつ、以前のような人と人の温かな触れ合いが戻り、活気のある温泉が復活するのではと考えております。

早坂 信哉

東京都市大学 人間科学部 学部長・教授 温泉療法専門医

一般財団法人日本健康開発財団 温泉医科学研究所長

一般社団法人日本温泉気候物理医学会 理事

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

温泉に訪問する客が圧倒的に減り、温泉に関係する人々がつらい思いをしていることを見聞きすると、なにも力になれないことに研究者として無力感を感じる。コロナに対する温泉の医学的効果もまだ分からないことが多くメディアへの発信もできずにいる。感染の危険性が排除できれば温泉はコロナのストレスの緩和にとっても有益であると思っている。今はただ早くコロナが終息してまた以前のように気兼ねなく温泉を楽しむことができる日々が来ることを願っている。

2. 日本の温泉の今後のあり方

伝統的文化的温泉の良さは維持しつつも、一方では、温泉の健康効果についてエビデンスの蓄積は並行して行

う必要があるだろう。高齢化を迎えての介護予防や脳血管疾患、がんの予防への温泉の効果を科学的に示す必要がある。そのためには一定の研究費が必要であり、以前より貴フォーラムが提案しているような入湯税の研究費利用が必須であると考えている。研究費が付けば自然と温泉を研究する研究者が増えてくる。また我が国は世界的に見ても、もっと温泉医学を研究すべき責務もあると考えている。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

温泉業界に関しては、損得なく温泉の将来を真摯に考えているような横断的な団体は貴フォーラムを除いて他にない。益々期待しています。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

コロナ禍で経済は戦後最大の危機に直面し、観光産業も破滅的な状況である。各地の温泉も例外ではなく、大きく影響を受けている。感染予防のための密回避で1日の湯治回数、時間、浴後の休憩場利用も制限され、湯治客が本来享受できるアメニティ等が犠牲になっている。この苦難の時代が早期に終息することを祈る。

今後も、新興感染症が現れることが予想されるが、どのような困難があっても、支持を得られるために温泉医療の効果がより一層科学的に立証され、代替あるいは相補医療として発展・確立させることが望まれる。

今後、健康増進効果を前面に出して、温泉事業を展開させていくのも一つの手段である。欧米各国にみられるような温泉の医療へのさらなる応用の発展が期待される。

2. 日本の温泉の今後のあり方

最先端医療技術を用いて疾患の原因を取り除く対症療法と異なり、温泉療養は自然豊かな温泉地で静養しながら様々な化学成分を含む温泉水の薬理作用や温熱、静水圧などの物理作用を利用して自己治癒力で治す根本療法に分類される。

ヨーロッパでは専門医の指導の下、医療行為の一環として保険適用で温泉療養が行われている。かたや、わが国では保険適用こそされていないが、施設の利用料金、施設までの交通費については所得税の医療費控除を受けることができる厚生労働省認定の温泉利用型健康増進施設が22施設あり、年々利用頻度が増加している。今後、温泉療法の効用の理解が進み、温泉利用型健康増進施設の医療費控除範囲の拡大とともに医療との連携が強化されることが望まれる。温泉療養が欧州諸国のように保険診療の枠組みに組み込まれるようになれば、ハードルが下がり、健康医療増進にさらに寄与できるようになる。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

とにかくコロナ感染者、クラスターを出さないことが一番です。新型コロナウイルスは熱に対しては90℃程度以上15分間で不活化されるという報告はあるが、40～42℃、湿度60%程度の浴室で感染力が弱まることは考えにくいと思います。浴室などは湿度も高く飛沫感染や接触感染も起こりうると考えたほうがよく、浴室では人の密集を控えて、定期的な換気や入浴時間の分散、浴室の清潔保持などは重要であると思います。専門家の中にはコロナ禍の収束にはまだ数年はかかると言っている人もいます。

2. 日本の温泉の今後のあり方

高齢化社会下なので温泉は健康福祉への期待が持たれます。主に高齢者をターゲットとして、温泉地での静かな環境、食事、散策などの総合的調節作用で心身ともに健康維持に進めるべきだと考えます。盛りだくさんなメニューよりむしろシンプルで廉価なプランが好まれる時代になると思います。また、コロナ禍での自粛疲れやコ

ロナ鬱などストレスを抱える人が増えています。今だからこそ、温泉施設で疲れた心を癒すのに期待されます。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

興味のあるテーマですが、開催日が平日なので、可能なら週末に開催していただければありがたいです。また、オンラインで視聴が可能となれば、参加者は増えてくると思います。既に多くの学会ではWeb形式になっています。テーマは種々のテーマとのバランスを保つようにお願いしたい。

4. その他

温める効果（温熱作用）だけならサウナ入浴での効果があるが、温泉には都会にはない“静かな環境”があり、このことを売りにすべきです。しかし現状では温泉への利用者の増加は期待し難い。温泉入浴が病気の重症化を抑え、医療費の低減や介護度の軽減に役立っていることを明らかにするのは大切ではないかと思います。

(小括) 坂本 誠

政策研究大学院大学 政策プロフェッショナルプログラム 在学

特定非営利活動法人ローカル・グランドデザイン 理事

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 専門委員

政策の錯綜と、それに翻弄された温泉

コロナ禍への政府の対応は、移動を抑制したかと思えばキャンペーンを行なって喚起に転じるなど二転三転した。有識者からは、こうした政策の錯綜と、そのたびに温泉地とその関係者が翻弄されたことへの反省が寄せられた。「個人の自発的な動機からの旅行に多額の補助でモチベーションをあおるやり方への嫌悪感、これが常態化した後の反動を心配する声が強い。財政問題のみならず今後の温泉旅行動向にどう影響を与えるのか憂慮される」（石川氏）とはその通りだろう。

旅・温泉の価値を問い直す

感染症対策に欠かせないこととはいえ、旅は不要不急のものとして仕分けられ、抑制された。そうした状況を目の当たりにするなかで、旅や温泉の価値を問い直す必要を指摘する意見が多く寄せられた。旅が人々の人生や人間形成において果たしてきた役割（後藤氏）、旅や交流を通じて社会や文化が育まれてきたこと（坂本）を再認識する必要がある。

旅行者が激減するなかで浮かび上がったのは、地域の人々の癒しと健康増進の場としての温泉であり、そうした人々によって温泉が支えられていることだった（石川氏）。こうした人々の存在を再確認することを通じて、「国民共有の資源としての温泉」（滝沢氏）としての評価は広がっていくのではないかと。「温泉は誰のものか」という問いは、温泉法における「公益」の定義（甘露寺氏）に直結する議論でもある。

温泉や温泉地の多様な可能性を追求する

コロナ禍以前から、多くの温泉地が高齢化や人材の問題など（大塚氏）により苦境に立たされていたことも事実である。「温泉まちづくり」（大野氏）やエリアマネジメント（坂本）など新しい手法や考え方を取り入れ、観光以外の需要も含めて温泉の多様な可能性を模索しながら、温泉地を次世代に受け継いでいく努力（井上氏）が求められる。ウェルネスの場として温泉地を捉え（森田氏）、滞在空間としての温泉地の魅力を追求（桃井氏）することは、湯治文化の再評価（石田氏）やワーケーション等の普及にも寄与するだろう。

現代医学の粋を尽くしたワクチンがコロナウイルスを封じ込めようとしているが、はたしてそれが根本的な解決になるのかを考えたときに、並行して自己免疫力を向上する方策が不可欠であり、そのためには、免疫力を高める場として温泉を再評価（石田氏ら）し、ヘルスツー

リズムや温泉の療養利用のさらなる展開を図っていくことが大切である。ただし、それは海外の事例の直輸入ではなく、日本の温泉（地）の特性などをふまえたものでなければならない（森田氏）し、温泉を療養の場として積極的に活用していくためには、医学的なエビデンスの追求とその蓄積・共有の仕組みが欠かせない（関口氏）。

識者からは、こうして温泉や温泉地の多様な可能性を追求するための財源として、入湯税への関心も寄せられた。関係者それぞれの思いが交錯する難しいテーマではあるが、しっかりと向き合って議論していきたい。

情報提供・発信のあり方

コロナ禍においては、感染状況や感染対策をめぐる情報の錯綜も見られた。このことは「どんな業界でも、業界の外の人にはわからない状況は多く、温泉業界でも科学的な知見に基づく正確な情報発信が必要である」（滝沢氏）との教訓につながるし、温泉法が、利用者への正確な情報提供を促すような制度になっているかも問われる（甘露寺氏）だろう。

フォーラムに求められる役割

こうして温泉をとりまく課題が多様化するなかで、学際的、業界横断的に活動を行ってきたフォーラムの役割は従来以上に高まっている——これが有識者からの回答に共通する認識であり、この認識にもとづく多くの期待がフォーラムに寄せられた。現場での実践はもとより、様々な分野の専門家から温泉の価値やイメージネーションを聞いてみたい（鈴木氏）との声があった。また、これまでフォーラムが築いてきた国際的なネットワークを生かした活動（神崎氏）も期待されている。

温泉に関連する領域が拡大するなかで、全体を俯瞰する見取り図とこれまでの歴史的蓄積を整理することの重要性が高まっている（後藤氏）が、それもフォーラムの責務の1つだろう。まずはフォーラムのこれまでの蓄積を記録に残すこと（甘露寺氏）からかもしれない。

温泉を後世に受け継ぐために

今般のコロナ禍は、かつてのスペイン風邪と同様に後世に語り継がれる歴史的イベントの1つとなるだろう。この歴史的イベントに際して、温泉とそれに関わる私たちは何を考え、どう行動したのか、そして災禍を越えて次にどのような一歩を踏み出したのか、後世から問われる運命にある。

このコロナ禍を温泉や温泉地の本質を見つめ直す機会（後藤氏）と捉え、これまで育んできた絆を生かしながら、競争と支配ではなく「調和と協創」（桜田氏）の世界を築くこと。「不易流行」の精神で本質を大事にしながら

新しい価値を生み出し、受け継いでいくこと。これが後世に対して私たちが果たすべき役割ではないだろうか。

石川 理夫

温泉評論家

日本温泉地域学会 会長

環境省 中央環境審議会 温泉小委員会 専門委員

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナウイルス(COVID-19)感染問題が国内で顕在化した2020年1月半ば以降、海外からの入国拒否に続き、4月16日から全国に拡大した緊急事態宣言発令は温泉地域にも深刻なダメージをもたらし、多くの宿・施設が休業・休館、営業短縮、先行き不安等を余儀なくされた。

私が所属する日本温泉地域学会では、温泉地がこの間どのような影響を受け、対処してきたかをできるだけ調べて記録に残し、今後の共通課題として提示することが責務と考えた。そこで、6月10日頃から8月初旬にかけて32都道府県93件に及ぶ報告を集約して整理し、2020年9月刊行の学会誌『温泉地域研究』第35号に「新型コロナウイルス感染問題が温泉地(宿・施設・団体)に及ぼした影響・対応等についての状況調査の報告」として掲載した。

報告から、コロナ禍の影響はすでに2月段階から宿泊キャンセルとして始まり、緊急事態宣言発令で全国的に宿・施設がほぼ休業し、都道府県別の段階的な解除後も5月末～6月前半まで休業が続いたことがわかった。当然、国や自治体による支援策を利用し、助けられたが、資金繰りの厳しさから融資を受けた宿・施設では平常体制への回復の難しさから返済が危惧された。

この報告後には、国の「Go To トラベル」キャンペーンが始まった。これに期待し、一定の恩恵を受けた温泉地・宿側にも、利用者が高額旅館に集中しがちなこと、そもそも個人の自発的な動機からの旅行に多額の補助でモチベーションをおおるやり方への嫌悪感、これが常態化した後の反動を心配する声強い。

コロナ禍感染の全国状況と本来地域に密着した温泉地のあり方からすれば、旅行・宿泊支援は全国規模ではなく、感染拡大を誘発しにくい都道府県単位や温泉地の自主的取り組みへのサポートとして行うべき、と私は考える。全国キャンペーン停止の今、代わりにその方向で国は動いているが、補助割合が相変わらず大きい「つけ」が、財政問題のみならず今後の温泉旅行動向にどう影響を与えるのか憂慮される。

先の報告書をまとめる中、あらためて温泉・温泉地の存在意義を感じとったことがある。箱根のある温泉施設では、ふだんから夜勤明けの医療従事者がよく利用して

いた。風呂場での湯あたりなど事故にスタッフが対応していると、「自分は医者ですから、看護師ですから」と手助けもしてくれた。それでこの間の緊急自粛要請中でも、その方々の激務の息抜き・癒しの場を閉ざしたくなくて、限定した営業を極力維持したという。「当館は観光客相手の施設ではなく、近隣の人たちが安らぐ湯治場」という意識がそれを支えていた。

ほかにも立地する地域性や宿・施設の特長を考えて、休業せず、時間や対象・人数を絞った営業を続けた所が見られた。地域の温泉公衆浴場・共同浴場としての公共的な役割を持つ施設も同様である。温泉地(宿・施設)には観光・慰安・保養のみならず地域社会や人々の健康維持・湯治という多様な側面・機能がある。コロナ禍への対応は、そのことを浮き彫りにしたと言える。

2. 日本の温泉の今後のあり方

コロナ禍と向き合う日々が常態化する今日、温泉地の側も、外出・旅行を控える生活が長引く側も、温泉地(宿・施設)の今後のあり方への模索あるいは温泉地に何を求めるのかという新たなニーズを考え直している。

まず確実に言えるのは、ウイルスは絶えず変異をとげるものであり、ワクチンだけに頼ることはできず、結局は人が本来備えている(自然)免疫力を保つ・高める生活スタイルをより心がけるという自覚が高まったことであろう。

免疫力を高めるには、セルフメディケーションにもとづく十分な(休養)睡眠、食事、ストレス緩和、適度な運動で心身を健やかな状態にしておくことが望ましい。そのとき、温泉の利用だけでなく、自然環境や情緒にも恵まれた温泉地という「安らぎ・癒し・解放空間」の場を訪れて滞在する意味、大切さが見えてくる。

日帰り・宿泊を問わず、これまでのようなせわしない観光消費型の温泉利用だけでなく、温泉場でじっくり疲れやストレスを癒やす過ごし方が求められる。セルフメディケーションに必要な「湯治場」は、遠い山間部にのみあるわけではない。大都市圏周辺にも、源泉の提供状態が良く、かつ安らげる湯治場の空間は存在する。泊まらず一日を過ごす「日がな湯治」も可能である。

次に、いわゆるワーケーション需要が挙げられる。先の報告にも「今後は、単なる1泊2食付きの宿泊形態の

みならず、リモートワーク拠点としての温泉宿利用や宿泊以外の売上の創出も必要」という旅館経営者の声が寄せられた。

ワーケーション需要あるいは滞在ニーズに応えるには、共用の滞在スペースが乏しく、部屋に小さな机と椅子、照明がなく、インターネット環境が物足りない温泉旅館の状態では難しい。それでも温泉利用の面ではビジネスホテルより優性を保つ。改善には多額の投資というほどではなく、受け入れ設備への目配り・充実がカギとなる。

コロナ禍も嘆くばかりではなく、従来のあり方を見直す機会ととらえてはどうか。従来の宿には都合良かった1室に数名押し込み、一斉に食事させるシステムは、「密」対策からも忌避される。ワーケーションの提起を契機に、長らくの課題である泊・食分離や食事・滞在メニューの多様化を含めて、新たな温泉地・宿経営システムとして前向きに検討されて良い。

もう一つ、コロナ禍でも、遠来の観光客依存ではなく、県内など地域立脚型の温泉地や宿はダメージが少なかった。確かにグローバル化が促す観光・交流の拡大は、一

時の中断があっても必須の流れで、そこから生まれる需要ニーズを温泉資源と多様な利用法、温泉地景観に優位性・独自性を持つ日本は積極的に受けとめるべきだ。その一方、温泉地は基本的に地域自立型で分散型であるということ、そして温泉地は本来「湯治場」から出発したという温泉利活用の原点を見落としてはいけないだろう。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

健康と温泉フォーラムは、全国の温泉地関係者と国や自治体の行政担当者が共に集い、論議する場であるという独自性と実践力を備えている。このネットワークの優位性を活かした発信活動に期待したい。

4. その他

上記の2.に掲げられた課題はどれも重要である。私自身、温泉地の歴史文化研究を続ける中で、喫緊のテーマでは「温泉文化の保護と活用」に取り組みたいと考えている。

石田 心

一般財団法人日本健康開発財団 代表理事 理事長

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 理事

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

感染症がもたらす負の側面から、ともすればコロナ禍の悪い面ばかりが強調されるきらいがある中で、日本の入浴文化は感染症に対する免疫効果作用があるとして再評価された感があります。欧米が爆発的な感染者数増加に頭を悩ませている最中、相対的には日本の感染者数の増加率は低い傾向があります。

一概には断定できないものの、一つの仮説として日本の生活習慣が感染拡大防止に寄与していることも一理あるのではないかと思います。浴槽を使用する入浴習慣、全国約3,000か所の温泉地、共同浴場を備えた温浴施設、整った洗い場等の個別の要素を加味すれば、その効果たるや如何ばかりかと推し量ることができます。

定性的な印象のみ展開するのではなく、この問題に対して研究者が検証してゆくことも必要ではないかと感じる次第です。

2. 日本の温泉の今後のあり方

日本固有の温泉資源の活用法として、古くからの湯治文化を今こそ再評価すべきと考えます。温泉の利活用が手伝って今日の入浴文化が形成されたのは有識者の見解で論を待たないところですが、身体と精神両面での効能が新たな湯治文化に繋がるように思います。身体面では西洋医学を中心とした薬事療法により伝統的な温泉療養の分野が絞られつつあるのに対して、昨今のコロナ禍も

手伝ってか心身の療養を求める人たちが増加しているように感じます。

一口に温泉資源といいながら、その活用方は千差万別です。地域振興策で大切なのは地域資源を発掘して磨いて光らせる活動です。古くからある温泉はともすれば総花的に高評価を得る反面、地域コンテンツとして特定化するには何を際立たせればいいのか判断に迷うケースがあります。

効能は一概に言えないにしても、せめて代表的な特徴を明らかにして利用者に訴える時期ではないでしょうか。例えば油分を含んだ豊富温泉、炭酸泉の長湯温泉などは特徴が明らかですが、特色化しにくい温泉地も敢えてその特徴を前面に出すことは利用者のすそ野を広げる意味で大切な要素と思います。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

ここまで多方面に亘って正面から温泉文化を研究する団体は他に類を見ないと思います。正直、取り留めのない活動とも言えなくもありませんが、不偏不党の精神で純粋に温泉文化を突き詰める活動はより広範囲な展開が必要ではないかと思います。

他の温泉関係団体との交流やネットワークづくりにも注力して、活動の幅を広げていくことが必要です。今回のWeb化への取り組みは新たなチャレンジですし、このネットワークを拡散していくことは今後の検討課題と思います。

4. その他

早晩、コロナ禍を経て「新しい正常」のもとで、新たな温泉の利活用文化が定着してくると思います。ワーケーションが象徴的ですが、そこから派生する動きもあるかもしれません。地域の改革旗手には様々な方々がいらっしやると伺っていますので、こうした成功事例を独占す

るのではなく共有していくことが何よりも重要だと思います。

諸外国からの来訪者も必ずや復活します。日本は水資源、森林資源、海洋資源に満ち溢れた広義の資源大国です。その中心にあるのが「温泉」であるのは衆目の一致することですので、SNSの盛んなご時世にアピール法を大いに工夫して、更なる温泉資源の利活用を進めてゆることが肝要と考えます。

井上 晶子

立教大学観光研究所 特任研究員

杏林大学 特任講師

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 専門委員

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

COVID-19により人の流れは大きく制限されている。日本全体に及ぶこの人流の制限は温泉地のみならず各観光地にとっての大きな危機である。近年においても人の流れを止める危機は何度もあった。バブル崩壊、リーマンショック、震災をはじめとする自然災害など。しかし今回はこれまでのそれらとは、先行きの見えない長期化、日本全体の共通危機という点で、また、動く側、迎える側双方が不安と行動を制限しなければならない点においても大きく異なる。危機を乗り越える糸口は、個々の地域・温泉地だけで見出せるものでない。

こうした状況下ある意味では、同じ状態に置かれていることからそこには競争性が生まれていない。

しかし、再び人の動きが始まった時には、以前にもまして互いに競争状況となること、そして数と経済の論理が優先されるだろう。失ったものを取り戻すために。これまでの被災時や災害復興のprocessに見られたように、危機においては地域の特徴・課題が浮き彫りにされる。いわば被災の真ただ中にある今だからこそ、立ち止まって、これらの課題を直視し、これからの目指す方向性をじっくりと考え、来る日に向けて準備をする絶好の機会ではないだろうか。危機を好機にできるかどうか。各温泉地が人流の止まった状態の中にじっくり腰を据えて考えるチャンスに転換することが望まれる。

2. 日本の温泉の今後のあり方

「日本の温泉の今後のあり方」といった命題は、とるべき一つの方向性ありきを想像させる。そうではなく、それぞれが、それぞれの場所の特徴にあった今後のあり方を模索し、取り組み、その結果として生まれる日本の温泉地の多様性が大切なのではないだろうか。

振り返ってみると、一つのテーマパークが成功すればどこもかしこも外国名を冠したテーマパークを目指した結果、その多くは今見る影もない。また総合保養地整備法（リゾート法）の下に各自治体がこぞってリゾート開発に取り組んだが、ほとんどが頓挫し、環境破壊と地域破壊の爪痕を残した。○●原宿と言われた観光地も同様

である。私たちはこれら失敗の歴史から多くを学ぶことができる。

環境省では誰もが楽しめる「温泉」をさらに普及させ地域を活性化させる試みとして、また、現代のライフスタイルに合った温泉地の過ごし方として「新・湯治」構想を打ち出した。以来、「新・湯治」「プチ湯治」「現代湯治」などの言葉を目にすることが多くなったような気がする。

泉質や地形の特徴、積み重ねてきた歴史や文化の重み、受け継がれてきた生業の多様性等、それぞれの温泉地には、「他とは異なる文脈を持つその地らしさ」が有るはずと思う。だから温泉地を継承していくプレイヤーは、その場所が故の温泉を舞台に、時代に応じた新しい視点を持ちながら演じていけばいいのでは。舞台を選び、演技にも加わりとうとする観客の置かれた年代、価値観、興味関心などは多様であるとともに、一方、何かに刺激されればその都度大きく揺れ動く不安定さを持っている。

この多様な観客が喜び、満足する姿に接することが、プレイヤーにとっての喜びである。問題は、そのために、観客・観光客の多様性に合わせようとすればするほど、どの舞台すなわち場所も個性の薄れた、その地らしさを失くした平均的な場所になってしまうことである。他所で人気を得たモノ、コトの取り入れは、何処にでもあるものとして飽きられやすい。

人が何度も訪れたいと思う温泉地は数多くある。これから学び、長続きする飽きられない場所であるために、それぞれの個性をアピールできる舞台の品揃えが必要であろう。

① 地域の個性は地域の文脈の上にあるということ。

新しく変化していく舞台づくりの選択肢は、グローバル化を図る、健康づくり、ウェルビーイングを目指して、ソーシャルツーリズムを可能に、予防医療としての温泉の積極的活用、ハレの日の楽しみの場所づくり、等たくさんある。その際、先述の地域の歴史が積み重ねてきたもの、すなわち地域の文脈を土台とし、しっかり活かしつつ、社会や人々の変化に対応するイノベーションを図

ることによって新しさの中に他とは異なる地域の個性が息づいてくる。

② 見える化（可視化）を図るということ。

この地域の文脈は、コト、モノ、ヒトを媒介として見える化を図ることができる。どの観光地に行ってもどこの町にも見られるイルミネーションを例に見てみよう。光るもの、瞬くものは確かに魅惑的であり人の目を惹き、心を弾ませる。しかし、何処にでもあるツリー状に青く光るLEDのつながりは、次第にまたここでもかと思わせるようになり、飽きが来る。雪の回廊に作られた小さな窓のろうそくの黄色い揺らめきは（たとえそれが同じくLEDであったとしても）、村の家々の窓明かりのなつかしさに触れるような、または、かまぐらの素朴な光景を連想させることで、その地域らしさの見える化が図られていると言える。

どこかにいきたいと思うとき最初に浮かぶのは訪れた地で交わりのあった人とその場所である。その地の文脈を背景に持つヒトは、その場所らしさを最もリアルに魅力的に「見える化」しているのだからだと思う。

文脈とはヒトをも含む地域の総体の姿であり、「見える化」を図る手段を通じて、物語性を持った他とは違う場所（舞台）として浮き彫りにされ（スポットライトがあてられ）、人々（観客）から選ばれる場所となるのではないか。そこには、その地にあった療養、保養、楽しみの温泉地の姿が有る。

③ 温泉地の総体としての取り組みであるということ。

震災復興過程において、平常時にはつながりがなかった業種、人たちがつながることによって、危機を乗り越え、新しい仕組みや事業を生み出している姿が見られる。同じように COVID-19により、温泉地が危機状況にあっても、人のつながり、組合組織や業種間の連携によって次々に新事業が生み出されている温泉地の事例が報告されている。

歴史が有ればあるほど相互利害が伴う中での縦と横の連携の難しさはあるが、その地の人々のつながりの柔軟性が危機状況を超える地域力となり、新たな創造がなされる発想力となる。内部のまなざしだけでは見えないことを、時には外部のまなざしが気づかせてくれる場合もある。地域力となる連携は、自らの垣根を内に向けても外に向けても取り払うことであろう。

④ 持続性のある取り組みに向けて。

志や行動の持続性を担保するには経済的裏付けが必要である。事業の立ち上がりにおいて諸制度を活かした資金獲得ができてその継続性には問題がある。折角の事業もいつの間にか消えていくことが少なくない。継続性を如何に担保するか観点からその対応策の一つとして、語りつくされた課題であるかもしれないが、入湯税への注目が有る。

今、誰もが語るキーワード「持続性（SDGs）」をどのように実際の温泉地に適用していくのかがなかなか見

えにくい。持続性を実現する一つとして、「レスポンスブル・ツーリズム」の考え方が有る。観光客が自らの意識や行動にも一定の責任をもつことで、より良い観光地を作っていこうという動き、すなわち「責任ある観光」である。これは受け入れ側にも言えることである。資源（温泉など）を利用した人たち（温泉利用者）が、利用する者の責任という立場から、また資源を末永く守り活用するという資源提供者側の立場から、議論しつつされたかに見える入湯税の課題を、今一度、新しい視点から、再度整理しなおすことができるかもしれない。すべての温泉地の共通課題として。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

日本型のワーケーション・ブリージャーの意義が、働き方改革や地方創生と紐づけた人口創出策、新たな旅のあり方として等、様々な視点から語られている。

多くの温泉地においても温泉、自然環境、湯治文化などを背景に取り組みが進められている。こうした仕事と休暇、ビジネスとレジャーを組み合わせる新しい価値観に基づくライフスタイルは、COVID-19収束後において、どのような層にどのような形で定着していくのだろうか。二拠点居住や移住に結びついていくのだろうか。交流人口としてステイクホルダーである地域社会とどのような関係が構築されるのだろうか。

長期視点に立って、その構造を見極めていくことは当フォーラムにとって、また各温泉地にとっても興味深いテーマとなるのでは。

4. その他

・場所を創造する人を育てる

上記の、2.や3.を考え実施するにおいて最も重要なのは「人材」であろう。多くの温泉の立地状況を見た場合、地域全体の高齢化がますます進む。そうした中で、腰を据え、その地を継承する人材がどのように生まれ、育てられるのか。今注目されている関係人口も、地域の人たちの支えがあつての関係人口である。次代の人材育てが注目される。

・家族経営的な旅館がどのような方向を辿るか

将来戦略として、高付加価値による富裕層をターゲットに・・・と語られることが多い現在、一方では、日常を暮らすように過ごす温泉地特有の生活スタイルの提供も重要である。こうした環境を提供できる家族経営的な宿の継承がどのような形で成されていくのかにも、長期的視点を持って関心を払いたい。量から質への転換は重要なコンセプトである。しかし質を高めるとはどういうことなのか、高付加価値は重要だが、その言葉の後に、富裕層、時間的経済的に余裕がある訪日外国人の言葉が続くことが多い場合には、疑問である。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

- ・「観光のパラダイムシフト」から「温泉地のパラダイムシフト」へ

近代観光は、産業革命による経済発展、近代交通の発達、旅行業の発達による利便性の向上など、人々の観光行動を阻害する「経済的距離」「時間的な距離」「心理的距離」が短縮されたことに伴い発達した。今回のパンデミックは、世界的な人々の移動禁止を中心に、近現代において旅の発展をさせた「旅の諸条件」が一時的に失われ、世界規模で観光産業に大きな影響を与えた。当面の間は観光を目的とした海外への渡航、団体での観光行動などは避けられるだろう。これらは第二次世界大戦後に発達したマストツーリズム（大衆観光）において、代表的な観光行動であった。パラダイムとは一般的に「ある時代や分野において支配的規範となる『モノの見方や捉え方』」といわれるが、我々はまさに「観光のパラダイムシフト」ともいえる時代の転換点を迎えたといえよう。

一方で、人々が抱く旅への欲求はどうであろうか。コロナ禍においても休日には海岸やキャンプ場などが賑わったほか、2020年は「マイクロツーリズム」「ワーケーション」「オンラインツアー」などが話題となった。旅行者、観光産業関係者などが、コロナ禍において新たな観光行動を模索した結果といえるが、旅をすることが困難な状況においても、旅をしたいという人々の思い自体は失われてはいないことを示していた。

コロナ禍が終焉すれば、長らく抑えられていた人々の旅への思いが花開くだろう。しかし、それは単なる従来の「旅の形式」の復活ではないだろう。コロナ禍において我々が直面した課題の数々は単なる行動の規制ではなく、従来のモノの見方では予想しえなかった「現実」であった。新たな時代の旅において、日本の代表的な観光地である温泉地がどう対応するのか、「温泉地のパラダイムシフト」が問われる時代になるだろう。

2. 日本の温泉の今後のあり方

- ・「持続可能な温泉地づくりー温泉の特性と地域の個性を生かした滞在の魅力づくりー」

今後のあり方を大別すると、①温泉資源の特性を生かした利用、②個性を生かした温泉地の地域づくりの2点があるのではないだろうか。

①は、温泉資源の適正な利用とともに特性を生かした社会的な活用だといえよう。長期的な視点でいえば、超高齢化社会を迎えるなか、人々の心身の健康が社会的な課題となる。コロナ禍は、我々に「健康の大切さ」を改めて認識させた。今後は「未病」も含めた多角的な温泉

利用が求められる。しかし、医療的な利用には健康保険制度を始め課題も多い。医学的なエビデンスも含め、長期的な取り組みが必要となるだろう。

②は、温泉地をどう持続的に維持するのかという課題である。歴史的に温泉地は、人々の心身の健康、癒しと楽しみ場であり、交流の場でもあった。「観光とは記号化された価値の消費である」ともいわれる。マストツーリズムにおいて誕生した「金太郎あめ」のような紋切り型な温泉地は、温泉地に行き典型的な過ごし方をする 것과自体に意味があった時代には一つの価値として成立しえた。

しかし、観光行動が多様化するなかでは、各地域に新たな「価値」の創出が求められるだろう。実際に地域の歴史と文化、固有性と魅力を理解して、まちづくりに取り組んでいる温泉地は、個性的な顔をもつ場として集客に成功する事例が多くみられる。また、温泉地は、宿泊産業が集積している場でもあり、多くの人々が訪問しても、日帰り観光地では持続的な発展が難しい。長期的な視点でいえば、温泉地、宿泊施設ともに短期滞在ではなく、中・長期滞在ができる場への整備が望ましいといえよう。これには地域住民、観光産業、観光行政の相互理解と協力が欠かせず、それを担える観光人材の育成と活動を支える財源が求められるだろう。

コロナ禍が終焉した後、短期的には国内で安心して楽しめる観光地に人が集まるだろう。温泉施設では体験できない価値をいかに提供するのか、それに成功した時、新たな顧客とともにリピーターを得ることもつながるだろう。温泉地が単なる旅の通過地点ではなく、目的地の一つになるように、各地域の特徴を理解し、個性を生かした滞在の魅力創出が必要不可欠である。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

- ・「温泉の過去・現状・未来を語る広場としての役割」

健康と温泉フォーラムの活動は、温泉の本質を多様な側面から問うとともに、温泉・温泉地の保護と活性化について提言を行ってきた。まさに、産官学のプラットフォームとして、温泉の過去と本質の理解、促進に努めるとともに、現状を分析し、未来について議論をすることを通して、関係者、地域の交流の場として機能している。

今後も健康と温泉に関わる社会的課題を議論し、温泉の保護・社会的活用の増進に取り組むとともに、①一般の人に対しても温泉への理解と知識の普及をもたらし、②温泉地の諸課題を探究する場の2つの役割を期待したい。フォーラムは、古代ローマの公共広場に発し、今日では、広く公共的討論の場としての意味を持つ。今後、

温泉と健康に興味を持つ人々に対して広く開かれた「フォーラム」としてさらに発展することを期待している。

4. その他

- ・「温泉文化を継承する人材育成」

温泉地が抱える課題は多いが、温泉地が持続的に発展するためには、温泉地を内外から支える「人材育成」が必要ではないかと感じる。従来の湯治文化では、祖父母や親に連れられて、幼児期から湯治に訪れており、温泉地の滞在習慣、滞在することの意味が温泉文化として継承されてきていた。近年では湯治場の減少だけではなく、

地域の高齢化、旅行者の温泉地離れ、大学附属温泉医学研究施設の閉鎖など、多様な場面において次世代を担う若者と温泉地の接点が失われつつある。大学教員として温泉関連科目を担当しているが、温泉好きの学生は多いが、温泉の特質と温泉地の多様な個性を理解している学生は極めて少数であると感じる。

観光地、温泉地ともに、「パラダイムシフト」をむかえるなか、温泉という資源を理解し、温泉文化を継承・構築し、温泉地の活性化に貢献できる人材をいかに育成するのか。健康と温泉フォーラムをはじめ、産学連携の場、温泉地の広域連携の場を生かし、自らも模索していく必要があると考えている。

大塚 晃弘

公益財団法人中央温泉研究所 主任研究員

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナウイルス感染症拡大という禍により、私たちを取りまく生活環境は、大きく変えざるを得なくなりました。緊急事態宣言により、温泉地では温泉の利用施設の営業を制限せざるをえない状況も繰り返し続きましたが、そのような中で温泉の宅配サービスや、温泉地の動画配信など様々な取り組みが、紹介され人々の心を温めました。新型コロナウイルス禍の状況下では、各温泉地でいろいろな取り組みが行われていますが、これまでの常識にとらわれない対応が求められています。

新型コロナウイルス感染の収束による事業再開と感染拡大に伴う事業の制限は、今後も繰り返され、平時に戻るまでまだ時間を要すると考えられます。新型コロナウイルスのウイルスに対する抗体の持続性は、不明ですが、発症後6か月程度と言われているので、ワクチン接種が広まっても、今後は、感染症予防対策を意識した旅行が求められると予想されます。しかし、今、人々はこれまで以上に旅に出て温泉に入り癒やされたいと強く願っています。Go To トラベルキャンペーン等の効果も大きかったと思いますが、感染者が少なくなり、感染症対策が行われ安全さえ確保されていれば、観光における回復は比較的早いことは既に立証されています。1日も早い収束を願うばかりです。

2. 日本の温泉の今後のあり方

利用客数は減少傾向にあり、インバウンド頼みの温泉地では、現在、旅館の休業や閉鎖が相次いでおり良くない状態にあります。テレワークやワーケーション等の新しい利用も含めて国内の需要をあらためて見直す必要があるでしょう。

今後は、温泉の設備更新等が進まず更に老朽化が進行してしまうことが危惧されます。また、設備を管理する人材不足も心配されます。人材育成については温泉地で働く人だけでなく、研究者等も少なくなっており、緊急の課題だと思います。

気候変動に伴って発生する異常気象や、地震等への大規模災害への対応も課題です。温泉地で働く人も宿泊客も、どんどん高齢化し、建物も古くなっていますので注意が必要と思われます。

温泉文化について、私は知見を有しないためよくわかりませんが、その土地に伝わる昔からの温泉利用（入浴法、料理や熱利用など）を多くの人に知ってもらい次世代へ伝える仕組みがあれば良いと感じております。

近年は、温泉の利用に求められる内容は多様化し、温泉熱の有効活用が期待されています。ただし、温泉は、多種多様な種類があり、各々異なる特性、成因を持っています。温泉を真に有効活用するためには、その科学的特性を良く調べた上で計画する必要があります。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

急激にかつ大きく変化してゆく社会環境の中で、温泉地はどう適応していくか、調査・研究を継続することが大切だと感じています。このような研究を広くまた長年に渡って続けられている貴法人の役割は非常に大きく今後も期待しています。

4. その他

新型コロナウイルス禍により、これまでの旅行の価値観は変わったかもしれませんが、温泉地に行き癒やされたいという人々の願いについては変わらず、むしろより強くなっているように感じます。現在の新型コロナウイルスにおける問題が落ち着けば、必ず温泉地の観光客数は復活すると期待しています。ただし、同様の感染症による禍は今後も発生するおそれがあり、感染症対策については今後もある程度は続くとは予想され、そのコストなどが課題だと思います。

温泉に求められることも時代と共に多様化しています。温泉の更なる活用が、地域活性化や温暖化対策等に貢献することを願います。

温泉地の新たな活用法は、これまでの経営の改善や雇用・観光客増加など更なる地域活性化が期待されます。ただし、一時的なものではなく持続的に長く使える方法でなくては、課題解決には繋がりません。

上記質問2.で回答記入しました温泉地や観光客の高齢化や人材の問題、災害対応の問題、多様化する温泉へのニーズについての対応など今後も将来への課題は数多くあります。より多くの人で知恵を集めて課題解決に取り組む必要があると感じております。

大野 正人

観光リサーチ&プランニング事務所 代表

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 理事

元・公益財団法人日本交通公社 理事、高崎経済大学 地域政策学部 教授

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナウイルス対策による移動制限・会食制限により、旅行・観光は未曾有の需要消滅に直面しているが、今後のワクチン接種により安心感を持って旅行ができるようになるまであと1年、そしてインフルエンザと同様に新型コロナと共存できるようになるまでプラス1年が観光・旅行の回復までの期間と考えられる。

この期間を観光地、温泉地は様々な支援策により生き残りを図るとともに、前述した需要回復後に現れる変化に対応できる準備を進めていくことが必要と考える。その変化は、リアルな交流からリモート、非対面交流への移行が、半強制的であったにせよ一定範囲で定着しつつあることである。このことは、ワクチン等により新型コロナウイルスへの不安が無くなった将来においても、出張等の業務旅行やMICEの需要が縮小傾向となるであろう事を示唆している。数年後における出張旅行やMICEは、おそらくキーパーソンはリアル、それ以外の人はリモートというハイブリッド型開催が主流になると考えられる。このような業務旅行の需要縮小見込みに対して、観光レクリエーション旅行はどうであろうか。現在、新型コロナウイルス禍への対応として各地でバーチャルツアー、バーチャル宴会体験等が提案されている。しかし、観光は人々との相互の視覚認識と会話内容だけで成立する会議とは異なり五感で感じるものであり、まして温泉入浴体験はその最たるものである。従って、観光レクリエーション旅行がバーチャルリアリティで代用されることは近未来の技術革新程度では困難であり、このようなバーチャルツアーの発達は、現状でもTVや映画の旅番組が旅行動機を創出していることと同様に、むしろ観光プロモーションの手法の一つと考えるべきである。

このように観光レクリエーション旅行の需要は数年後には回復すると期待できるものの、観光地における接客、ホスピタリティのあり方には大きな変化が定着すると考えられる。その理由は、あらゆるサービスは消費者がその形態に習熟することでその発達が促されることにある。新型コロナウイルス禍により否応なく非対面サービス、三密を避けるサービスに習熟した消費者はそのサービス

形態をその後も受け入れ続けることとなる。すなわち、低価格の料飲店舗や宿泊施設等の比較的単純な接客業務、あるいは観光案内のような情報提供業務に関しては非対面サービスが継続して発達し、対面サービスは機械では代替困難なより高度なホスピタリティとしてむしろその価値を高めていくと考えられる。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉は日本の貴重な自然資源であると同時に、日本人のライフスタイル、生活文化を形成してきた歴史文化資源である。また、その活用方法は、保養・休養に加えて一部では療養であるが、中核となる保養・休養活動は、温泉資源だけでなく地形・植生・気候・景観など全ての自然環境と、そこでの滞在生活、保養・休養生活をサポートする「街」により可能となる。そこで、日本の温泉を活性化するためには、「温泉地の歴史文化をもとに、その滞在環境を高めていくための温泉まちづくり」の推進が必須である。

この温泉まちづくりは、ゾーニング・景観形成などの都市計画としての政策立案から始まり、その実行は公共投資や公的財源により自治体やDMO等の公的な地域団体が担っている。一方、「街」の機能の充実には、その地域の民間事業者、サービス産業が大きな役割を担っているが、温泉地は都市のようにもともと住民に必要な都市機能、サービス産業が発達していない。そのため、民間のサービス産業の活性化を促進する政策が重要となる。これは新型コロナウイルス禍によりますます温泉地の観光産業の財務的疲弊が進んでいる現状から、緊急の課題となっている。

そのための具体的手法は、「様々な事業再生の仕組みの適用と支援」「それを持続するための事業者間の連携・統合による生産性向上」「既存の観光産業の新たなサービス業態への転換」という3つの組み合わせである。温泉地において、その新しいサービス業態への転換として最も必要とされているのは、長期滞在に即した宿泊施設や短期賃貸住宅、多様な食事サービスを提供する飲食店とその宅配サービス、地域内での二次交通サービスへの

シェアビジネス導入であり、これらの生活支援サービスの充実のうえに、温泉資源を活用したリラクゼーションサービス（エステやマッサージ、運動指導）と療養サービス（医療と介護、リハビリ）が上積みされるのである。

さらに前述の保養・休養及び療養に加えて注目されつつあるのがテレワークの発達による移住または二地域居住（自宅と観光地での滞在拠点の交互利用）である。このうち移住は、完全なテレワークが可能な仕事内容に限られていることから、二地域居住が最も可能性が高いと考えられる。その具体的なサービス体系については、既に都市のホテルでは様々な提案と試験的活用が進んでいるが、観光地、温泉地でも、宿泊施設の客室や町営住宅の転用により、どのような二地域居住が可能なのかを、それぞれの立地条件に合わせて試行していくことが必要である。

神崎 宣武

民俗学者
元・旅の文化研究所 所長

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

大正7・8（1918・19）年のスペイン風邪の大流行のときには、全国の町村で避病舎を造った（避病院も）。そこに「疫（やく）神（じん）」を祀った事例もある。さすがに、現代は神頼みとはならないが、終息を願う祈りにも似た信心はあってしかるべきだろう。

2. 日本の温泉の今後のあり方

世界に稀なる「耽溺（たんでき）の文化」を大事にしたい。それは、日本人の若者たちにも託したいが、かつてそれを否定した欧米系の来日者が理解・共感してくれる時代になっているのではないかな。

甘露寺 泰雄

元・公益財団法人中央温泉研究所 専務理事
特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 顧問

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

一番重要なのは、コロナは人間が媒介して、感染者数が増えるので、感染者数を抑えることである。これに対して、経済が一番重要であるという意見が大きくとりあげられ、国及び関連機関の対策が後手、後手に回り、ウイルスの検査体制の不備（例えば、サイレント感染者に対する検査等）もあって、感染者数が増加し、療養ベッドの利用率の問題等もあって、現状に至っている。わかりやすく言えば、火事が大きくなって消防車を呼ぶような状態になり、感染拡大が広がっているのが現状である。つまり、「早く手を打つことが一番大切」である。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

健康と温泉フォーラムは、温泉そのものの活用のあり方の研究と、それをもとにした政策提言を基本として、様々な立場の人が異なる視点で議論する場である。これは、他の温泉や観光に関する公的機関や民間団体がそれぞれの加盟事業者や行政の位置付けによりその視点が限定的であることとの違いであり、それ故に参加者にとっては異なる視点を学ぶ場として期待されるところである。このフォーラムとしての性格は今後大切にしていきたい。また、月例研究会は研究の場、事例研究は各地での開催という組み合わせは今後も基本としていきたい。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

欧米の理解者を含めて幅広い分野の温泉論者で、年に一度の「国際温泉フォーラム」を開催したらいかかかな。

4. その他

たとえば、台湾の北投温泉などは、日本式の温泉地化をしている。こうした事例も紹介しながら、日本の温泉浴（耽溺の文化）の伝統の正統な（マニャックでないという意）出版をフォーラムとともに考えるべきであろう。それが、後世に伝えることになる。

2. 日本の温泉の今後のあり方

現状で観光事業は大打撃を受けている。この対策はいろいろ提案されているが、温泉施設でも「感染者数を増やさない」ための、3密といわれている接触の抑制、マスク、手洗い、特に会食と入浴時の注意、脱衣場の衛生管理の徹底等が主な対策で、他に、施設でのワーケーションも重要と考える。

環境省の「新・湯治」も新しい方向として期待されている。元来「湯治」の「治」は治めること、乱れを是正する、わかり易く言えば、湯・温泉で体を治すという意味であるが、今後は、発展的に湯・温泉を治すという意味にとらえ、「新・湯治」は温泉地の問題点を是正するという意味を含んでいることを強調したい。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

毎月開催の講演会で、演者が講演した内容や要旨をまとめて、冊子にして出版することを提案する。

昔、健康と温泉フォーラム記念誌が、1986～2000年頃にかけて出版され、貴重な文献として活用された実績があり、是非実施していただきたい。

4. その他

私は、温泉の分析、調査、研究に携わっておよそ70年。この間温泉の法律、行政、資源保護、枯渇現象、衛生管理、適正利用等で未解決として放置されている多くの課題が存在する。今回そのうち、温泉法がらみの問題点の幾つかを紹介してみることにする。

1) 温泉法に関係して

温泉法別表の温泉の基準については、ドイツの1910年代のナウハイム協議の数値、つまり100年以上前の基準が現在でも使われている。

温泉法については、日本温泉協会で、改正案を提示したことがあるが、そのまま現在にいたっている。特に、メタけい酸、メタほう酸、重炭酸ソーダ、ラジウム等は基準値を含めて再検討が必要と思われる。

2) 温泉法と現行の鉱泉分析法指針の関係

温泉法施行当時から指摘されていた事項、温泉法に別表の成分を測定する方法についての明確な記載がない。昭和23年の温泉法制定時に、法に記載されていない事項について、「省令により云々」が何か所かあり、通知で補える仕組みが記載され、行政的に法の不備を補えるようになっているので、問題点が見過ごされがちである。例えば、鉱泉分析法では、療養泉の判定を重視しているが、温泉法には、療養泉とか、適応症等には全く触れていない。また鉱泉分析法では、温泉よりむしろ、戦前の衛生試験所で用いていた「療養適否試験」を受けついで策定されたと考えられ、更に温泉法に規定するすべての成分が掲載されたのは、昭和53年の鉱泉分析法指針改定からである。但し、ヒ素については、現在でもAs(III)と(V)の分離分析法は掲載されていない。

3) 成分の含有量が浴槽の位置によって異なる問題

温泉法では、温度については源泉の測定値が基準になっているが、成分については特に分析場所の記載がない。そこで、環境省の通知として、源泉から利用施設までの間、利用場所、例えば浴槽も含めて分析が行われ、分析表が掲示されている。本来は、入浴客が、どのような質の温泉に入浴しているのかを知ることが趣旨で、同時に有害性物質について特に利用時の含有量が問題になる。特に注意したいのは、不安定成分と云われる、硫化水素、二酸化炭素、鉄(II)、ラドンなど、揮散や酸化されやすい成分は、源泉と利用場所、例えば浴槽でも位置によって、含量が異なり、また循環消毒等が行われている場合は、分析表の含量とかなり異なる場合があるので、注意が肝要である。

4) 利用面における安全性の確保

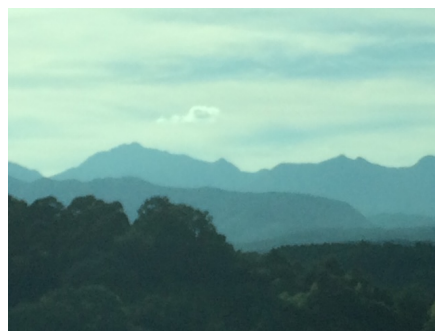
可燃性天然ガスについては温泉法で、詳細な対策がきめられているが、浴槽の空気中の硫化水素と、レジオネラ属菌の対策については、温泉法での記載ではなく、環境省、厚生労働省の通知等による規制のみである。飲泉についても、規制は簡単で、飲料水の基準ほど綿密ではない。特に、硫化水素やレジオネラ属菌による事故は後を絶たないので、対応の検討が必要なのは。

5) 最後に温泉法の根本にかかわる問題

イ 温泉法制定の根拠として、個人の財産に関係する事項は立法によらなければならないという趣旨から温泉法が制定されたと云われているが、肝心の個人の財産(例えば温泉権)に関する事項は温泉法に掲載されていない。更に、民法の「私権は公共の福祉に遵う」という条文と、温泉の権利、例えば利用権と公益性の関係とか、影響があった場合の受忍の限界等に関し、温泉地を例としての具体的な問題と、その対応の解説が欲しいところである。

ロ 温泉法に「公益」という言葉がつかわれているが、これについてのわかりやすい説明が重要。公益を害する虞れの事例は幾つか示されているが、「温泉法の中の公益」とは何かといった問題。

ハ 温泉は循環水であり、地下に貯留、流動している水の塊であるが、温泉法では掘削の許可とか影響については、多くの場合、個々の源泉、掘削井の問題として取り扱っており、周辺の地下水を含む地下の流体としての挙動、貯留層としての全体的、地域的な広がりを考慮した現象としての認識が明確とは云えない。例えば、保護地域などは、都道府県の行政的な対応として処理されているが、一步前進した対応が欲しい。



栗原 茂夫

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 常任理事

作新学院大学 客員教授 公益財団法人日本交通公社 監事

前・一般財団法人日本健康開発財団 代表理事理事長、株式会社JTB関東
常務取締役 等

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナウイルス感染症の拡大により、人々の接触や移動、交流が大きく制限されている。更なる長期化に伴う影響は、我々の健康や生命をも脅かし、日常生活のみならず社会や経済のあり方、行動や意識等様々な場面に悪影響を及ぼしている。これらは、人と人の接触、地域と地域との距離といった物理的な断絶や、それに起因する不安や恐怖、偏見や差別、ストレス等による心理的ダメージへも波及している。

アフターコロナでは、人類の英知が結集され、人々の価値観やライフスタイルの変化に沿った新たな温泉及び温泉地のあり方、活用法が登場することを大いに期待するとともに何らかの役割を果たしていきたいと考える。

2. 日本の温泉の今後のあり方

日本には古来より湯治の文化が根付いており、入泉や飲泉によって様々な疾患が予防・改善される可能性が、適応症（いわゆる「効能」）として広く知られているが、これらの有益な効果がもたらされるメカニズムについては明確にはなっていない。かつて慶応義塾大学先端生命科学研究所、大分県竹田市長湯温泉、及び私の所属した日本健康開発財団温泉医科学研究所等による共同研究において、糖尿病の予防・改善効果が報告されている温泉水（炭酸水素塩泉）の飲用が、解糖系の亢進、タンパク質分解の抑制、肥満防止効果がある腸内細菌群の増加などを介して血糖状態を改善し、糖尿病の予防・改善効果を有する可能性を示した。つまり温泉水の成分に、これらの改善に良い影響を与える何らかの物質が含まれているのではないかと想定される。が、明快な医科学的エビデンスを得るには至っていない。

最近では、「大分県別府市で湧出する温泉水に生息している微生物に、新型コロナウイルス感染リスクを53%以上低減させる可能性があることが、同市に本社を置くバイオテクノロジー企業の調べで分かった」との記事を目にした。

また、「群馬大大学院と草津町は、草津温泉の湯畑源泉の温泉水に新型コロナウイルスの感染を抑える高い作用があるとの実験結果を発表した。ウイルスを増殖できないようにする『不活活力』は、湯畑源泉の温泉水を用いた場合、水道水と比べて最大283倍と判明。同様に強い酸性の硫酸水溶液と比較しても50倍以上の不活活力があると分かった」との発表があった。

どちらも詳細は明確にはなっていないと思われるが、温泉を活用した健康改善、特に新型コロナウイルス感染を抑える効果・効能が明らかになっていくことは大いなる喜びである。

地球の生命とパワーから生み出される、まるで生き物のような温泉は、地球のエネルギーが凝縮しておりまさに、地球から人類への最大の贈り物だ。この温泉の医科学的な作用のエビデンスを解明し、物理的にも心理的にも人々の健康に最大限活用されることを望みたい。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

常任理事という立場上、ここでは発言を控えるべきであると考えます。

強いて言うなら、フォーラムの有するあらゆる有益なものを、次の世代に継承していきたい。

4. その他

人は、失ったことで初めて大切であったことに気づく。これまで当たり前と思ってきた日常生活や価値観等が、根底から大きく揺らいでいる。ITの進捗やテレワークの普及によって、全国どこでも仕事はできるようになった。大都市への集中がむしろデメリットとなり、様々な課題が明確になってきた現在、特に温泉地への移住や魅力の再発見がより一層進んでいくことを期待する。

幸福や豊かさといった価値観が重要視され、それを実現させるために協調や連携等が必要不可欠であり、健康と温泉フォーラムがプラットフォームとなっていくことを目指したい。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナウイルス禍で、観光分野に身を置くものとして考えたのは、我が国の観光地には温泉地が多い中で、①いかに観光産業の存続を図るか、②本当に観光・旅行は社会にとって必要なのか、③これまでの観光のあり方は本当に良かったのか、の三つに集約されます。以下、答えがあるわけではないので、考えた点だけ列記します。

①に関して

① ある特定の場所、期間だけでなく、旅行する側、受け入れる側が同時に、そして世界中で一年以上にもわたって大きく活動を抑制しなければならない。そうした未曾有の災禍の中で、いかに観光産業を存続するのか。移動を抑制しつつ、一方では移動を喚起する、促すというジレンマを抱えながらの取り組みとなるが、災禍や変化に備えた観光分野での準備について私自身がしっかり向き合わず十分にできていなかったこと、言い換えれば、その場限りか後手の対応であったことが最も悔やまれる。

② 観光産業そのものの存続をいかに図るか。観光産業一つに大きく寄りかかる構造とならないよう、平時から観光依存度などを観測し、時には抑制管理しながら、観光振興をしなければならないのではないか。コロナ禍で、観光に直接的に関わりのない人も含めて、地域の住民が、国民が観光産業をなんとしても守りたい産業だと思ってもらえているだろうか。

②に関して

① 旅が人々の人生にとって、人間形成においていかなる役割を果たしてきたのか。不要不急の移動に含まれてしまう観光・旅行が一人ひとりの生活から大幅に減った時に、どのような影響が出るのか。自分とは異なる価値観の中（温泉地などの地域コミュニティ）に身を置き、肌で体感することの重要性をより強く発し後押しする方向にコロナ禍のオンライン社会化が向かうのか。

② 地域外の観光客を主に相手とする観光産業の脆弱性をただ指摘するだけではなく、自らが旅行者の一人として、他地域に受け入れてもらっていた、受け入れてもらえる地域があって初めて観光・旅行ができていたということを一人ひとりが自分ごととして気づき考える機会となっているだろうか。また、観光がいわゆる宿泊施設や観光施設だけではなく、多くの地域産業と結びついていることを再認識してもらう機会となっただろうか。

③に関して

① ここ数年、世界レベルで社会の変化が加速しており、日本の地方においてもその影響が及んでいた。プラ

スの影響とともに、マイナスの影響（オーバーツーリズム等の現象による）も顕在化していたが、立ち止まってじっくり考える時間はなく後手に回った部分も少なくない。地域自身が修養にあてたり、養生したりする時間がなかったように見えた。

② 今回のような災禍は、将来再び発生するかもしれない。できれば、そうでないことを願いたい。そう思えば思うほど、今という時が「一度しかない貴重な時間である」という認識が強くなる。今だからこそ本質なことを考えなければならないのではないか。足元を見つめ直し、身の丈の生き方から「観光のあり方」を再考しなければならないのではないか。

③ 現在の状況が仮に収束したとして、従前から抱えていた課題の全てが解決するわけでない。変化する社会の中で、本当に守りたいもの、本当に会いたい人（本命の観光客）、根底にあるもの、根幹に据えるもの（立脚すべき競争に晒されない地域の個性とは何か）など、自問すべきこと、見極めておくべきことは多い。

④ また、コロナ禍以前に、例えば、安全・安心であれば、受け入れ側としてどのように取り組んでいたか。感染拡大を防ぐことが求められているから、という即時的なことだけではなく、そもそも「生命（いのち）」というものにどのように向き合って安全・安心を考えていたか、など、少し視野を広げた上で、見直すことが必要であり、私自身も正面から考えた。

⑤ 温泉及び温泉地に限って言えば、自然の恵みである温泉資源の使い方や、観光で見えづらくなっていたかもしれない温泉地の素の姿、暮らし方、大切にしてきた価値観などをもう一度見つめ直してみることも今だからこそ大切だと思われる（①の議題が急務であると思われるが）。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉に関わる実務及び研究領域は非常に広範で求められる技術も多岐にわたると認識しています。多様な温泉関係者がいらっしやる中で、本当に関係者が力を合わせて注力すべきは何かを議論、共有し、それを活動全体の中核に据えるためには、まずは①拡がる活動領域全体を俯瞰する「見取り図」（それぞれが自身の領域を客観視するため）と、②現状に至るまでの過程を理解するための「歴史」（先人たちの努力により改善されたこと、問題としてこれからの人が解決に挑まないといけないこと）への理解の二つが必要になると考えられます。それらを共有していくと収斂し核となる活動・テーマがより鮮明に浮き上がってくるのではないかと考えられます。また、そ

のためには、温泉専門人材とともに、温泉総合人材の育成も必要になってくるのではないかと思います。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

健康と温泉フォーラムの皆様と接してきた中で考えますと、大きくは次の三つです。一つ目は、「温泉の恵みを分かち合う暮らし、生き方」に対して敬う心のある人々が純な想いで集い交流し続ける場であること。二つ目は、長い年月を積み重ねた活動でしか築き上げられない知見・視野・人間関係を基盤とする「時間の重み」を活かした活動であること。三つ目は、時間を超えて役に立つ、耐

用年数の高い「記録」を蓄積し続けていただけること。個人的にはこのように感じております。

4. その他

現代社会に静かに息づく温泉地のライフスタイルそのものが、国内外の人々の生き方を見つめ直す「先導役」となり得る可能性があることをトータルでプレゼンできるかが鍵となってくるかと思われます。また、温泉地に限らず、日本国民の日常の入浴文化をどう維持していくか、ここも併せて見ていく必要があると思われます。

齊藤 雅樹

東海大学 海洋学部 教授

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

COVID-19の一連の状況において、温泉地、温泉施設のあり方や役割を見直す機会になった。もっと言えば「温泉の本質とは何か」を考える好機となった。

身体は薬でも温泉でも癒せる、しかし心は薬でなく温泉で癒す、との思いで温泉地を訪れているように感じられる。コロナ禍の外出自粛は人間の「心」の健康にダメージを与えているが、入湯者からは温泉で回復させたいとの思いが伝わってくる。

一方で、人々の清潔感・リスク回避の志向はよりシビアになり、温泉施設がそれらをどう入湯者に担保するのかについて新しく様々な提案が求められている。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉の本質をどう読み解くかの議論が活発になることを願う。

現在の議論は、温泉を「手段」として論じているものがほとんどである。エネルギー源、観光資源、地域振興の材料、収益源、研究の対象、コミュニティ形成、健康改善の手段、などなど。もちろん、これらは大変重要ではあるが、それ以前に「温泉そのもの」の議論をおろそかにしてはならない。

そもそも「温泉が好き」という人は、理由なく温泉を訪れる。温泉に機能を求めずに温泉を訪れる。ただ、好きなのである。このような「温泉そのものを愛好する」人間が数多くいることを無視するべきではない。

温泉は人間に多大なる恵みをもたらすため、つい、その機能に焦点を当て、温泉を手段として使いたくなるのも理解できるが、エネルギーやお金やコミュニティなどは他の手段でも入手可能である。代替不可能な存在として、温泉を捉えることがまず必要であると考えます。

この原点が抜けると、なぜ温泉を重用するのか、温泉を保護するのか等が不明確になってしまう。温泉地での論争を見ていると、この観点が欠落しているために議論がかみ合っていないのではないか、と思わされることがある。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

温泉に関する議論の場、交流の機会を継続的に提供して頂いており、合田様をはじめとする皆様のご尽力には心より敬服しております。引き続き、この有意義な御活動を継続し、発展拡大して頂けることを切に願っております。

4. その他

温泉に関しては、趣味性と安全性の両立をきちんと図る必要がある。コロナ対応でもそうであるが、入浴事故死、レジオネラ症など安全性を損ねる要素は避けて通れない。その一方で、拙速な対応策で温泉の趣味性を損ねては本末転倒である。「頭を削って帽子に合わせる」ことにならないための議論が必要であり、新たな提案、仕組みづくりが求められる。

高齢化もあちこちで見られるため、若年層の温泉人材を養成する取り組みも強化する必要があると痛感する。

坂本 誠

政策研究大学院大学 政策プロフェッショナルプログラム 在学

特定非営利活動法人ローカル・グランドデザイン 理事

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 専門委員

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

不要不急を排除する流れのなかで、旅や交流は不要不急として仕分けされ、出かけて誰かと会うことも、ままなくなってしまう。たしかにITが発展した今日では、自宅に居ながらにして様々な情報が手に入り、遠方の人々と気軽に交流できるようになった。しかし、直接会って接しないと叶わないこと、現地に入り五感を働かせないと得られないものがあるのではないかと。現代のように移動が楽なものではなかった時代、交流が必ずしも自由ではなかった時代にも、人々はなんとかして旅に出て、交流を重ねてきた。なぜそうまでして人々は旅をし、交流を重ねてきたのか。旅や交流によって社会や文化が育まれ、今日があることに、もう一度思いをいたす必要があるのではないかと。

旅行業界への支援は経済対策として政策立案が行われ、その結果Go Toトラベルが実施されたが、農業政策を通じて、価格補助政策が経済的にいびつな状況を生み、あまり良い結果はもたらさないということを学んだ者としては、本当にこれでよかったのかと思わざるをえない。旅行業界やそれを支える人々を社会に不可欠なインフラであると認識し、それを維持するための手段として政策を立案すれば、感染対策期間中はPCでいうところのサスペンド状態であると捉え、スタッフの生活保障も含めて期間中の固定費をカバーするなど、もっと別の選択肢があったのではないだろうか。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉地に赴くたびにつねづね感じるのは、温泉地としてのエリアマネジメントが決定的に不足していることである。温泉地の環境整備と称しつつ、広場や公園、遊歩道、あるいはモニュメントの類を設置してこと足れりとしているところが多いが、それらの整備はいずれも点や線でしかなく、面的にはちぐはぐな印象を与えるような結果を呈しているケースが少なくない。

エリアマネジメントの実現を目指して、権利調整も含めて粘り強く説得・交渉をして合意形成を図り、実施・運用まで担っていく体制づくりが必要だが、もちろん、各々の温泉地が徒手空拳でその実現に漕ぎ着けるのは並大抵のことではなく、それを支える制度が不可欠である。

その点、近年、まちづくり・地域づくりの分野では、BID (Business Improvement District)、景観協定や景観条例など、エリアマネジメントのための新しい制度や取り組みが次々と生まれている。過疎が進んでいる地

域には、特定地域づくり事業協同組合という制度も設けられた。まずは、こうした制度や取り組みを学びつつ、温泉地として活用できる方策がないか検討できないだろうか。そうすることで、制度改革を求めていくにしても、もっと具体的に説得力のある提案ができるのではないだろうか。また、エリアマネジメント等の財源として温泉地が入湯税をもっと主体的に活用できるよう、近年導入の動きが広がっている宿泊税のこともふまえながら検討していくことが必要だと考える。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

このコロナ禍が落ち着いた暁には、大々的に実施されるであろうGo Toトラベルキャンペーンもあいまって、堰を切ったような旅行ブームが巻き起こることだろう。それを一時的なものに終わらせるか、息の長いトレンドに持って行けるかで、旅行産業や温泉の将来は大きく左右されるように思う。そのためには、前述したような、旅の本質をめぐる議論、エリアマネジメントの体制づくりとその運用、そして、温泉が心と身体の健康に寄与し、健やかな人生を育むために欠かせない存在であるとの認識が広がるよう、その裏付けと普及に努めていく必要がある。そのなかでフォーラムが果たすべき役割は大きいのではないかと。

また、今回のコロナ禍への対応を通じて、温泉に関わる人々どうして情報を共有し、発信していくプラットフォームの不足を痛感した。フォーラムが業種や分野を超えて多種多様な人々が集う場であり続けることを願うとともに、その実現のためにできることがあれば、微力ながらお手伝いしていきたいと考えている。

4. その他

温泉に限らず旅行業界全体の傾向かもしれないが、高付加価値化や価格帯の引き上げを追求する動きが盛んであるように見受けられる。中価格帯の宿泊施設が苦戦している様子を見聞きすると、ビジネスとしては高付加価値化が正しい方向なのかもしれないが、旅や温泉が中高年や富裕層向けのハイカルチャーとなり、若者やファミリー層から縁遠い存在となってしまうのは、長い目で見れば決して良い結果はもたらさないと思う。

その点で言えば、遊休施設を活用してコストパフォーマンスを追求した宿泊施設チェーンがファミリー層の受け皿になっていることは見逃せない。もう一つ興味深いのは、近年、若者を中心にゲストハウスの起業が増えて

いること。このコロナ禍で一時的に動きは止まっているようだが、民泊も普及しつつある。業界のメインストリームからは外れた存在かもしれないが、こうした新しい動向が旅や温泉のあり方に今後どのような影響を及ぼすのか、関心を寄せていく必要があるのではないかと。

様々な意見はあるが、私は、旅や温泉は多くの人々が楽しみくつろげるメインカルチャーとしてあり続けてほしい、そのためにはもっと間口を広げ、幅広い要素と可能性を受け止める度量の広さと懐の深さを持ち続けてほしいと願っている。

桜田 一洋

国立研究開発法人理化学研究所 情報統合本部
先端データサイエンスプロジェクト プロジェクトリーダー

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

温泉に抱かれて ～アートしての温泉～

在宅勤務でパソコン相手の仕事に疲れると散歩に出かけることにしている。自宅は起伏のある丘陵地帯にあり、散歩途中にふと角を曲がると、高台から広がる街並みとその先にある丹沢と富士山を望むことがある。こんなふうにして出会った場所には、繰り返し訪れるようになる。面白いのは、この風景がそのたびごとに異なる姿を見せてくれることだ。

散歩道には庭のある家が多い。庭の木々は人工的に選択され配置されたものではあるが、個々の草木からは生命の息吹が感じられる。新緑の季節には初々しい緑が日の光を受けて輝いている。葉には必ず光が反射している部分、陰になっている部分、境目の部分があり一つの葉が異なる色を発している。それが草木に彩をもたらししている。人の心も社会からどのように照らされるかで、異なる姿を見せる。

現在のデジタルトランスフォーメーション(DX)が不毛なのは、現実を記号に落として処理することが仕事だと錯覚させるからだ。記号処理では、効率や合理性からの最適解を求められる。効率や合理性が必要なこともある。問題なのはすべてを最適解で統制しようとする事だ。こんな考えが世界に蔓延している原因の一つが能力主義という幻影である。努力して競争に勝ったものが地位、名誉、財産を得るという実力主義が勝者と敗者を生み世界を分断している。競争が社会を進歩させてきたという

のは妄想である。相手を蹴落とすことが目的の人間に価値を生み出すことはできない。困っている人を助けたい、相手を楽しませたいという強い想いが努力を促し、新しい価値を創造するのだ。このような広義の愛を私は協創と呼んでいる。

過去二度、地球は全体が赤道まで氷に覆われたことがある。この苛酷な環境のなかから、まず真核生物が誕生し、二回目の全球凍結のあと多細胞生物が誕生した。真核生物は原核生物が共生することで誕生したものであり、多細胞生物とは個々の細胞がひとまとまりとなり協力することである。こんな協創を促したのが氷に覆われた地球に温かさというオアシスを提供した温泉である。

心や身体がどんな状態でも温泉は私を優しく抱いてくれる。小学生の息子も温泉が好きで、幼い頃からよくいっしょに入浴した。温泉は穏やかで幸せな時間を二人に与えてくれる。それは記号や記号処理に落とすことのできない人生の意味を教えてくれる。感性に支えられた信頼関係である。しかしコロナ禍で、もう一年半近く息子とは温泉に行っていない。

コロナ禍を克服した人類はどこに向かうのだろうか？心と身体、人と人、人と自然の関係が競争や支配ではなく、調和と協創からなることを温泉は教えてくれる。海外からの来客はしばらく増えないかもしれない。日本人がもっと温泉を楽しめばいいのだ。平穏な日常が戻り、温泉を思う存分楽しむ日が来るのを今から楽しみにしている。

鈴木 輝隆

立正大学 研究推進・地域連携センター 地域連携チーフプロデューサー
ローカルデザイン研究所[BEENS] 代表

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

コロナによって、世界はまったく変わってしまった。世界中の人が移動を禁じられたこと、通勤や出張などをしなくても、組織は経済活動などが行われることに気づいた。

現在の文明が開発中心で、自然を破壊し続けることが世界を破滅させることにつながる。コロナ禍に対して科学技術はどこまで解決できるか、ワクチンなどの開発が、AIなどを活用して短期間にできるか、未曾有の災害に対

して、様々な実験を行う新たな挑戦の時代となった。

世界の既成概念、常識は大きく変わり、国や地域の制度、文化や宗教の違いはあっても、新たな世界共通のルールが必要である。

また、コロナの時代になって、癒しがもっと求められ、温泉の価値はあがった。

2. 日本の温泉の今後のあり方

多様で優れた温泉景観の映像のWeb情報発信は、世界に向けて日本の価値として温泉文化を伝えることができる。優れた映像情報は地域資源である。

入湯税を使用して、温泉地でのリモートワークの実験の場を創設して、日常空間としての地域振興やIT化の推進をする。

温泉地の体験型観光は全国連携を行い、温泉地を選ぶようにすることで、新しい温泉のイメージと産業が生まれる。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

生命学、植物学、生物学など分野の研究者やアーティスト、デザイナー、建築家、映像作家などから、温泉や温泉地の価値やイメージを聞いてみたい。

4. その他

様々な新しいつながりから、これまでにない新たな価値が創造される時代になったと思う。

関口 陽一

独立行政法人経済産業研究所 上席研究員

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 専門委員

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

以前のように気軽には旅行をしづらくなり、外国人旅行者も大幅に減少したことから、観光需要に依存していた温泉と温泉地のあり方を考え直すきっかけになったと考えます。Go Toトラベルをはじめとする旅行需要喚起策による旅行者増加の効果は一時的なものに過ぎません。旅行需要喚起策に過度な期待をして従来のスタイルを維持しようとするよりも、それぞれのあり方の再定義が求められているのではないのでしょうか。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉は、病気や怪我を治す療養と、心身の疲れをとり健康増進を図る保養を兼ねる湯治に有効利用されてきました。その後、観光地化が進み、現在、温泉地は主に保養の場となっていますが、人口高齢化と医療・介護費の増大が進む中、温泉を療養にも有効利用することで、健康の回復・増進、医療・介護費の支出抑制にも貢献できます。

温泉を療養への有効利用の前提としては、医師が患者に温泉療養を勧める拠り所となるエビデンスを医師に示し、医師の理解を得ることが欠かせません。医師がエビデンスを理解して初めて、温泉療養が選択肢になるため、まずは、医師、患者をはじめ国民の間で、温泉療養の効果に関するエビデンスを蓄積・共有する仕組みの強化が望まれます。

仕組みの強化に向けた財源としては、温泉浴場入湯客に課税される入湯税の税率引き上げも選択肢の一つでしょう。しかし、入湯税は市町村税なので、従来と違う用途のために全国一律で税率引き上げを求めることには困難が予想されます。入湯税を活用する場合は、対象とする市町村や施設を絞ったうえで検討を始めるのが現実的と考えます。

集めた資金を効果的に研究に配分し、研究成果を発信する組織の役割も重要になります。温泉療養者をはじめ

とする受益者からの資金を財源に、全国的な組織（フランス温泉研究協会）が研究プロジェクトに対する補助金の提供と情報発信を一元的に手掛けているフランスの事例は参考になると思います。

しかし、全ての温泉、温泉地が療養の場に相応しいわけではありません。それぞれの温泉、温泉地が歴史・自然・文化の生み出す個性に磨きをかけ、ターゲットを絞って活用するとともに、必要に応じて他の温泉、温泉地とも連携して相互補完し、価値をさらに高めることが最も重要です。

温泉の有効利用に向けて、企業には、健康経営を推進する取り組みとして温泉浴を積極的に評価し、健康診断結果を踏まえ、エビデンスに基づき温泉施設の利用を補助することなどが期待されます。厚生労働省が策定する「国民の健康の増進の総合的な推進を図るための基本的な方針」（健康日本21（第二次）：2013年度～2022年度）には、生活習慣病及びその原因となる生活習慣等の課題について「基本方針」「現状と目標」「対策」などが掲載されています。同方針改正時に温泉浴のストレス軽減・予防医療効果や活用法に言及されると、企業も温泉浴を健康経営に取り込みやすくなると思います。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

健康と温泉フォーラムは、様々な分野の専門家が、所属する組織の立場だけに囚われることなく、自由に意見交換・情報交換できる貴重なプラットフォームになっています。これからも、活動を通じて幅広い分野の専門家の方々と意見交換・情報交換できるのを楽しみにしています。

温泉利用型健康増進施設（連携型）の認定条件緩和実現に際しては、豊富温泉（北海道豊富町）を訪れる皮膚疾患患者の思いを受け止め、広範なネットワークをフル活用して重要な役割を果たしました。上記「健康日本21（第二次）」改正を見据え、温泉浴のストレス軽減・予防医療効果のさらなる発信も期待します。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

COVID-19 感染拡大当初、パチンコ店が危険視されたが、その後のクラスターの発生状況等から、開店前の行列の規制など適切に行えば、それほど危険でないことが分ってきた。私はパチンコをしたことがないので、当初パチンコは危険であるとの報道をそのままのみにしていたが、実際はパチンコ店設置の際の換気基準が厳しい上、利用者の動向をうまく制御すれば感染リスクは下げられることが報道されている。どんな業界でも、業界の外の人にはわからない状況は多く、温泉業界でも科学的な知見に基づく正確な情報発信が必要であると感じている。もちろん問題があるのであれば、それは包み隠さず公開するのが原則であると感じている。

2. 日本の温泉の今後のあり方

かつて、中央環境審議会（自然環境部会温泉小委員会）は、環境省に対し「都道府県が温泉資源保護のための条例・要綱等を定めるに当たっての参考となり、対策を円滑に進めることができるよう、新規事業者による掘削や動力装置の許可等の基準の内容や、都道府県における温泉資源保護のための望ましい仕組みについて、国は、温泉は国民共有の資源であるという観点に立って、できるだけ具体的・科学的なガイドラインを作成すべきである」と答申している（温泉資源の保護に関するガイドライン）。

平成 26 年 4 月策定）。温泉利用に関しては、「温泉は国民共有の資源であるという観点」について再考すべきではないだろうか。短期的にはコロナ禍で疲弊した温泉業界への支援が必要であろうが、長期的には温泉を観光目的だけでなく、デイクア等で利用する人たちのように、移動手段の脆弱な人も含めた多くの人にメリットが与えられ、温泉利用者から温泉業界へ資金が流れるような仕組みの構築が必要ではないだろうか。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

貴 NPO は、温泉の有効活用について広く活動されており、これからも貴 NPO の活動には期待している。環境省、厚生労働省、国土交通省等省庁横断型の活動に期待している。

4. その他

地球温暖化や環境保全に関する取り組みが課題であると考えている。地熱発電など新規の再生可能エネルギーの開発も重要であるが、既存の温泉の排水対策、排出ガス（メタン、二酸化炭素）や廃熱の削減と有効利用が重要ではないか。特に未利用のまま放置されている源泉については、有効活用を検討だけでなく積極的に廃止することも重要であると考えられる。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

我が国においては、感染がある程度下火になっても再度拡大することを繰り返している。感染拡大を抑え込めない原因は、人命よりも目先の経済を優先させる政策を時期尚早に展開していることと考えられる。この最たるモノは一連のGo Toキャンペーンの展開であろう。感染が再拡大して再び時短営業や営業自粛の要請等を繰り返し、結果的に観光や飲食業界にとどまらず多数の業種に深刻なダメージを与えていると考えられる。

感染状況を根絶に近い状態まで持っていく政策を実施した国や地域（例えばニュージーランドやオーストラリアなど）においては、国外からの感染対策を徹底し、ワクチン接種が進めば、再度の感染拡大は殆ど見られない。したがって、コロナ禍以前の経済活動がほぼ可能になっ

ているのである。我が国においても、このような感染の封じ込めに成功した国や地域を参考に、より効果的な政策を展開し、一刻も早くコロナ禍以前の人流と経済活動を取り戻してほしいと強く願う。

2. 日本の温泉の今後のあり方

日本の温泉は、古くから我々人間の心身を癒やしてきたことに疑いはない。古代から中世までの温泉利用はさておき、徳川時代に発行された温泉番付「諸国温泉効能鑑」には、全国100カ所ほどの温泉地が記載されている。これは近世において、すでに100カ所以上に及ぶ温泉地が湯治場として機能していたことを示す史料である。時代は近代から現代へと数百年流れても、温泉そのものと

温泉地が有する「心身の癒やし」という根源的な機能は変化していないと考えられる。

一方、温泉の利用形態に関しては、昭和（戦前・前後）・平成と大きく変化してきた部分がある。治療・保養・遊興・グルメそしてワーケーションなど、種々の形で温泉が利用されてきている。温泉地は時代時代の流行等を反映して発展あるいは衰退をしつつも地域の文化を育んでいる。そのような中においても温泉と温泉地の根源的な機能は失われていないと考えている。

コロナ禍である今こそ、アフターコロナ（Beyond the COVID-19）を見据えて、各地において湧出する温泉ならびに当該温泉地の地域的特性を再認識し、地域文化を踏まえて今後進むべき方向性を再検討していくことが必用なのではないかと考える。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

健康と温泉フォーラムは、月例研究会を実施している。100回を迎えようとしているように、継続して実施していることに大きな意義があると考ええる。

現在のところ、コロナ禍の影響で中止やオンラインでの実施となっているが、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置等が解除されたあかつきには、是非ともリアルな研究会の開催を望んでいる。

月例研究会のテーマ等に関しては、毎回出席者にアンケートを実施して、取り上げてほしいテーマ等を記入してもらうなど、幅広く意見や要望を聞いてみてはどうかと思う。

4. その他

私の研究テーマの1つである「温泉の権利」に関する課題を挙げておくことにする。

温泉に関する権利は、それぞれの温泉地において重要なファクターである。なぜなら、温泉に関する権利を有しない限り、その温泉地で温泉を利用することができないからである。

川島武宜先生とその門下の先生方の研究により、温泉権は土地の所有権とは別個の独立した物件であるとされてきたが、近年この理論に反した理論を展開する弁護士等が出てきている。

景気の悪化やコロナ禍等によって、温泉地において経営が難しくなり、廃業したり経営権が他者に移る旅館が出てきている。このようなケースにおいて、温泉権はどのようなものか把握しておくことが重要である。

慣習による温泉権が存在すると考えられる温泉地においては、自分達の有する権利を守るために、現在の権利関係がどのようなになっているのか再確認する必要があると考える。

松坂 健

オフィス アト・ランダム 代表

元・株式会社柴田書店『月刊ホテル旅館』編集長、長崎国際大学 教授、西武文理大学 教授、跡見学園女子大学 教授

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

アフターコロナのゲームは新しいルール、新しい盤面で展開していこう！

本当は「ほら吹きが目一杯吹聴するアフターコロナのリゾート像」ってなタイトルで勝手なことを言い連ねようと思っていたのだが、こっちは真面目に考えているのに、ふざけたものと勘違いされるのも、困ったものなので、おとなしく原稿をまとめてみることにする。

といっても、安易な予測はしないつもりだ。このウィルスに限った話ではないと思うが、今回の疫病はどんどん新株と言われる変種が生まれて、そのたびに感染力が強まったとか、重症化率が増えたということになっているので、どんな予想を立てても、外れることになるし、まして微視的、戦術的な対処策を訴えても、すぐに廃案にしなければならないような変化の激しさなのだから、今、経営者に求められるのは、何が起きても手が打てる敏捷性と努力の方向性の確認ではないだろうか。その意味で、ここではコロナが収束したのち何が起きるかを予想するのではなく、このように予め考えておけば、

慌てずに済むという経営者の「覚悟」のことを記したいと思う。

① まず、第一に世のなか全般の景気動向だ。

僕は経済学者ではないから精密な分析などできっこないが、そんな素人でも、アフターコロナの景気がどう考えてもVの字回復に向かうとは考えられない。

とにかく、2020～2021年度の決算が終わりつつある状況だが、赤字決算が主流だろう。テイクアウト、デリバリーに活路を見出した一部の外食産業くらいが黒字で、あとは死屍累々だろう。当然、アフターコロナは人員的な整理が不可欠になる。

つまりは派遣切りに始まって、雇い止め、勧奨退職など雇用がどんどん減っていく。失業率が高まり、社会不安を起こすだろう。

ここでのポイントは誰もがこの雇用の不安定が社会的な格差を生んで、しかもこの状況が1年や2年で収まらず、3～4年かかってしまうと分かってしまっていることだ。

この1年は「緊急事態」だからと我慢をかさねてきたのだが、それも限界というのは、緊急事態宣言後にむしろ人流が増えているところも少なくはないことでもお分かりだろう。

要するに。これから長く見繕ってもこの先5年から10年、少なくともその最初の3年間、2024年末まで、僕たちは不安の時代を生き延びなければならない。こういう不安の中で、家計が基本、防衛的になって、消費から遠ざかっていくのは自然の流れでないか。

景気はこれから先10年は低迷と覚悟しておくのがいい。

② だとしても、だ。

一定程度ワクチン接種が国民の6〜7割に達すれば、自然免疫が生まれて、普通の日常に戻れるとする楽観論もある。

だから、いったん緊急事態宣言が解除されれば、突発的なお祭り騒ぎ需要が発生することも確実だろう。その例は欧米のコロナ克服を謳いあげる、いささか時期尚早な大騒ぎぶりを見てもある、あるだろう。

第一、政府が言う通り、オリンピック開催までに全世代に普及なんて言うのは、今の処理スピードからしてもあり得ない試算がすでに各方面から寄せられている。

また仮に、ワクチン普及が理想的に展開しても、それで第4波、5波が起きないと保証されるわけでもない。相手は変幻自在のウイルスだからだ。

だから、アフターコロナで我慢疲れからの解放から生まれるいつ時の客数増を回復基調の兆しと捉えるのだけはやめた方がいい。あとの暗闇が深くなるだけの話だからだ。

③ それから見逃していけないのは、食料危機がまたまた本格的な段階にはいるのではないかと懸念だ。

このコロナ騒ぎでアフリカや南米などでは農業従事者の数が激減して、穀物の作り手がいなくなっているというし、もっとも安定的かつ安価なコストで栽培できるトウモロコシを、食料としてではなく、石油を代替するエネルギーに回してしまっていることもある。

いずれにしても、スーパーマーケットなどお台所ベースでも食べ物の値段が上昇しつつある実感を庶民レベルでも持ってきている状況だ。

外食産業やホテル旅館のような飲食付きのビジネスの材料費コストプッシュの圧力は今後強まる一方だろう。

解決策としては値上げなのだが、この冷え切った景況感のなかで、値上げでどれだけの客数が奪われてしまうか、考えるとぞっとするほどだ。

不況中の値上げ。しかも、その値上げ分はコストを吸収するに留まり、人件費の方まで回らない。ホスピタリティで付加価値を作ろうとしても、なかなかその体制が作りにくいという現状がある。

ここは思い切って素材をガラッと変えた新商品を打ち出すなり、時には焼き鳥店を定食屋に変えたりする業種、業態転換まで視野に入れて、材料=加工のサプライチェーン再構築を図る必要も生じるだろう。

④ かなり具体的な話になるが、このコロナの1年半で蒸発したインバウンド需要。

これはコロナがワクチンなどで一段落したあと、急速に復活すると思う。

コロナ陥落我慢比べの終わりを祝いたい気持ちは、隣国中国も韓国も同じだろう。

今は息を潜めているネットエージェント、インバウンドコンサルタントも復活し、盛況を生むことだろう。それが一過性のものなのか、それとも底堅いベーシックな需要になるのか、そこに僕の興味はない。

僕がかねてよりインバウンド誘客に頼る経営は危険で、予約数に限りをつけて、せいぜい全客数の4割から5割程度に抑えておかないと、万が一の場合、えらいことになる、と主張してきた。十数年前の尖閣問題で緊張したときは幸いにも半年くらいで日中間の問題が捌けて、それがむしろその後の中国からの爆発的な誘客につながったのだが、コロナはそうは行かなかった。

いずれにしても、僕たち日本人経営者の手だてを発揮することができない、他国の外交政策に、客数の7割、8割を割り振ることに、どうして危険を感じないだろうか。インバウンド需要は結局、水物で外交関係次第でどうにでも転がってしまうものなのだ。それはリーマンショックの時、尖閣の時、一時は千客万来、でもグローバルな国際政治力学次第で、明日、需要が蒸発することを経験しているはずなのに、と思う。

アフターコロナで一名でも多くの客数を確保したいと、セールスの効くインバウンドに頼れば、その分のツケはこれまでよりもさらに重いものになるだろう。

インバウンドの回復を単純に喜んではいけないと自戒すべきだろう。

⑤ ワークেশョン。

この言葉も僕は馴染めない。

仕事をしながら遊びもする。そのスタイルについて、僕は僕なりの「ラテタウン」という概念を利用して様々なところで語ってきた。それはワークとレジャーを分離、対立概念と捉えるのではなく、ワークとレジャーがスイッチのオンオフで随時、簡単に切り換えられるライフスタイルを指すものだ。

これまでのビジネスは都会が背景で、それを反省して、たまには1週間、2週間くらい、リゾートで仕事をするのも悪くないんじゃない、という発想が底に見えてくるような気がする。それは旅行会社の企画商品レベルの話だろう。僕の提案は最低でも半年くらいの単位で、リゾートに移住し、そこに新しいビジネスコミュニティを創造しようというものだ。だから、誘致は個人ベースではな

く、企業とか大学とかの組織まるごとのお引越しがいいと思っている。

大ほら吹きの出縁だが、ぼくは日本の未来のためには、リゾートがこれまでとは全く趣の異なるビジネスとレジャー活動が融合した環境となり、たとえば東京23区のようなダウンタウンは、時に農場にしてみてもいいし（港湾が近いので物流拠点にもなる）、また一方で映画演劇、テーマパーク、伝統芸能、美術館、博物館などが集積したハイパー文化エリア（それを趣味性を生かすという意味で“趣都”と呼びたい）にするというのが、僕の考え方だ。

つまりビジネスはリゾートの気分のいい場所で、好きな時間、好きな人と組んでやればいい。そして東京都や大阪などの都会セクターには、文化的な刺激を求めて、

それこそ「非日常」を実現させてリフレッシュする場所と考えればいいのではないかな。

このままワーケーションを旅行商品の新バリエーションとするなら、早晚、このキーワードも廃れてしまうのではないだろうか。

アフターコロナで一番に経営者が考えるべきは、新しいゲームは新しい盤面で新しいルールを作って始めようという粘り強い構想力と今の事態に耐え抜くレジリエンス（堅忍不拔）ではないだろうか。

勝手なことばかり並べて、面喰らった読者も多いかと思うが、やはり「心構え」だけは常に練磨しておかないといけなさと、ホテル旅館、観光の世界の方々にはエールを送りたい。

桃井 謙祐

信州大学 社会基盤研究所 特任教授

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

様々な意味で日本という国の課題を浮き彫りにした災禍であるように思われる。

いずれにせよ、コロナ禍により、人の移動、特に国境を越える移動は大きく減少し、一方でオンライン会議やリモートワークが普及する等、社会は大きく変化した。その影響は業種や職種によっても大きく異なっている。今後、コロナ禍の収束に伴い次第に元に戻る面もあるにせよ、この変化の一部は今後も続くであろうし、この不可逆的な変化に対応できる者とそうでない者の差は拡大していきかねない面がある。また、この経済危機後の財政運営のあり方についても、将来世代のために大きな課題となると考える。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉の今後のあり方を一律に論ずるのは難しく、また温泉に限らない課題もあるが、今後、日本は消費者も労働者も減少し、また若者の旅行離れもみられる中で、日本の温泉地、あるいは温泉利用施設等が持続的に発展していくためには、顧客とともに老いず、また日本人に限らず顧客を惹きつけられるよう、施設や設備などへの投資をきちんと行いつつ、必要な働き手を確保・育成していくことが必要であろう。そして、それに必要なだけの稼ぎを上げていく経営を行うとともに、経営の合理化・省力化やデジタル化なども進めていく必要があると思われる。

他方で、外部環境や顧客との関係においては、テクノロジーが今後飛躍的に進歩し、また来訪者の年齢構成や国籍等も変化する中で、それぞれの温泉地や温泉利用施設等は、いかなる利用者にいかなる満足を与えるかをより深く考え、訴求していく必要があるのではないだろうか。

例えば健康増進という意味でも、温泉以外にも多種多様な取り組み方があり、今後はさらに、人々はウェアラブルなモバイルツールにより推奨される個々人に合った健康管理に取り組む時代が来るかもしれない。そうした時代が到来したとき、温泉は人々にとってどの程度重要な位置付けにあり続けるためにはどのような取り組みが必要だろうか。

ともあれ、温泉は、それを利用する人々にとって、肉体的健康を得る手段にとどまらず、精神的充足も得る場であることが重要なように思われ、また温泉地で過ごすことが、単に温泉に入浴するのみならず、その場所ならではの、人の五感を満足させる体験であることがより一層重要となるのではないだろうか。そうした意味では、より長く、何度も滞在を楽しめるような魅力やリラックスした空間づくり・まちづくり、滞在場所や食事に関する多様な選択肢の存在なども重要と考えられる。さらに、オンライン化やリモートワーク等が普及し、人々のモビリティも増す中で、温泉地で過ごすライフスタイルについて訴求していくことや、温泉地での滞在を通じて人々の交流を生み出していくことも重要なように思われる。そうした取り組みをすることで、土日祝日に限らず温泉地で滞在する人が増え、滞在期間も長期化し、人々が集う中で交流が生まれ、そこで暮らす人も増え、温泉地の持続的な発展が可能となるのではないだろうか。

4. その他

2.の繰り返しのようになるが、日本の将来は、人口構成は確実に高齢化し、人口は減少する。一方で、健康や旅行・娯楽をめぐるテクノロジーは急速に進展し、10～20年後には、人々は自らの健康管理の方法や休息時・余暇時の過ごし方、移動手段等について、今とは異なる多様な選択肢・可能性を有するだろう。他方で、日本を訪

れる外国人は増える可能性がある一方、日本人の中でも所得や余暇時間の格差は拡大し、温泉地を訪れる日本人は減少する可能性もある。

そうした中、温泉地や温泉利用施設等が存続し続けるためには、将来、各々どのような顧客に利用してもらうのか、顧客像を具体的に想像しながら、その顧客にとって、その場所ならではの、唯一無二の存在になるための投資・取り組みを続けられるような事業のあり方を追求していくことが重要と思われる。

遠隔地からでも訪れたいくなるような温泉地を目指すなら、平凡でない独自性ある卓越した体験を提供する必要があるだろうし、幅広い顧客層に利用してもらう温泉地を目指すなら、そこに暮らしたくなる・通いたくなるような温泉地を目指すことがよいようにも思われる。いずれにしても、温泉に限らず、利用者にとっていかに居心地のよい場所や体験を提供していくかという視点・取り組みが重要なのではないだろうか。

森田 浩司

大阪国際大学 国際教養学部 国際観光学科 准教授

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

コロナウイルス禍は、今となってはもう誰にもどうしようもなく、やむを得ない状況になってしまっている。こうした環境下で、リスク分散（リスクヘッジ）の重要性、過度なインバウンド依存のリスク、温泉観光客や遠方からの湯治客はもちろん地元や近場客にも愛される温泉（地）であることの重要性、温泉地滞在や温泉入浴による免疫力強化をはじめとした健康の維持・増進の重要性や有用性、こうしたことを改めて考えさせられた。

2. 日本の温泉の今後のあり方

1つは1.の設問で挙げたリスク分散や、遠方客だけでなく地元・近場の客双方に求められる温泉（地）を指向するあり方が、今後はより求められるものと考ええる。

もう1つは、今回のコロナにより、改めて世間において、身体はもちろん、心の癒しも含めたホリスティックな健康（観）の重要性がクローズアップされることとなった。こうした状況下において、日本の温泉（地）は、従来型の周遊観光や慰安旅行の宿泊拠点としてだけではなく、温泉の本質的な健康特性を活かし、それぞれの温泉（地）の有する特性・資源にあわせて、日常のウェルネスライフの延長（発展）の場としての温泉（地）、および温泉客が温泉（地）で気づいた（提供された、体験した）ウェルネスを日常生活にも取り込み継続したウェルネスライフに繋げ発展させていく、そうした場としての、温泉（地）のあり方が、今後は必要となってくるものと考ええる。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

ヘルスツーリズム（ウェルネスツーリズム、メディカルツーリズム）を展開している温泉地、宿泊施設、関連施設の取り組み事例を、今後より一層、発表・紹介されることを期待している（特にコロナ禍の現状では自ら赴くことが諸般の事情でなかなか難しいため、オンラインや資料提示による形でも大変ありがたい）。

4. その他

2.の設問で挙げたとおり、今回のコロナにより、改めて世間において、身体はもちろん、心の癒しも含めたホリスティックな健康（観）の重要性がクローズアップされることとなり、改めて温泉（地）の健康特性が注目され、そうした場としてのあり方のニーズも、これよりも高まってくる可能性がある。

そうした状況下で、これまでヘルスツーリズムに取り組んでいる温泉（地）・施設がより取り組みを進めるだけでなく、新たにヘルスツーリズムの取り組みを行う温泉（地）・施設も増えてくることも考えられる（個人的には増えてくることを望んでいる）。

ただ、こうした取り組みを行う温泉（地）・施設が、単に海外のヘルスツーリズム事例やあり方を直輸入するだけではなく、日本人の温泉地訪問や滞在、温泉入浴、観光に対する志向性や行動特性、日本の温泉観光の経緯や取り巻く背景、日本の温泉（地）の特性、等々を踏まえた日本の実状に見合ったヘルスツーリズムを展開・追求していくこと、あるいは日本の実状を踏まえた独自の温泉ツーリズムの確立・展開・追求が、観光（学）の観点から見た日本の温泉の将来への課題であると考えられる。そして個人的にはこれらの研究を進めていきたいと考える。

温泉の基本的な役割

その土地に行かないと出会えないその瞬間に身を置くことこそが真の養生であり、温泉ツーリズムの原点である(石井氏)。新型コロナウイルス禍で人々がストレスの多い生活を送るなか、日本人が湯治場に求めていた心と体の安息を求める欲求はより強くなるだろう(野添氏)。

心身をリラックスさせ、生命力や免疫力をアップさせることで元気を回復する側面(谷口氏)を活かして健康、療養としての温泉にシフト(リターン)し(岡田氏)、ポストコロナの新たな日常における癒しと健康維持の場(大國氏)、疲労回復・ストレス解消・リラックスの受け皿としてますます重要になる(伊豆氏)。

在宅勤務、リモート会議など働き方の変化を受け、温泉地はワーケーションの場としても期待される(伊豆氏、川崎氏)。

インバウンド対応

多くの外国人観光客が訪れていた2019年当時も、外国人観光客は日本人の普段のライフスタイルにこそ関心があって「用意された訪日客用の日本」には食傷気味になっていると言われ始めていた(江渕氏)。

自分たちのローカルへの小さき「誇り」や独自の「まつりごと」の魅力の方が広く世界に通用する時代が音を立てて進んでいく(野中氏)なか、海外が望むままの「日本」を切り売りするインバウンドビジネスはやめて、日本人が、地域が、大切にしてきたものを自信をもって世界に発信すべきである(江渕氏)。

入浴文化の発信

日本の温泉は、単なる資源ではなく、生活に根付いた文化であり、日本人の入浴習慣を文化として正しく発信していくことは重要(岡田氏)である。外国人観光客に全身浴による心身一体の癒しの効果を知らしめるには、物理的な、あるいは目に見える仕掛けが必要となるが、経験値を積むことで、全身浴の効果を体得させようだろう(竹村氏)。

また、バリアフリー化や湯浴み着の普及と理解、マイノリティの方々への配慮など“誰一人取り残さない”SDGsに向けた施策も進めるべきである(北出氏)。

人材育成

温泉地滞在の魅力は、温泉や自然、食事はもちろん、人も重要な要素である。そこで、温泉地の魅力をつくり、温泉文化を伝える人を育成する温泉教育が大切になる(江渕氏)。温泉本来の素材・神話性・味わい等の温泉の魅

力を体験できるよう、食の世界における蔵元・素材製造者・調理人・職人・グルメ等のような役割を担う温泉の管理技術者の育成が急務である(丸岡氏)。

温泉に関する学術的な教育機関がなく人材育成がなされていない(北出氏)なか、幼稚園への出前講座や入浴体験(川崎氏)、健康と温泉フォーラムの月例研究会への学生・若者の参加(伊豆氏、丸岡氏)など、温泉文化を伝え、将来の担い手を育成することも欠かせない。

エビデンスの収集・データベース化

温泉の療養目的での活用に向けて、温泉療養に医療保険が適用される欧州の制度を参考にすべきという意見がある。日本では、温泉療養に医療保険は適用されないものの、長年、温泉を療養に活用してきた湯治の歴史がある。

温泉利用の単純な欧風化は避けるべき(竹村氏)だが、「湯治システム」の効果をわかりやすく示すには、温泉や入浴に関する科学的エビデンスをもっと集め、世の中に知らしめる(坂内氏)ことも求められる。そこで、目的税である入湯税を利用者の免疫力・抵抗力の向上のエビデンス作りのための研究費として使い(木地本氏、重氏)、エビデンスのデータベースを完成させる(川崎氏)ことが望まれる。

科学的根拠によって生まれてくる効果を組み合わせることで、単なる温浴効果だけでなく、外用薬や内服薬、そして化粧品類と発展させることもできるだろう(水島氏)。

地熱発電の導入

地熱発電に関しては、景観や温泉源への影響なども懸念されるが、SDGsが叫ばれるなか、石炭・石油に頼らない脱炭素社会に向けて、地熱発電導入への積極的な対応(重氏、水島氏)も検討する必要があるだろう。

観光地としての温泉地の将来

人口減少により少なくなる観光客の取り扱いの中で温泉地が生き残るには、総花的な誘客体制ではなく、各温泉地のそれぞれが個性づくり、特色づくりを徹底し、特定のターゲットに絞った誘客をすべきである(米原氏)。原点に立ち返り、それぞれの温泉の個性や歴史、文化を研究し、学び、これからの時代の旅にどのように寄り添い進化させていくかが人の心を惹きつける静かでも大きな力になる(石井氏)。それぞれがバラバラに対応するのではなく、DMO組織やNPO組織等を活用して共通のルールを策定し、実行することも求められる(大國氏)。

答えは、その町、その村、そのお宿、そこにしか産み出せないものに宿っている（野中氏）。温泉宿・温泉文化が、変えないものと変えるべきものを取捨選択し、時

代にあった魅力あるものになっていくこと（野添氏）、宿の経営だけでなく、温泉のある地域を総合的に元気に美しくしていくような経営（谷口氏）が期待される。

石井 宏子

株式会社温泉ビューティ研究所 代表取締役

温泉ビューティ研究家・トラベルジャーナリスト

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 専門委員

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

現代社会においても未知のウイルスがこのように急速に世界中に広がってしまうのだと驚きました。これは、人間ひとりひとりが、自分自身の生き抜く力を蓄えておかねば戦えない状況です。温泉に入ること、体の深くまで温まり、心身を整えることが大切だと思います。それには、温泉の果たす役割が大変大きいと感じています。

2. 日本の温泉の今後のあり方

想像をはるかに超えて、世界中に広がるコロナの危機がこんなに長引くとは……。一方で、ゆっくりと、しっかりと考える時間をもらった機会でもあったように思います。

ひとつは、原点回帰。日本の温泉とは？さらには、それぞれの温泉が持つ個性とは？強みとは？また、それぞれの宿がどうあるべきか？じっくり向き合い、考えている人が増えています。そして、そういう温泉地、そういう宿に、人は心惹かれて集まってきています。

たとえば、草津温泉は、硫黄を含む強い酸性の温泉であることを個性とし、温泉が、コロナを含むウイルスの不活性化に役立つという実験を行い、研究が発表されるとすぐに、湯畑に温泉の「手あらい湯」を作りました。また、有馬温泉は、世界的にも大変珍しい「有馬型」の温泉の成り立ちを地球科学の観点で研究して紐解きました。江戸時代から続く温泉芸姑の歴史や文化を研究し、芸姑のカフェやZoom芸姑など、温泉地だからこそ、一般人も気軽に芸姑文化を楽しめることを発信しています。由布院温泉は、コロナ禍に加えて、台風の水害により鉄道路線が分断されるなど苦しい時期もありました（現在は復活）が、宣伝ではなく地域本来の魅力を表現しようと、由布院の原点である「静けさ」「自然の中でゆっくり過ごすこと」を打ち出した「おとなしやかな由布院」を発信しています。

これらはほんの一例ですが、温泉地がそれぞれの原点を見つめて、個性が際立れば、日本の温泉の旅はもっと

もっと楽しくなっていくことでしょう。日本の温泉の今後のあり方を思うとき、松尾芭蕉の言葉「不易流行」を思いだします。原点に立ち返り、それぞれの温泉の個性や歴史、文化を研究し、学び、それを、これからの時代の旅にどのように寄り添い進化させていくのか。それこそが人の心を惹きつける静かでも大きな力になることだと思います。

自分の心身を整えて、生きる力を守るために温泉に入るとは、健康維持に必要な外出であるという認識が広まっていくことを願っています。レジャーで観光地へ遊びに行くこと（これも人生の喜びとして必要です）と、心身のメンテナンスのために、静かに温泉に入っているびり過ごすことは別のことであり、どちらもわたしたちが幸せに生きていくために必要不可欠のことだと、あらためて強く思います。このような時代であっても、安全に留意して、生活空間を同じくする単位（ひとり旅や同居家族での移動）で宿泊し、静かに「黙浴」をして、心身を整える時間をつくることは、生命を維持するために大切なことだと感じます。

四季のある日本で、季節ごとに変化する自然や食材に出会えることも、温泉へ旅に出かける重要な要素です。

「身土不二」その土地にいかないと出会えないその瞬間に身を置くこと。それこそが真の養生であり、温泉ツーリズムの原点だと信じています。これは、お取り寄せやオンラインでは得られない旅のだいご味です。温泉へ出かけられる日に向けて、自分も微力ながら、そのような視点で温泉旅を考えるためのお手伝いをしたいと考えています。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

オンラインとリアルを繋いでいくことにより、参加者のみならず、企画や登壇者もオンラインならではの試みができるかと期待しております。全国の温泉地の方々と繋いでお話をきくことや、将来的には海外とつなぐこともオンラインなら可能になりますので、国際的なフォーラムや研究会も行える可能性が広がると思います。

伊豆 芳人

株式会社トラベルジップ 顧問

ボーダーツーリズム推進協議会 会長

元・ANAセールス株式会社 常務取締役

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

旅行需要、特に大衆観光はイベントリスクに非常に脆弱です。私は約40年、航空会社系の旅行会社で仕事をしておりましたが21世紀だけでも世界規模のイベントリスク（9.11米国同時多発テロ・SARS・イラク戦争・リーマンショック・東日本大震災など）を経験しました。そのたびに観光産業は大きな需要減少となりました。しかし今回の新型コロナウイルス禍は影響範囲の広さ（世界中）、影響期間の長さ（すでに1年以上）は破格で、旅行需要減少のインパクトも甚大です。さらには在宅勤務・リモート会議・ワーケーションなど人々の生活様式や価値観にも大きな変化をもたらし、それらが常態化しつつあります。人の移動を前提としたビジネスモデルは再構築を求められています。これこそが新型コロナウイルス禍が100年に一度のイベントリスクと称される理由ではないでしょうか。

2. 日本の温泉の今後のあり方

大地震の予知が難しいのと同様に新型コロナウイルスの感染拡大の予知、予防、治療は難しく、時間がかかり、現代の自然科学の限界を改めて示しました。一方、温泉には予防医療・免疫力向上の効果がますます期待され、同時に温泉地には新しいライフスタイルでもあるワーケーションの候補地として期待も大きくなると思います。「温泉地ワーケーション」の整備が急がれます。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

毎回参加はできませんが、月例研究会のテーマ・講師は興味深いと思います。コロナ禍で参加できない方への

リモート参加やホームページで毎回の内容を配信するなどの工夫も必要な時期ではないでしょうか？またボーダーツーリズムやエコツーリズムなどの組織と連携（共同セミナーなど）も必要ではないでしょうか？若い方、学生などの参加が増えると良いとも思います（リモートなら若い方は参加しやすい）。

4. その他

コロナ禍後も在宅勤務、リモート会議は常態化します。人には肉体的・精神的な疲労・ストレスがますます蓄積します。人は様々な方法で疲労回復・ストレス解消を求め、同時に自分への“ご褒美”的なリラックスタイムへの欲求も大きくなると思います。

温泉は疲労回復・ストレス解消・リラックスの“受け皿”としてますます重要になってくると思いますし、それには泉質・効能だけでなく「新・湯治」が目指す温泉地の魅力が重要な要素です。そして「新・湯治」を実社会で推進する、実社会との連携が求められます。

また定住人口（移住者）が増えず、観光客を想定した交流人口も不安定なことがコロナ禍で実証されました。温泉地の疲弊は極まっています。やはり温泉地政策も関係人口を増やすような新しい取り組みも必要ではないでしょうか。例として①ワーケーション誘致 ②リモートと組み合わせたハイブリッド型温泉体験などです。

温泉・湯治文化は日本の宝ですが温泉地は課題山積です。健康と温泉フォーラム様の一層の発展を祈念いたします。

江渕 敦

インフォーママーケティングジャパン株式会社 Diet & Beauty編集長・事業部長

Jウエルネス協会準備委員会 代表世話人

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 専門委員

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

コロナ前2019年までのビジネステーマは「インバウンド」や「長寿社会」でした。しかし2020年世界はコロナ禍で塗り替えられ、暮らしは一変しました。コロナ禍は、生産性と効率を追い求め「より高く、より大きく、より速く」を競ったグローバル化の代償に思えてなりません。「このままでいい筈がない」といった予感が現実のものとなりました。その中から見えてきた我々が目指

す次の社会は、ずっと「こうなるだろう」「こうあるべき」と掲げていた理想の姿だったのではないのでしょうか。

「一極集中から分散型社会へ」「量から質」「SDGs」「ナチュラル」「多様性」「DX」「超スマート社会」「働き方改革」「人生100年時代」等々。これらの流れは一気に進むように思います。

東京オリンピック・パラリンピック2020年の開催が決定し、訪日外国人観光客数は2013年から1,000万人、

2,000万人、3,000万人と急拡大を続けました。いよいよ次は4,000万人超えと期待した昨年2020年は411万人でした。コロナ前に問題になっていたオーバーツーリズムや張りぼてのインバウンドビジネス（爆買い対応）は一瞬で消え去りました。実は2019年当時、訪日客は日本人の普段のライフスタイルにこそ関心があって、むしろ「用意された訪日客用の日本」には食傷気味になっているのだと言われ始めていました。日本の都市やゴールデンルートでなく、誰もが訪れない地域に関心が向いていたのもそうした理由からでしょう。

コロナ後インバウンドがゼロになって、やはり国内市場の大切さ、顧客との丁寧な関係づくりの大切さをつくづく考えます。これからは、日本の「豊かさ」とは何か。日本に興味を持って、「本物」を知って消費することが大切なのだと。

もう海外が望むままの「日本」を切り売りするインバウンドビジネスは止めて、日本人が、地域が、大切にしてきたものを自信をもって世界に発信するべきです。グローバル化は、きっと看板を英文にしたり中文にすることではなく、アイデンティティをもって自信をもって主張することなのですから。

2. 日本の温泉の今後のあり方

「人」がカギだと思っています。温泉地滞在の魅力的な要素は「人」、温泉文化を伝えるのも「人」でしょう。そのために、温泉文化の保護と温泉教育が大切だと思っています。

温泉自体の健康効果のエビデンスはもちろん重要です、しかし温泉地は、地域の文化や温泉文化と地域の人の魅力を伝えることを第一に考えるのがよいと思います。温泉の訴求も、エビデンス重視でなく、温泉地としての背景や自然や人の魅力を伝えていくべきだと思います。温泉地の魅力は、まさしく土地であり人。昔は人気を土地柄で語られました。滞在中にその温泉地で出会う人との交流がその土地や旅のイメージを作り上げます。誰に出会えて、何に出会ってどんな時間を過ごしたかという温泉地でのドラマです。わたしも20年も前の温泉地で出会っ

た人や、出来事は今も貴重な思い出となっています。TVのケンミンSHOWで見る県民は何処も魅力的です。地域が個性を持つことは、地域の人やりのやりがいや、自信に繋がって、幸せにもつながっていくように思うのです。温泉地の人づくりにもっと注目していきましょう。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

健康と温泉フォーラムの役割は、あくまでも温泉地の視点で、健康と温泉との関係を真摯に考え続け、整理して伝えていくことだと思います。そして、温泉科学、医学、温泉文化、歴史等の温泉に関わる知見や制度の課題の集積の場です。温泉に関わる人の最も根幹のところをブレずにしておく機能を持っていることだと思います。

フォーラム参加者は普段は各自のフィールドで多彩な活動や事業をしています。しかし、フォーラムに戻ってくれば、根本を大事なことを再確認できてきちんと修正できるという場なのだと思います。これからもそうあるべきだと考えます。

4. その他

温泉は「何か」や「人」を繋ぐ力を思っている日本の宝です。人が集まり出会い、そして、「温泉で何かする」という体験を数多く仕掛けていくことが必要なのだと思います。私はいま日本の様々な魅力を凝縮し国内外に発信しようと考えています。日本の魅力？それは伝統文化であり、ものづくりであり、その中から生み出されるおもてなしのウェルネスサービスです。その根源のところに温泉があり温泉地があるのだと思います。

しかしながら、日本の若者たちの暮らしに温泉が入り込んでいるとは言えません。温泉の持つ力をもっと伝えていきましょう。温泉教育をもっとやっていきましょう。以前に幼稚園児を対象に体験イベントをやった事例がありましたが、幼い時期からの温泉体験をもっともっと進めていきましょう。カップルで行く温泉、妊娠婦と温泉、幼児の温泉体験、幼い子供と行く温泉等々。暮らしの中に温泉があることが日本人だと言えるように。

大國 道夫

大國道夫・都市・建築総合研究所株式会社 代表取締役

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

・「分断」と「癒し」

新型コロナ感染防止のため国境、都市、地域、施設を閉鎖し人々の交流を分断することは人々の孤立や不平等など新たな社会問題を引き起こしている。ポストコロナの社会においても新たな日常として継続されていくことが予想される。そのような閉鎖や分断は人の心に警戒心

を呼び起こし、常に緊張を強いることになる。会議はITによって代替され、レストラン、美術館、アリーナなどでの催しも制限される。しかし人々は直接的な交流の機会を求め、また癒しを求めている

世界の感染防止の動向を見ると現段階では中国、ベトナム、台湾、韓国などでは抑えこみに成功し、アメリカやヨーロッパ諸国では感染拡大が続いている。これらの動向は国家としての強力な統制、監視体制が民主主義国

家の自由かの選択の問題ともなっている。個人の自由を認めれば感染拡大が続き、個人の自由を制限すれば感染が防止できるという構図にも見える。しかし民主主義を犠牲にすることはできないとすれば個人の自由を守りながら感染を防止する手立てを講じなければならない。そのためには個人個人が守るべき共通のルールを科学的知見によって定め、それを自主的に実行して行くほかない。自主的に実行ができるかどうかはその国や地域によって育まれてきた固有の文化や日常生活の習慣とその基準となっている生活の「型」が基本となってくる。日本の生活習慣である靴を脱いだ生活や日常的な手洗い、人との付き合いの方法などである。また体を清潔にするための入浴の習慣もこれらの要素の一つである。入浴の習慣は同時に人々の緊張を和らげる癒しや健康維持の方法としても有効であり、さらに通常時の温泉旅行などによる気分転換も生活の中での清潔な健康維持のための基本的な「型」の発展形といえる。

2. 日本の温泉の今後のあり方

・「顔」の見える温泉地

ポストコロナの新たな日常における癒しと健康維持の場として温泉地を位置づけることができる。感染防止のためには温泉地と顧客の双方が合意できる共通のルールとそれに沿った自主的な行動を行うことが必要となる。大勢の団体客が一時に押しよせて大宴会を行うことは経営上の利益にはなるかもしれないが感染を拡大させる可能性がある。大浴場や共同浴場、大食堂での混雑現象も同じである。散策時の食べ歩きやポイ捨てなどマナー違反による環境悪化も感染拡大の要因となる。これらを野放しにしないで共通のルールを設け実行するためには不特定多数の顧客だけではなく、できるだけ特定多数の顧客を多くしていくことが重要である。そのためには事前予約制はもちろんとして長期宿泊、リピーターの増加、参加型顧客、会員制の顧客などの開発が重要となろう。参加型の顧客としては温泉地のファンクラブ、投資家型参加者、まちおこしNPOへの参加、温泉専門家、リモートワークなどの新たなニーズなどが考えられる。温泉地側もそれぞれの宿泊施設や交通事業者がバラバラに対応するのではなく、DMO組織やNPO組織等を活用して共通のルールを策定し実行していくことが求められる。そうすることによって温泉地と顧客の双方にとって顔の見える安全な温泉地形成が可能となる。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

・「ウエルネス社会」実現のための「エンジン」

健康と温泉フォーラムは温泉医療の研究と温泉に関する広範囲な分野との連携の実績がある。全国各地の温泉地の実情調査や情報提供とユーザーの声を反映した活動を続けてきておりそれらを三朝町で実施された温泉を活

用した健康づくり広域連携会議をはじめとして温泉行政へ反映させてきている。政策推進活動として温泉利用型健康増進施設認定要件の緩和実現への動きや環境省の新・湯治活動への協力などがあげられる。今後はこれら調査情報収集、情報発信、政策提言を推し進めて幅広い分野と共同して温泉地活用を社会全体へ広め、ウエルネス社会実現へ向けてのプラットフォームづくりのエンジンとしての役割が期待される。そこでは温泉医療、観光、まちづくり、経済、制度政策などの幅広い専門家が出入りし、具体的なプロジェクトに対応しウエルネス社会実現を目指す。温泉関係者だけではなく広く全国紙やSNSを活用した情報発信、全国各地のまちづくりとの連携においてノウハウの提供、基準作りと制度化などによりウエルネス社会実現へ向けたエンジンとしての役割を果たすことができるのではないかな。

4. その他

・温泉文化の「型」の世界への発信

大正14年8月出版の田山花袋の「温泉めぐり」は中表紙に山と川、森につつまれた東山温泉が描かれ、日本各地の温泉地をめぐりながらその比較、優劣などを書き綴っている。

温泉を巡る旅は当時の交通手段が限られているなかで海辺や山間の道を進み近隣のまちや村を見ながらやっとの思いで目的の温泉地へたどり着くといった具合である。村々と自然の間にひっそりと抱かれた温泉地の姿は交通網が発達した今日の温泉地の本質的な姿にも共通しているともいえるのではないだろうか。さらに自然と温泉との関係については哲学者の内山節が天山湯治郷・鈴木義二発行の瓦版に「地底から湧いてくるお湯の力を借りて自然と人間の力強いつながりを取り戻すことのほうに多分温泉の本質はある」と寄稿している。これらの自然と温泉との関係は日本の温泉文化の基本的であり、ここから様々な温泉文化が展開されてくると考えることができる。日本の温泉地独特の入浴方法や風通しがよく自然と一体になっている日本家屋、共同湯とまちの構成などは温泉文化そのものであり、入浴作法、宿でのおもてなし、まちの配置、床の間の飾りつけなどはすべて温泉文化を構成する基本的な「型」である。自然と温泉との関係を基本とし、歴史的にはぐくまれてきたこれらの温泉文化の「型」を体系化して発信していく。さらにそれらを日本の文化遺産としての認定を得ることによって温泉地の魅力を世界へ広めていく。その結果海外からの顧客にも安心、安全で魅力ある温泉地を形成することができるのではないかな。

岡田 友悟

特定非営利活動法人日本スバ振興協会 理事長

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 理事

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

COVID-19によるパンデミックも1年を過ぎ、まだ収束のめどが立たない状況です。当初はこれだけ長引くとは考えていませんでした。これにより多くの産業で大きなダメージを受け、本来健康産業である温泉、温浴関連業界でも多数の倒産や廃業が出てきています。

しかしながら、日本が諸外国に比較し感染者が少なく生活できるのも、日本の公衆衛生管理の良さと、国民の生活に対するまじめさのためだと思います。これらを忘れずに継続していくことが重要だと考えます。

2. 日本の温泉の今後のあり方

近年の温泉はレジャーとしてのポジションが強く、もっと健康、療養としての温泉にシフト（リターン）していくことが必要だと思います。治療ではなく自己免疫を高め、健康の維持、増進を意識して行っていくことがこのような時こそ重要と考えます。特に日本は諸外国に比べ衛生管理には厳しく清潔なものであり自信をもって海外に発信できるものと思います。もちろん殺菌方法など問題がないわけではありませんが。

日本の健康資産、文化資産としても、温泉利用、温泉地の保護などに予算を投入してでもおこなっていくことが必要だと思います。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

健康と温泉フォーラムは、温泉に関する学術的な側面から幅広く温泉を考えている団体です。

この姿勢を継続し、さらに拡大させることが求められると思います。温泉関係者だけでなく、一般市民にももっと温泉というものを知ってもらうべく、発信していく必要性を感じます。狭義での温泉利用や、温泉地利用、ビジネスの観点、レジャーや興味での温泉関連団体は多くありますが、広範囲に温泉をとらえる非営利団体は他にないと思います。業界のプラットフォームとしての役割を期待します。

4. その他

日本における温泉は資源としてだけではなく、生活に根付いた文化ともいえます。広く日本人の入浴習慣を文化として正しく発信していくことが重要な課題だと思います。

川崎 義巳

フェローニア株式会社 取締役

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 理事

元・株式会社ツムラ 中央研究所 研究部長

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

ハーハー ゼーゼー ハックション

人の歴史は病との 幾多の困難のり越えた 先人たちの
勇気さよ

神の気まぐれ時々に 試練を与えし困らせる

コロナはどうかと 試される

それでも人は知恵を出し 精一杯の可能性 探求するは
努めなり

三密回避にうなずくも これでもかとの攻撃に マスク
手洗い 新習慣

何をとっても むなしい感じ いったい何をやるべきか
普通の生活できるのが こんなにも大変か できない時に
思い知る

普通の勉強できるのが こんなにも大変か できない時に
思い知る

普通の仕事できるのが こんなにも大変か できない時に
思い知る

普通の遊びできるのが こんなにも大変か できない時に
思い知る

ステイホームで考える

パンデミック クラスタ 人に寄り添うウイルスには
力づくでも戦い挑む これこそ 人の進む道

ワクチンの日本の技術はどうなった 負けてはならない
意地がある

総力あげて取り組もう 国内生産めざすが肝要

ウィズコロナではなくアウトコロナでいきたいものだ

世界の人々意識を高め やっつけましょうCOVID-19

ひとすじの光が見えたかワクチンに 油断は大敵 慎重
にコロナ禍をのり越えたその時に 神は微笑む

よくやったなと

ハーハー ゼーゼー ハックション

2. 日本の温泉の今後のあり方

ブクブク ポコポコ ホッカホカ

周りを見ればお年寄り ついに日本は高齢社会
昔は威張ったあの人も 今じゃ、静かなただの人
温泉浸かって元気に長生き 誰もが想う老後の人生
温泉に気軽に行けるシステムを 望む声は多くあり
立派な料理 施設は不要 長期滞在 湯治のように
お年寄りとか弱者への 対応急げ 行政も
町内会や自治会と 絆を大事に 温泉は
人材育成重要だ 泉育を子供の頃から始めよう
幼稚園への出前講座や入浴体験 楽しさ教え 未来へ繋
げ、日本に生まれて良かったと 想いをこめた育成を
スーパーチルドレンの誕生だ
アイテム揃えて 温泉好きに
温泉地の特化だね 3,000超える日本の温泉
そこにしかない歴史や文化 そこにしかない泉質効能
温泉と農業体験 漁業体験 コラボもどうかのアイデア
は、何でもいいから楽しむことだ
温泉地の連帯も 目的持って 信頼深め
可能性は限りなく 可能性を実現に
Z世代は デジタルネイティブ
温泉の 発想転換 アップできるか
温泉地でのテレワーク 地方再生期待する
自治体 受け皿 推進必要
薬膳料理で体調良好 お茶代わりの飲泉で
免疫力のさらなるアップ 東洋の知恵か
介護保険は使わなくとも 健康増進 間違いなしだ
湧き出る温泉流れとともに病も流れて気が戻る
無限ではない温泉を大事に使う方策は
自然の恵みの温泉を 知恵出しあって 守り抜く
残したい 日本の温泉美しい 四季おりおりの姿あり
ブクブク ポコポコ ホッカホカ

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

ダッシュ ゴーゴー ランランラン
歴史を刻む フォーラム事業
得られた実績ひっさげて 頑張る姿頼もしい
世の中移り環境変化 対応するには策が要る
情報社会の発展に ついていけない人多し
素人なりに興味あり AIの温泉導入いかにせん
どこまでできるか 定かでないが
エビデンス データベースの完成は
温泉医療の革命だ この症状にこの温泉
誰もが温泉療法医 ハイレベルなステップだ
加えて世界へ発信し 温泉研究リーダーへ

日本の実力 見せましょう 日本が誇る研究を
技術ノウハウ海外へ 協力体制万全で 喜ぶ顔が見えて
くる
月例会の内容も英文にして発信し 世界の人から意見聞
く
思いつく遊び心の研究テーマ 温泉関わる お題から
歌に踊りに演奏を 落語や漫才楽しもう
時には余裕も必要だ 難しい話ばかりが仕事じゃない
温泉環境 SDGs 問題提起が必要だ
共存考え 持続可能に アクションとらねば手遅れだ
残したい歴史的な温泉は 温泉遺産の認定へ
日本遺産 世界遺産へ 広がる声が楽しみだ
世界温泉サミット開催 ネット上でやればいい
世界の情報共有し 温泉力を養おう
インバウンドへの可能性 期待できるぞ 温泉は
海外からのお客様 もてなす心は日本の心
足りないものは足せばいい 要らないものは削ればいい
温泉地からの生の声 常設コーナー開設で
フィールド情報大切に 今後に活かす知恵の箱
刷新しようフォーラムを 興味を示す体裁に
グローバルネットワークの強みを活かし
継続していく活力で 前に向かって進むのみ
ダッシュ ゴーゴー ランランラン

4. その他

ジャブジャブ ドボーン シュワー
遠くへ行く必要もなし 近くの温泉十分だ
自分の温泉マイ温泉は 楽しく愉快だ お勧めだ
ひとつだけ見つけておこうか 隠し湯を
恰好つけない 干渉されない ひとりの世界
それだけでいい どっぷり浸かる温泉に
同じ温泉 同じ場所 春夏秋冬行ってみる
それぞれに異なった顔見せ 輝くばかり
温泉の仮想体験ソフトがあれば 老いの人には朗報だ
家にいながら温泉気分 活力増進 病気知らずに
温泉ミュージアム ネット上でも 楽しいか
各地の温泉一堂に エキスが積まった内容は
温泉好きにはたまらない 開店を待ち望む人多いかも
温泉を愛する人々 一様に 浴槽に沈んで思うこと
アー 温泉の湯が身に浸みてくる
アー 温泉の匂いが身に染みてくる ……………
ジャブジャブ ドボーン シュワー

北出 恭子

杏林大学CCRC研究所 客員研究員

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 研究員

特定非営利活動法人日本ヘルスツーリズム振興機構 理事

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

これまでの温泉地のあり方が大きく変化し、新たなイノベーションが求められていると感じる。例えば、感染症対策に伴う意識変化、デジタルを活用した新たなビジネスモデルの構築、ライフスタイルの多様化に適応した環境整備などである。また、在宅ワークが増え、人との交流が減り、自然から阻害された環境にいることにより、心身のバランスを取り戻すべく自発的に旅へ出掛けたいものではないだろうか。このようなことから、ニューノーマル時代における温泉地の社会的役割はますます重要になると考えられる。今こそ、自然環境による転地効果や温泉の薬理効果など、日本の温泉地の本質的な価値が見直され、世界中の人々の疾病予防や健康増進に寄与できるのではないだろうか。

2. 日本の温泉の今後のあり方

今後の日本の温泉地での課題の一つは入浴文化だと考える。グローバル化に伴うタトゥー問題や宗教問題、LGBTや乳がん患者の増加、超高齢社会や障害者福祉など、温泉入浴が困難な人々があげられる。本来、温泉地で療養しながら健康づくりをしなければならない社会的弱者が排除されている現実がある。バリアフリー化や湯浴み着の普及と理解、アイデンティティの尊重とマイノリティへの配慮など、“誰一人取り残さない”SDGsに向けた施策を温泉業界も進めていくべきではないだろうか。また、人間のエゴで開発を進めてきた温泉地を本来のあ

るべき姿に取り戻すべく、限りある自然資源を保護しながら無理なく利活用し、自然と共存共栄しながら温泉地の活性化を図れる方策が必要不可能である。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

過去の月例研究会のテーマやスピーカーを改めて拝見し、これだけの人脈を集め多様なテーマで開催されていたことを知り感服した。是非とも毎月の定期的な開催を今後も希望したい。素晴らしいフォーラムの活動を広く社会に認知させ、登壇者の話もより多くの人々に聴講してもらえよう、オンライン化の対策をお願いしたい。

4. その他

コロナ禍で自分自身が温泉地のために何ができるのか…。たどり着いた答えは、日本の温泉についての情報発信をすることであった。観光としての表面的で一面的な情報だけでなく、日本の温泉地の文化や歴史、医学や科学のエビデンスに基づいた温泉地を活用したヘルスケア、自然保護等への環境教育活動に至るまで、日本の温泉地の価値と可能性を広く双方向で伝えていくことが、持続可能な未来へ繋がるのではないかと考える。また、これほどまでの温泉大国でありながら学術的な教育機関が無く、人材育成がなされていないのも社会課題である。今後、産学官連携を図りつつ温泉に関する様々な研究活動を進め、日本の温泉業界に貢献をしていきたい。

木地本 朋奈

株式会社トリリオン 代表取締役

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

温泉・温浴の施設における入浴効果としての免疫力・抵抗力の向上や強化に関するものの研究や、効果の高いアプローチの啓蒙を行い、業界全体＝利用者(エンドユーザー)へのお役立ちをしたいと、考えます。

例えば、国際医療福祉大学の前田眞治先生が、過去より温浴と炭酸泉の効果効能として、43℃の高温温浴に入ったり、38℃の高濃度炭酸泉に入ると、通常の40℃温浴と比較して、どちらも深部体温が1.5～2.0℃近く上がり、そうするとナチュラルキラー細胞活性が上がることや、ヒートショックプロテイン(壊れたたんぱく質を修復するたんぱく質)が出てくることを研究されており、今年の日本温泉協会の季刊春号で、コロナに効くかどうかは別と

して、免疫力の高い体にしてゆくことを推奨するような記事を書かれています。

似たような研究で、免疫力向上を連動させたヘルステック、同ストレスの解消、同不眠の解消、同ワークション促進などに、繋げてセールスプロモーションに役立てるようなことを実行できないかなと、考えています。

そして、これらの実行手法として、例えば経済産業省の事業再構築補助金の活用(具体的な温泉旅館で打ち合わせ中)を検討しておりますが、環境省の温泉系の局・課への政策提言を行って、業界全体で進めてゆくようなことに寄与できないでしょうか？

また、温泉旅館や温浴施設においては、従来より衛生管理ノウハウが高いせいか、あまりクラスターが起こっ

ていない事実がある様に感じておりますが、マーケット側は逆の価値観(安全でない感)で受け取っているようです。このあたりのことについて、実態調査をして安全PRの様なことを実行することこそ、環境省などと連携して進めるべきことではないかと考えています。

2. 日本の温泉の今後のあり方

少し上記課題とずれるかもしれませんが、上記の様な、マーケットが求める(あるいはマーケットに寄与する)戦略的マーケティングの必要性を感じます。

また、目的税である入湯税は、観光整備的なものに活用されているわけですが、これもエンドユーザー(利用者)

の免疫力・抵抗力の向上のエビデンス作りを目的に使うことができないでしょうか？ 温泉業界にとって、こちらの目的の方が意義が高い様に感じます。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

1.と2.で記述した様な政策提言、環境省との共同研究、更にはそれらに関わる補助金・助成金取得へのシナリオづくり。

重 隆 文

株式会社アクアエンタープライズ 代表取締役

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

コロナ禍になって一番変わったのは、人の移動だと思う。国内的にも国際的にも観光やビジネスでの人の移動が極端に少なくなりトランスポート産業に関わる事業者の経済的なダメージが大きい。温泉を目当てに旅行に行く人も減り温泉地のホテルや旅館も大打撃を被っている。ただ、コロナ後には我慢を続けた反動で多くの人たちが温泉地を訪れるのではないだろうか。

2. 日本の温泉の今後のあり方

温泉資源は世界的にみると入浴産業よりも産業用に使われているケースの方が圧倒的に多いのではないだろうか。地熱発電や温泉の熱を利用した発電技術の研究が盛んなように思える。そして、それは各国のエネルギー政策上の哲学や理念がそうさせているのかも知れない。

昨今、SDGsが叫ばれる中において地熱発電や温泉の熱を利用した発電は世界的な共感を呼んでいる。また、これらの技術開発は年々進んで来ていてより効率的な成果を挙げて来ている。それと比較すると入浴としての温泉については観光資源の一つのアイテムでしかないのではないだろうか。もっと温泉の泉質による健康への積極的なアプローチを研究して科学的な温泉の効果・効能のエビデンスを確立する事が必要であると考えている。そのためには研究費用が必要となるわけだが、そこがかねてより提言されている「入湯税」の戦略的な活用である。そもそも目的税である入湯税が一般財源の中に組み込まれていて「入湯税」とは名ばかりで形骸化されている。

本来の温泉のために使う事ができるようなシステムを構築することが急務である。世界でも有数の多様な泉質を保有する日本だからこそ是非やるべき研究ではないだろうか。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

「温泉なら何処でもいい」という消費者の考え方から「今回療養目的でこの温泉を選んだのは・・・」という明確な動機付けができるようにするにはどうしたら良いかという事を考えるフォーラムにしていくべきではないだろうか。

4. その他

温泉研究のための予算確保はもとより環境省、国土交通省、経済産業省、資源エネルギー庁が縦割りではなくて省庁を横断して自然エネルギーとしての温泉や健康増進や医療としての温泉利用について或いは世界に誇る観光資源としての温泉地をどう育成するか等々を議論する機会が設けられることを期待したい。日本には活火山が多く存在していて、そこには高温の地熱や温泉が存在するわけだが、その多くの場所が国立公園に指定されている事であらゆる開発が拒まれている。この地球が与えてくれている自然エネルギーをできるだけ自然破壊をしない形で有効に利活用することが可能なら原発に頼る事のないエネルギー政策が生まれるのではないだろうか。

このコロナ禍で日本が世界に誇る事ができたのはコロナによる死亡者の数を抑える事ができたという点ではないだろうか。これは日本の医療技術の高さと医療従事者のレベルの高さであると考えている。おそらくコロナ後の日本のインバウンドの目的にはメディカルツーリズムという分野が世界の富裕層を中心に増えて行くのではないだろうか。メディカルツーリズムで日本に長期滞在する外国人に対してもっとも有効な温泉保養地も併せて紹介する事ができれば温泉大国としての日本もさらにアピールできるものと考えている。

竹村 節子

旅行作家

元・現代旅行研究所 専務取締役

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

主たる商圈を地元と周辺地域へ戻し、顧客の維持・拡張をもう一度やりなおす必要性。不特定多数のエージェント依存型集客割合を減少させる努力が必要。AI集客の時代になってもネットエージェントに縛られることに疑いを感じない経営者の他力本願な経営手段に疑問を持つべき。独自集客の必要性（いまさら言っても始まらないけれど）。つまりは宿の個性化と魅力づくりという基本に立ち返るチャンスではないのかと。

2. 日本の温泉の今後のあり方

コロナ禍であるか否かにかかわらず、人口が減少傾向にあるわが国では、一人の顧客のリピート率&滞在宿泊数の促進が究極の課題である。かつて旅館の嫌った「湯治・滞在」型こそ究極の安定法であり、ここに活路を見出さざるを得ない。

インバウンド依存が一番不安定要素であることを今回のコロナ禍で痛感させられた。妙高市のDMOと医療を連携させる試みなどには期待したいが、なによりこうした新しい試みについては、長い時間と不断の努力・投資、そして地元民の理解と同調性がなければ定着はむづかしい。特に首長が交代した場合の継続性が重要だろう。何より日本の温泉の多様さと温泉利用方法、その経験値の蓄積は「人類を救う」と言ってきたが、医学界がやっと追いついてきた感がある。全身浴による身心一体の癒し効果は日本人の長年にわたる経験値から生まれたDNA的な特質であることは確か。ただしインバウンドによる外国人客にはただ入浴することでの効果を知らしめるのはむづかしいと思われる。彼らには物理的な、あるいは目に見える仕掛けが必要となるが、経験値を積み重ねることで、全身浴の効果を体得させるものと考えている。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

管轄省庁とのパイプが少しでも保たれている貴会にかけける期待は大きい。しかし、現況を見ると、産学協同という理想が危うく感じられる面もある。大きな原因の一つに会員としての温泉経営の現業者（高名な既存の経営者ではなく一般の旅館経営者）、若手の研究者の少なさ、管轄省庁の特定化（環境省に限らず国土交通省・厚生労働省など横断的なつながりが欲しい）から、そう感じるのかもしれない。また、一部研究者・温泉関連業者や管轄省庁が外国、特に欧州の温泉システムを日本の現況を考慮することなく、形骸的かつ盲目的に導入しようとする傾向に危機感を感じてきた。それに飛びつく温泉地のありようも疑問ではあるが。すでに伝統としての「湯治システム」を保有している我が国ではその系統的な考察と研究・検討・検証こそが必要であり、関係者はもっと日本の温泉と既存の活用法やシステムに自信を持つべきだ。その上での施設・システムの近代化は勿論必要であろうが、盲目的な欧風化は日本特有の温泉文化を弱体化させるにすぎず、逆にその発展を妨げるものと考えている。

4. その他

旅館の風営法適用の時代錯誤を正す。旅館が風営法に縛られていること自体、時代的に見て齟齬（スナック等があればこの法律に縛られるという）がある。すっかりわすれていた法律適用が今でも生きていたとは。旅館の利用が、宴会・芸者・売春とつながっていた大昔の（？）遺物で、風営法に包括されている旅館業態自体が、現代の利用者や利用方法から見ても大いに疑問だ。

谷口 江里也

有限会社エリアス・クリエイティヴ・スターシップ 代表取締役社長

詩人

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

ウイルスの出現は仕方のないことだとしても、その対応の仕方によって、国を運営するものの器量が顕になってしまうようです。世界的にみても、日本の治世者たちの無能ぶり、もしくは脈絡のない無作為ぶりや、現実を直視する力のなさが目立ちます。論理性のなさ、科学的

視野のなさ、不確かな願望に頼る精神性は、もしかしたら日本という文化や日本人のどこかに共通して深く潜在するものかもしれないとさえ思ってしまう。

2. 日本の温泉の今後のあり方

日本の温泉文化は、地域文化の一つの象徴になっています。大地の恵みやそれを生んだ自然、そこで採れる四季折々の自然の恵みを愉しみ、またその土地ならではの歌や踊りや建築を五感で楽しむ、宿の文化は、非常に優れた文化的装置です。大都会へ人々が集中し、地方を過疎化させて来た中央集権的な近代が限界を迎えている現在、地方の特色を生かし、一瞬にして日常から人々の心身を非日常の中に包み込む温泉という文化的装置の受容性は、今後、改めて見直されて良いと感じます。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

とても真面目で総合的で多様性に富んだ研究会を続けておられて感心します。温泉には主に、上記のような文化的側面と、湯治という言葉に象徴される、病気などを部分的に治す西洋医学とは異なる、心身をリラックスさ

せて、人間の生命力や免疫力をアップさせることで、元気を回復するという側面があります。その両面を活かすとともに、その経営、つまり宿の経営だけではなく、温泉のある地域を総合的に元気に美しくしていくような経営の方法が、模索される必要があると思います。

4. その他

上記の全てと重なりますが、仕事と遊び、日常と非日常を区別するのではない、日常的な営みの中の美、非日常的な美を、温泉というテーマの中で融合するということを考えてもいいように感じます。

野添 ちかこ

温泉と宿のライター 旅行作家

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 研究員

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナによって、時間軸が一気に加速化し、事象の本質があぶり出されたと思っています。変化し続け、魅力を打ち出している温泉地・宿はどんな時代でも人が来るし、旧態依然としたところは取り残され、やがて資本力のある企業や外資に吸収されるかなくなってしまう。10年、20年の時の流れが1年、2年に凝縮されて起こっていると感じます。

断続的に地域ごとの緊急事態宣言・まん延防止等重点措置などが今後も発令されることを考えると、観光業や宿泊業にとって大変な時が続きますが、一方で助成金なども用意され、業態拡大・転換できるチャンスもあります。

本番はGo Toキャンペーンなども落ち着き、事業者の無担保・無利子融資の返済が始まる3年後。それまでに温泉地・宿の魅力づくり、方向性が定まっているかどうかで行く末が変わってくるように思います。

2. 日本の温泉の今後のあり方

かつて日本人が湯治場に求めていた心と体の安息を求める欲求はより強くなっていくものと推測されます。ワーケーションも含め、豊かな自然環境や食を求める現代湯治にある一定の関心が寄せられると思いますが、飛行機を使った遠隔地への旅行は鳴りを潜め、近場の旅行・日帰り利用の傾向はますます強まってくると思います。

実際、都道府県などの宿泊割引キャンペーンは功を奏し、毎日が正月のようなフィーバーが起きている光景を見かけます。近隣・近県の住民を視野に入れたシフト

チェンジ、自宅での温泉活用方法の提案など新たな取り組みが求められています。

そういった意味では大分県・クアパーク長湯の月額制の重炭酸泉入浴剤の送付はサブスクリプション方式で、利用者にとってはお得（2割引）に健康増進でき、施設にとっても固定の利益が生まれ、温泉地のブランド力も上がるよいモデルでしょう。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

最近、温泉地を訪れると、不動産業など異業種から開業したゲストハウスなど多く見かけ、温泉地が変化を遂げているのを実感します。新潮流の現地視察などできると嬉しいです。

4. その他

温泉地ではないエリアの古民家再生やアマン創業者による高級リゾートのオープンなどの話題性、盛況ぶりをみるにつけ、「非日常」や「豊かさ」を演出する手法が長けていれば、温泉でなくても支持される施設が複数誕生していることを考えると、既存の温泉旅館はあまりにも温泉にあぐらをかきすぎてきたのではないかと感じます。温泉財産区などに守られて、温泉地がよそ者を受け付けないことが温泉地を守ることだとずっと思っていました。それによって生まれる弊害があるのもまた事実。温泉宿・温泉文化が、変えないものと変えるべきものを取捨選択し、時代にあった魅力あるものになっていくことを願っております。

2. 日本の温泉の今後のあり方

日本の温泉の未来に思うこと

その昔は、スペインとか、ポルトガルが、国として、地球で1番の権威権力を謳歌してたんだよ、オランダも凄かった……。なあんて話は、多くの若者たちには信じてもらえないだろう。何それ？サッカーの話？くらいが関の山かも。

そう、時代は変わるのである。信じられないことが、起こる。歴史はその連続の物語。「生きる」ということは、常なる「変化」と言ってもいい。

地球もぐるぐる回っている。自転しながら、公転も。大風呂敷を広げれば「宇宙」全体も、動き続けるから、存在できているのである。

「変化」しないこと。それは、すなわち、生き続けること、そのものの終焉を指す。

突飛な始まりをお許しいただきたい。「日本の温泉の未来」を語るときには、どうしても、この地球を一つの星として俯瞰する、大きな、マクロな視座。加えて、ヒト科のみならず、小さな微生物に至るまでの、ミクロな「生きている」「いのち」に想いを寄せる視座。そして、時間というリニアを自在に行き来して想像する、という、たおやかな遊び心がとても大切だ、と信じているからである。

大の温泉好きの、温泉人や温泉地へのお願い事として聞いていただければ幸いである。

「温泉」と聞いて、何をイメージするか。

古くは「大穴持命」（オオクニヌシのミコトと言われている）の「古事記」や「日本書紀」の神話の時代から。弘法大師空海さんも、北海道を除いて全国を行脚し、その杖で突いたところにお湯が湧き、たくさんのおいのちを救いたもうた…そのルーツでの、いわゆるおじいおばあ世代の湯浴み場、或いは、リ्यूマチやリハビリのため、というガチな「湯治場」ストーリー。ただ、戦後の高度成長の時代には、社員旅行という名の、おじさん文化主導の宴会を中心とする団体、企業旅行イメージも広がった。しっぽりお忍びも可、離れ仕立て。でミシュランお懐石付きで一泊お一人10万円御用達、みたいなものも、ほんの少し。

さて、このままの「温泉」で、明るい未来は拓けるか？

残念ながら未来からの応えは、NO！である。だから「変わる」。

変えればいい。シフトすればいい。ただし、生き残りたい、より良い未来を拓きたい、と心から思う人々や町でないとダメである。何故か？黙っていても、努力をせずとも、じっとしてればまた、景気の方が良くなって、インバウンドという名の人々だって戻って来る。なあん

て、あの古き良き時代を夢想しても、もう戻ってこないから。時代は、音を立てて動いている。

自ら行動し、「温泉」という言葉が人々に想起させてきた、先ほどのような古いイメージを変えていこうとする、熱いエネルギーを出せる人。そんな人々が住む村や町でないと「変わらない」。何故かといえば、そこに住む人々の日常の生活観、そこからの「シフト」が必要だから。でも、逆にいえば、気付いた人々の前には、文字通り、世界のマーケットが拓けてくる。「ICTとニューノーマル時代」と呼ばれる、これからの「地球時代」のリーダーとして、温泉をいただいた村や町ほど優位なところに立っている地域は、ない。

何をどう「変えればいいのか？」日本全国の温泉地、温泉街、に通用する「マニュアル」が書けるようなシフトならば、それもダメ。「みんな違って、みんないい」これが肝だから。やり方の答えは、その町、その村、そのお宿。そこにしか産み出せないものに宿っている。そこへの気付きから始めればいい。

敢えて、共通テーマをあげるとすれば、次の3つ。地球全体に、今、広がっている「変化」に気付くこと、だと思う。それぞれの地域の、大きなヒントになると良いのだが。

まずは『コロナ禍』が教えてくれたこと：「お金」から「いのち」への価値の変化」。

地位や名誉、そして全知全能と見紛うほどパワーの素と思われてきた「お金」。これが無力？！罹患すれば、死に繋がる。トランプ大統領も、チャールズ皇太子も。セレブという名のロナウドさんも。かかるし、運悪く弱っていたら、死ぬ。

「いのち」のかけがえのなさに、地球全域が目覚めた。当たり前なのだけれど、かなり忘れられていた事実だ。都市生活、という近代化のオヤクソクは、すべからく、お金、という道具さえあれば、思うようにいく。幸せもお金とシンクロ。多ければ、たっぷりしあわせになれる、そんな幻想が事実と縋い交ぜになっていた。

もちろん、パワフルだから、お金は大事な道具である。でも、今、世界で起きている「変化」は、これをゲットすることだけを「目的」にしてきた生き方や、企業のあり方はイカン！という気付きなのである。それはグサい！というトレンドが、とりわけ、本当の裕福な人生を味わえる層に広がっている。詳述しないが、環境問題然り。自分の「いのち」の本来の輝きに気づかせてくれて、それを磨いてくれるヒトやモノやコトや場所、豊かなじねんには、糸目をつけない。

「ダウン・トゥー・アース」ーじねんのありのままに感謝し、畏敬のオーラに触れる。そのしつらへは、細胞に刻まれて、ヒトをリピーターにする。

さて、その地球上の全ての「いのち」の素は何か。全球凍結し、カチンかちんの氷に覆われていた地球の氷河期。直近の！およそ6億年前の時も、その氷を溶かし、緑あふれる、今に続く地球に戻してくれたのは、何を隠そう、我らが「温泉」であることをご存知だろうか。38億年前からの「いのち」を、いまに繋げてくれている「いのちの源」。それこそが、温泉の温泉たるミッションと言っても過言（ほんの少しだけ！）ではない、とすら思っている。

次は：「疾病」から「やまい」への気付きの変化である。

これも、詳述はしないが、「人間ドックの数値信奉」による薬やサブリヅけの人生から、「やまいは気から」への変化、とでも言えようか。一病息災的な、健康志向の変化が起きている。これも、「いのち」への気付きという、1点目の変化とシンクロしていると思うのだが、すべからず、原因不明の精神疾患までも含めて、現代人の抱える「ストレス」が、疾病の大きなトリガーになっている、という事実。こうした指摘がどの専門医からも出るようになってきた。治験の際のプラシボ効果を、自らにすれば、やまいは治癒の方向へ動くのだ、という認識である。温泉は？...ね、答えは出ています。温泉だけは勘弁してくれ、あれはストレスまみれになるとこだから！...なんていう人類は、いない。

ちなみに、ニューヨーク州では、多くの病院では、治療し処方をして行く中で、最低30%は、統合治療的なものを施すような方向に動いている、と聞いた。

最後に：「西洋的」なものから「東洋的」なものへの流れの変化について触れておきたい。

もはや、お気づきだろうと思う。先の大戦後から、いわゆる「国際的」というくくりで捉えられてきた経済にしる、政治にしる、文化や、医療にしる、様々な分野での文明的な進化は、すべからず、西洋文明的手法や規則で牽引されてきた。一神教的思考や自然観に基づく文化と呼んでもいい。でも、これも80年近く立って、様々な地域や分野で、金属疲労や綻びが一挙にあらわになり始めている。これも詳述する紙面はないが、行き過ぎたモノには、必ず揺り戻しがある。

「いのち」を診るときも、数値化できないモノやコト、西洋医学の範疇外は、非科学的という名の池に投げられてきた。でも、ゲノムの解析ができたことを科学技術の最先端と認識する程度のレベルでしかない。そのゲノムそのものを描いたのは誰？という、原初的な「じねん」や「いのち」に対する畏敬を忘れる姿勢には、限界が見える。

医学のみならず、日本という国の政治も経済も、いま、大きな転換期にあることは、万人の認めるところだと思

う。その変化は、地球全体の激変とともにあるのである。

安いのに精密で丈夫。そんな大量生産大量消費文化を可能にし、世界第2位の債権国になった「モノづくり国家」には、もう戻れない。9割の国民が、自分を中流クラス、と認識していたあの頃には戻れない。今や、子供の7人に一人が貧困状態にある、という格差拡大の国なのである。この子供達が平和で暮らしていける未来を拓いていくには、何で食べていける国にシフトしていかなければならないか。

ICTは、地球をどんどん小さく、平たく、しかもコストを低くしながら私たち一人ひとりの地球人を繋いでいく。大きな力を持つ企業や、官公庁のお墨付きこそが「力」を持っていた時代は終わりつつある。「力」ある中央からの分配や規制より、自分たちのローカルへの小さき「誇り」や、独自の「まつりごと」の魅力の方が、広く世界に通用する時代が音を立てて進んでいく。

どんなに社会構造が変わろうと、国籍が違おうと、ヒトにはそれぞれ、たった一つの「いのち」しか与えられていない。健康という意味ではなく、与えられた状況の中で、いかに健康に生きるか。いかに「健やかに」「楽しく」「しあわせ」な時を重ねるか。この紡ぎこそが「人生の豊かさ」そのものになる時代が始まっているのである。

日本という小さな島国が、どんな国からも攻められることなく、攻めていく必要もない国造り。どんな国の人々からも愛されて、尊敬されて、また訪れて見たい、何度も行きたい、と思ってもらえること。それは、そこに住む人々とともに、欠け替えない一番大切な「いのち」が輝いて、「豊かなしあわせ」を味わえるしつらえを、その度にお届けすることではないだろうか。

それを、私は「温泉平和力」と名付けたい。

「防衛力」よりも、遥かに優れてパワフルな、「平和の力」を、ぜひ、全国の、それぞれに違う地域の「温泉力」として、創りあげていただきたい。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

コロナに限ったことではないが、マスコミの報道の内容があまりにも極端で、恐怖をあおるものしか出てきていない。世の中に蔓延しだしたころ、ほとんど解明されていないにもかかわらず一部の評論家（無責任な）による意見をもとに情報を出している。今もなお変異ウイルスも含めよくわからない部分が多いが、同様のことが繰り返されている。

世界各国の対応が様々であり、非常に興味深く見ていたが、日本は誰が決めているのか本当にわからない気がする。政治家のあちこちに気を使い、国民目線ではないのが現状だと思う。また医療と経済のバランス、そして様々なファクターが絡んで判断が難しいという事は理解できる。しかしながら視野の狭い野党議員や置かれている立場でしかものを考えない、考えられない人の何と多い事か、もちろん前述のマスコミも。

さらに感染した人や他府県（他部落）からの侵入者への差別や嫌がらせはもちろん、偏った（自身の都合による）正義感や不安感からの自粛警察、普通では考えられないことですが、世の中が乱れているからこそ本性が出るのでしょうか。自粛警察などは、自分自身が法を犯していることは考えていないのでしょうか。日本の未来は暗い。

2. 日本の温泉の今後のあり方

まずは日本の財産としての温泉資源をどうしていくのか、テーマとしてあまりにも大きい。温泉に関わる‘会’は数えきれないくらいあり、それぞれ熱意のある方々がそれぞれの思いで運営をされ、今後の温泉について考えられていると思う。しかしながらあまりに船頭が多くて、動きがバラバラであったり、追いかけているテーマが重複しているのが現状ではないかと思う。一つの団体に一本化（現実的には難しいが）、例えば全日本温泉協会のような組織が、観光や化学（科学）、医療、環境等の部門を持ち、環境省や厚生労働省や文部科学省等と官民一体になって進められるような形になればいいのではないかと考える。

温泉を取り囲む裾野が広いからこそ、上記のような組織で縦断的に温泉の今後のあり方を考えられるのではないかと思う。温泉に関わる各分野の専門家の方は大勢いらっしゃるので、それを取り纏められる視野の広い方がそういう組織を立ち上げてもらいたいと思う。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

温泉や入浴に関して、科学的エビデンスをもっと集めていただき、世の中に知らしめてほしい。健康にまつわる話は今後もさらに注目を浴びることは間違いない。これも本当は官民一体になって、国からバーンとやってもらえれば良いのですが。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

新型コロナウイルスは元々静かに過ごしていたウイルス細胞の中から遺伝子が何らかのタイミングで飛び出して活動を始め、唯一の使命である子孫を残すために様々な感染や変異を繰り返しているということらしい。子孫繁栄という唯一無二で突き進むウイルスに対して、多様化し過ぎた人間は互いに攻撃しあう「凶器」にされ、翻弄されて人や国も本性が剥き出しになり、その関係性や社会構造まで変えられつつある。

感染を避けるために人と人との距離をとるといふ～この初めての経験は互いに支えあい、刺激されて進化してきた人間には困難なことであり、社会性や人間性においても、本線ではない様々なイビツな進化が始まってしまふことが気になる。

2. 日本の温泉の今後のあり方

世界から欲される日本の体験において、温泉と和食はとても期待度が高いが、例えばそのバリエーション・素材の活かし方・提供方法・見せ方・金額面・ストーリー等を比較して考えると、和食と温泉には大きな差異があると思う。外国人の体験後の言葉からも温泉の深みが理解されていないことが多く、やはりもどかしい。

日本では温泉は環境、観光、厚生にまたがって管理されている。この温泉に対する区分（扱い方）が日本の温泉を干物化しているのではないだろうか？各省庁でそれぞれのリスク部分を取り締まった後に提供される温泉では、提供者が本当に体験してほしい温泉本来の素材・神話性・味わい等の温泉の魅力は体験できていないのではないだろうか？もし温泉を文化として定義し、温泉が最も力を発揮する使われ方を保護できれば、温泉のエネルギーや効能等がもっと広く深く活用できるだろう。しかし安心安全を考えると温泉は干物状態でしか提供できな

いのが現状である。温泉大国である日本には温泉技術者がとても少なく、その存在も不明確である。今後の日本が温泉を本当にもてなし、自分たちも最大限に恩恵にあずかる為には、食の世界における蔵元・素材製造者・調理人・職人・グルメ等のような役割を担う温泉の管理技術者の育成が急務である。

このような人材が各地で育てば各都道府県で温泉に対する法律の基準や解釈がもっと柔軟になり、各地域や温泉の特徴的な利用法が魅力的に表現されると思う。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

温泉学・入浴学のような基礎分野を構想するプロジェクト活動をしてほしい。

若年者にもっと親しみやすく、参加意欲の湧く活動をお願いしたい。

若年者や外国人が学びたい（興味ある）温泉の課題やテーマからの研究会。

各温泉地の文化・神話・かわり・問題等に特化した研究会。

日本の温泉保養（療養）のあらましをわかりやすく表現した書物の作成。

各温泉関係官庁に対しての要望のとりまとめ（温泉提供者・温泉利用者・温泉広告関連）。

4. その他

現在の温泉科学者・温泉医学者・温泉技術者・温泉所有者からの知識と知恵と歴史の伝承。

水島 達也

株式会社ユニックス 代表取締役会長

2. 日本の温泉の今後のあり方

① 友人の話を少しします

「日本・アイランド協会」という任意団体があり、友人が会長を担っています。アイランドはご存知のように、温泉大国で、地熱による発電で電力の多くを賄っており、国民は電気料が無料とのこと。これからの社会の問題の一つの「SDGs」に関してどう対応してゆくことが重要か？又企業にしても、積極的な取り組みが求められています。

そんな中、我が国の温泉需要を観光資源だけにとらわれず、社会インフラの一つとして地熱発電の導入に関して、積極的に対応することも環境に対する取り組みの一つとして考える必要があると思います。

尚、問題は観光資源である景観と、地熱発電により景観の崩壊は懸念されます。この問題は太陽光発電も同様であり、観光資源としての景観維持も必要なテーマでもあります。

これからの社会は「脱炭素社会」がテーマでもあり、地球温暖化に対応することが条件でもあります。

現在の地熱発電量（0.2%）程度の状況と聞いておりますが、良く解っていない自分が、この様なことを言うことは不適切だと思いますが、観光資源としての温泉と地熱利用による発電とのコラボレーションが生まれることで、社会貢献もより可能になると思います。

もし、水力発電量（6%前後）まで上昇させることが可能ならば、電力全体のバランスは大きく変わっていると考えられます。原発の今の状況ですと稼働そのものに

も問題があります。そして脱炭素社会を担うには石炭・石油に頼らないエネルギーが大切になってきます。

異なった友人が「バイオマス発電」に取り組み始めています。エネルギーの根本的見直しのためにも地熱の有効利用は欠かせないテーマだと思っておるのです。

② 温浴効果による美容と健康面への取り組み

このテーマは従来より追い求めていたことでもあり、以前より進化していると感じています。しかしながら、各地の温泉の有効成分が各々の自立が中心で総合的に判断して、住み分けができる制度があると利用者にとって解りやすくなるのではないのでしょうか？

例えば「皮膚病に効果ある」の表示を統一することで泉質の有効性は解りやすくなります。科学的根拠によって生まれてくる効果を組み合わせることで、単なる温浴効果だけでなく、外用薬や内服薬、そして化粧品類と発展させることもできると考えます。科学的分析を行っているはずですが、現状は縦割り行政の中で、地熱と同様の問題もあり得ると思っています。どちらも一元化ができることで超えられる壁を乗り越えることもできます。そう考えられるような行政のあり方も模索したいですね。

1. コロナ禍に感じたこと、考えたこと

COVID-19による経済的被害を最も強く被ったのが飲食・運輸産業と共に観光産業であることは間違いない。世界的な感染の兆候が表れて以来1年4か月にも及ぶが、国内・国外を見ても未だ収束の気配は見えない。仮にこの後収束に向かっても、経済的回復には3~4年が必要ではないか。また収束後も外出時のマスク着用、大人数での会食自粛など消費者側に行動制約が生じるのと同様に、観光産業側でも「三密」を避けるための施設の改善（浴室や密閉空間の改築、換気、席数の減少など）、接客方法の工夫、従業員教育、緊急事態対応策が当たり前のこととして求められるのではないだろうか。

2. 日本の温泉の今後のあり方

高齢社会、大量消費社会の主役である団塊の世代が全て70歳を越えた。この後、10年間はまだ大きな人口を誇る彼らによる観光・健康需要は続くが、その行動範囲・頻度は次第に縮小する。また、その次には急速な人口減少が生じてくる。少なくなっていく観光客の取り合いの中で、温泉地が生き残っていくには、総花的な誘客体制ではなく、各温泉地のそれぞれが個性創り、特色創りを徹底した誘客を行っていく必要がある。温泉治療や秘湯など既に確立された個性・特徴を持つ温泉以外の温泉・温泉地も、特定のターゲットに絞った誘客をすべきだろう。例えば、キャンプなどアウトドアを盛り込んだ若い家族連れにターゲットを絞り、地域としての付加価値創りを考える代わりに、高齢者は対象から除外する。或いは、2~3人の少数高齢者グループを対象とし、少量高品質の食事、健康維持コンサルティング、移動手段などを確保したパッケージを用意するが、家族連れは対象から除外するなど、いわゆる「選択と集中」が迫られる。実際、多くの企業も過去の経済危機の際、顧客のニーズを背景に、厳しい選択と集中により、過酷な生き残りに挑んできた。

反面、多様性の時代でもあり、様々な独自色が評価される。「どの温泉地を選ぶのか」と言う温泉地の選択権があくまでも観光客側にあることを考えれば、多くの選

択肢の中から選択しやすいセールスポイント、多くの選択肢に埋もれない特徴を明確にすることが必要だ。とは言え奇をてらう必要はない。仮にオーソドックスを極めることで他に抜きん出るなら、それも特徴と言える。

付言すれば、誘客のためのPR活動にも工夫が求められる。個別の旅館・温泉のPRだけでなく、地域の観光業界・自治体を巻き込んだPR活動にもユニークさや、多様性が必要だろう。

PR手段も多様化している。近隣施設での小規模イベントやキャンペーン、年齢層を意識したSNSの使い分け、リピーターとして囲い込むためのEDMなど、ターゲットを絞った「1 to 1」のPR戦略が効果的ではないだろうか。

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

上記2の「あり方」で示されているように、温泉を取り巻く課題は多い。従来型の研究会に交えて、個別のテーマに絞って3か月から6か月と言った期間で連続した議論をするとか、もしくは分科会形式での議論も検討したい。

4. その他

今後の消費者ニーズに合わせるために「入浴・食事・宿泊」のセットとする旅館を中心にした温泉地経営以外の施策を温泉地全体でより積極的に研究する必要があるのではないかと消費者たちの「自由な選択を楽しむ」ライフスタイルに、温泉地も対応していく必要があるように思う。「入浴」をコアにし、それに付随する価値には選択肢を設ける仕組みだ。

先述したような「入浴・自炊・キャンプ」は、地元の食材PRにも繋がる。また「入浴・外食・宿泊」は観光客の食事選択の自由度を増す。温泉地が一体となって、従来の旅館の人材・調理ノウハウなどを転用することで、雇用の確保や従業員の高齢化にもある程度は対応できる。大規模なインフラ整備を必要とする場合には自治体の援助も必要だろうが、まずは可能な範囲での実証実験を行ってみてはどうだろうか。



2021年3月

温泉への思いと心を絆ぐプロジェクト2021

「日本の温泉の今後を考える－有識者からの提言集」へのご寄稿のお願い

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム
会長 三友紀男

拝啓 早春の候、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、健康と温泉フォーラムでは、単なる情報共有にとどまらず、多様な視点と知見で健康と温泉に関わる分野の社会的課題を解析し、温泉の社会的活用の増進に向けた道筋を探るために、2008年12月より月例研究会を開催しています。産官学と多様なテーマの立体的なプラットフォームの構築を目指した研究会の開催はこれまで97回を数え、様々な分野の識者の皆様から多くのご達見やご示唆を賜り、組織的にも共催いただく団体も徐々に増え、「高く、深く、広く」をモットーに、活発な議論を重ねることができるようになりました。（各回の講師とテーマの一覧を別添しております）。これもひとえに、お越しいただいた講師の皆様、積極的に議論に加わっていただいた参加者の皆様、そしてご支援いただいた国、自治体、大学、病院等関係諸団体のおかげと、心より御礼申し上げます。

現在、新型コロナウイルス感染症の影響から月例研究会は休会を余儀なくされていますが、まもなく100回を迎える運びとなりました。そこで本フォーラムは、これを機にいま一度、日本の温泉の今後のあり方、ならびにフォーラムの本質的な役割を見つめ直すべく、有識者の皆様から提言を頂戴し、関係者で共有するとともに、温泉への思いと心を広く社会に発信できればと考えております。つきましては、月例研究会の講師をはじめ健康と温泉フォーラムの活動を支えて下さっている有識者の方々に、新型コロナウイルス感染症の影響で苦しんでいる日本の温泉の今後のあり方、健康と温泉フォーラムへの期待についてご寄稿をお願いしたく、ご連絡いたしました。ご回答は、委員会にて取りまとめたうえで、小冊子として皆様や関係者に配布するほか、ホームページ(www.onsen-forum.jp)で広く公表いたします。

ご多用のところ恐れ入りますが、別紙「日本の温泉の今後を考える－有識者からの提言集」にご記入のうえ、2021年4月20日（火）までにE-mailの添付ファイル（Word形式）で下記アドレス宛の担当委員会の合田常任理事までお送り下さるようお願い申し上げます。

敬具

（問い合わせ・メール返信先）

151-0066 東京都渋谷区西原1-50-2-403

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム

電話・FAX：03-6804-8575 E-mail：godasumito@gmail.com

「日本の温泉の今後を考える－有識者からの提言集」委員会

委員長 常任理事 合田純人 特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 常任理事

委員 専門委員 関口陽一 独立行政法人経済産業研究所 上席研究員

専門委員 坂本誠 特定非営利活動法人ローカル・グランドデザイン 理事

(別紙)

温泉への思いと心を絆ぐプロジェクト2021 「日本の温泉の今後を考えるー有識者からの提言集」回答用紙

以下の1. ～4. に対するお考えを大枠全体で2,500字以内でご回答ください。なお、それぞれの事項に対するご回答の字数に決まりはございませんので、回答行数を自由にし、適宜ページを追加していただいてもかまいません。（基本ワード形式書体明朝10pt）

1. 新型コロナウイルス禍（COVID-19）をめぐる動向に際し感じる事、考えたこと

2. 日本の温泉の今後のあり方（温泉政策、グローバリゼーション、健康福祉利用など社会的活用、入湯税の戦略的な活用、温泉地の連携、温泉人材の育成、温泉文化の保護、その他）

3. 健康と温泉フォーラム活動への期待や提言（全般的な方向や月例研究会の課題・テーマ案含む）

4. その他（自由な発想で日本の温泉の将来への課題を教えてください）

ご回答下さった方に関する情報をお教えください。（記載していただいた個人情報は、本アンケートのみに限定活用し、個人情報保護法にもとづき他に流用することはありません）

（名前）

（所属）

（役職）

（所属会員、団体他） ☐ に ☒ を入れてください。

☐ 健康と温泉フォーラム ☐ 日本健康開発財団 ☐ 日本スパ振興協会

☐ 日本温泉気候物理医学会 ☐ 地域活性学会 ☐ チーム新・湯治（環境省）

☐ その他 _____

（連絡用電話番号・メールアドレス（確認））

電話：

E-mail：

（略歴）

月例研究会開催実績

回	年	月日	テーマ	講師名	所属	会場
1	2008	12/19	笑う温泉泣く温泉	山本紀久雄	有限会社山本代表、経営コンサルタント	東京文化会館
2	2009	1/16	ヨーロッパと日本の温泉考察	山本紀久雄	有限会社山本代表、経営コンサルタント	東京文化会館
3		2/20	別所温泉の旅館経営と地域づくり	倉沢章	信州別所温泉上松屋社長	東京文化会館
4		3/27	温泉とアクアフィットネス	小野倫明	常磐興産スパリゾートハワイアンズウィル ポート主任	東京文化会館
5		4/17	日本の医療と温泉	J.P.BARON	東京医科大学国際情報センター教授	東京文化会館
6		5/15	破綻旅館の再生を考える	松平安弘	山代温泉雄山閣代表取締役社長	東京文化会館
7		7/17	新・湯治文化の実現に向けてシリーズーフランスからの提 言	ジュアンド 康子	フランスの庭主宰 ジャーナリスト	東京文化会館
8		10/16	新・湯治文化の実現に向けてシリーズーOL御用達の温泉地	吉川昭二	株式会社コスモクリエーション代表	東京文化会館
9		11/20	新・湯治文化の実現に向けてシリーズー感性のメディアと しての湯治	森繁哉	東北芸術工科大学東北文化研究センター教 授 民俗学者	東京文化会館
				星憲一郎	涼音堂茶房代表 音楽家	
10		12/18	温泉地における宿泊施設経営の将来ー変化への対応とは	大野正人	財団法人日本交通公社理事	東京文化会館
11	2010	1/22	温泉地活性化の取り組みー別府オンパクの今後	鶴田浩一郎	別府温泉旅館協同組合オンパク実行委員会	都内民間会議 場
12		2/9	温泉文化の新潮流	木地本朋奈	株式会社トリリオン代表取締役社長	都内民間会議 場
13		3/19	たま駅長による鉄道再生と温泉地復活の秘策	小嶋光信	株式会社両備グループ代表取締役	都内民間会議 場
14		4/16	世界の秘湯ーペルー・ペルシア	川崎義巳	株式会社エコドクター取締役	東京文化会館
15		5/21	文化が地域を育むー実践的検証	関口正洋	大地の芸術祭まつだい舞台マネージャー	東京文化会館
16		9/15	イタリアテルメ・スバに学ぶ	Dr.Nicola A.Fornati	イタリアSTBグループ主任医師	東京BIGサイト 内会議室
17		10/27	レジャーから病氣予防へーフィットネスと温泉	斉藤敏一	株式会社ルネサンス代表取締役社長	東京文化会館
18		11/19	新・湯治文化の実現に向けてシリーズー感性のメディアと しての湯治出羽三山山岳宗教と湯治文化	星野文祐	羽黒山宿坊大聖坊13代目羽黒山伏	東京文化会館
19		12/17	中・近世の日本の医療と温泉	酒井シヅ	日本医史学会理事長 順天堂大学名誉教授	東京文化会館
20	2011	1/21	日本の心の宿を護って	上口昌徳	山中温泉かよう亭社長	東京文化会館
21		2/24	私説現代日本温泉論から10年ー温泉地とその利用者の動 向を検証する	竹村節子	旅行作家	東京文化会館
22		3/18	温泉今昔物語ー温泉の常識の「うそ」「ほんと」	甘露寺泰雄	財団法人中央温泉研究所 理学博士	東京文化会館
23		4/15	甘露寺先生に聞くー機に因りて温泉を説く	甘露寺泰雄	財団法人中央温泉研究所 理学博士	東京文化会館
24		5/24	人気の温泉地健康プログラムの取り組みー増富温泉、村杉 温泉のケーススタディ	小山芳久	山梨県みずがき山ふるさと振興財団増富の 湯支配人	東京文化会館
				荒木善紀	新潟県村杉温泉長生館代表	
25		6/22	緊急テーマー震災・津波・原発事故・余震・風評被害に揺 れる街からの報告	小林裕明	いわき商工会議所理事	東京文化会館
				関口陽一	株式会社日本経済研究所調査第二局環境・ 技術部研究主幹	
26		11/28	温泉教育・養成の現状と課題ー分断を超えて知識科学とし ての温泉学を考える	早坂信哉	財団法人日本健康開発財団研究調査部長	東京文化会館
				甘露寺泰雄	財団法人中央温泉研究所 理学博士	
				小野倫明	一般社団法人日本温泉保養士協会代表理事	
				岡田友悟	NPO法人日本スパ振興協会理事	
27		12/20	日本温泉地域学会の活動を通してみた日本の温泉教育	山村順次	城西国際大学客員教授 日本温泉地域学会 会長	東京文化会館
28	2012	2/27	「温泉」に関して興味・関心を抱いている研究課題ー歴史 研究から現状分析まで	前田勇	立教大学名誉教授 社会心理学者	
29		7/31	温泉とスパ産業の協働による伝統的日本の温浴文化の再生	岡田友悟	NPO法人日本スパ振興協会理事長	東京文化会館
				合田純人	NPO法人健康と温泉フォーラム常任理事	
30		8/28	温泉はだれのものかー近代温泉産業の発展とその社会的歪 み	布山裕一	社団法人日本温泉協会事務局長	東京文化会館
31		9/21	温泉の社会的歪み要因分析とその改革に向けて	井上晶子	立教大学観光研究所研究員	東京文化会館
32		11/26	経営学から見た旅館経営・温泉地経営	関口陽一	日本経済研究所調査本部公共マネジメント 部研究主幹	東京文化会館
33		12/10	健康都市構想から見た温泉地再生	中村桂子	健康都市連合事務局長 東京医科歯科大学 大学院教授 医学博士	東京文化会館
34	2013	1/24	温泉医学の歴史的変遷と未来への課題	東威	聖マリアンヌ医科大学内科客員教授	東京文化会館
35		2/28	入湯税の戦略的な活用による温泉振興	大野正人	公財日本交通公社理事	東京文化会館
36		3/26	温泉と地域づくりー温泉の活用と入湯税 健康・介護福 祉・観光（温泉資源の利活用の可能性と課題）	菊池豊 他	静岡県伊豆市長 （PHP地域経営塾オープンプログラムと共 催）	PHP研究所

回	年	月日	テーマ	講師名	所属	会場
37	2013	4/26	温泉と東京ディズニーランド	下村彰男	東京大学大学院教授	東京文化会館
38		5/24	ホメオパシーと温泉	ミハエラ・シェルブレア	ホメオパシー医学博士（ルーマニア）	東京文化会館
39		7/25	温泉事情－タイ国	土橋告	サンヨーインターナショナル	東京文化会館
40		8/23	温泉力魅せます－榑原温泉実証レポート	前田幹弘	榑原温泉湯元榑原館館主	東京文化会館
41		12/12	OMOTENASHIが日本を変える・世界と繋がる	高橋正美	富士箱根ゲストハウスオーナー	東京文化会館
42	2014	1/30	温泉療法と医療費控除－豊富温泉のチャレンジ	藤澤重樹	医療法人アップル会皮膚科医師	東京文化会館
43		3/10	欧州スパと日本のインバウンド調査研究	田上順子	日本経済研究所研究員	東京文化会館
44		7/28	ONSEN世界ブランドへの挑戦－地方から世界へ	竹内秀次郎	山中温泉かよう亭総支配人	PHP研究所
45		8/28	ONSEN世界ブランドへの挑戦－経営再建からの出発	下竹原啓高	指宿温泉白水館社長	PHP研究所
46		9/19	ONSEN改革への挑戦－問題の共有と国民の信頼回復	甘露寺泰雄	（公財）中央温泉研究所常務理事	PHP研究所
				堀内公子	慈恵医科大学研究員（アイソトープ）	PHP研究所
47		11/25	動き出したONSEN改革－業界団体の動向と課題	岡田友悟	NPO法人日本スパ振興協会理事長	PHP研究所
48		12/22	世界の今における日本文化の一つの象徴である温泉文化の意味と役割	谷口江里也	ヴィジョン・アーキテクト詩人・建築家	PHP研究所
			日本の温泉・温浴文化のUNESCO無形文化遺産登録に向けて	松田和也	株式会社ヘルス・ビューティ社長	PHP研究所
49	2015	1/27	和食からユネスコ無形文化遺産の意義を考える	神崎宣武	文化庁審議委員、旅の文化研究所所長	PHP研究所
50		2/23	国民保養温泉地の現状と今後の課題	楠本浩史	環境省自然環境局温泉保護係長	PHP研究所
51		3/26	フレイリー・ゲストの社会受け入れの現状と課題	熊谷知美	株式会社ラビング社長	PHP研究所
52		4/24	医療福祉の連携における温泉の活用－介護予防とフレイル	出口晃	小山田記念温泉病院内科部長	PHP研究所
53		5/20	高齢者の温泉利用促進－バリアフリーからユニバーサル旅行へ	淵山知弘	クラブツーリズム株式会社ユニバーサル旅行センター支店長	PHP研究所
54		7/31	シリーズ温泉地再生の現状を探る 皆生温泉	坂内和孝	鳥取県皆生温泉観光株式会社社長	東京文化会館
55		8/25	シリーズ温泉地再生の現状を探る 関金温泉	芦田倍芳	鳥取県関金温泉旅館組合事務局長 他地元福祉及び健康支援関係者3名	東京文化会館
56		9/28	シリーズ温泉地再生の現状を探る 大分県竹田市	首藤勝次	大分県竹田市長	東京文化会館
57		10/21	飲泉の健康増進効果の分子メカニズム解明を目指して	村上慎之介	慶應大学大学院政策・メディア研究科	東京文化会館
			スマート・ライフ・ステイ	後藤康彰	日本健康開発財団温泉医科学研究所研究員	東京文化会館
58		12/22	シリーズ温泉地再生の現状を探る 文化とは無駄と隙間でできている	松坂健	跡見学園女子大学観光コミュニティ学部教授	東京文化会館
59	2016	1/28	健康と温泉フォーラム30年 個人や仲間のできること、行政や共同体ができること	谷口江里也	ヴィジョン・アーキテクト 詩人 建築家	東京文化会館
60		2/26	温泉地の本当の価値、存在意義とは	石川理夫	温泉評論家	東京文化会館
61		3/31	健康サービスや温泉と地域活性化のニューウェーブ	関係組織・団体9名	関連業界団体・会社代表者他	東京文化会館
62		4/25	アロマセラピーと認知証予防・改善について	塩田清二	星薬科大学先端生命科学研究所先導研究センター特任教授 医学博士	
63		5/9～5/10	たまごと山宿物語	伊勢豊彦	セイアグリーンスシステム代表	石川県加賀市 山中温泉かよう亭
				上口昌徳	かよう亭亭主	
64		7/22	温泉利用型健康増進施設の認定基準の経緯と現状	早坂信哉	日本健康開発財団温泉医科学研究所所長	東京文化会館
				原淵明	厚生労働省健康局健康課課長補佐	東京文化会館
65		8/24	総合医療としてのアロマセラピーと温泉療法の可能性	川人紫	SIODAライフサイエンス株式会社副社長	東京文化会館
				熊谷千津	（公財）日本アロマ環境協会常任理事	東京文化会館
66		9/26	社会保障・福祉制度と温泉－温泉の利活用の社会化の可能性を考える	原田啓一郎	駒沢大学法学部教授	東京文化会館
67		12/22	温泉の継続的発展に何をすべきか	有識者	温泉関係有識者・専門家、組織代表	東京文化会館
68	2017	1/25	特区の取り組みと温泉利用・湯治型ヘルスケアの推進	門脇光浩	秋田県仙北市長	東京文化会館
69		3/21	健康サービス産業のニューウェーブ連携ワークショップ	専門家5名	関係組織代表・会社代表他	東京文化会館
70		4/21	温泉発の地方創生を考える	坂本誠	（公財）地方自治総合研究所客員研究員	東京文化会館
71		5/19	日本近代温泉文学の誕生－夏目漱石から川端康成へ	岡村民夫	法政大学国際文化学部教授	東京文化会館
72		7/27	シリーズ温泉地再生の現状を探る 関金温泉－2	芦田倍芳	関金温泉旅館組合事務局長	東京文化会館
				徳丸裕則	鳥取県倉吉市企画推進部長	東京文化会館
73		8/22	シリーズ温泉地再生の現状を探る 畑山温泉（高知県）	小松圭子	はたやま夢楽社長	東京文化会館
74		9/29	温泉利用型健康増進施設（連携型）の現状と課題	首藤勝次	大分県竹田市長	日本交通公社 旅の図書館 （港区青山）
				工藤栄光	北海道豊富町長	
				高橋伸佳	日本健康開発財団メディカル＆ヘルスケア事業部長	

回	年	月日	テーマ	講師名	所属	会場
75	2017	11/22	新・湯治推進プランの具体化に向けて	山本麻衣	環境省温泉地保護利用推進室長	東京文化会館
				早坂信哉	日本健康開発財団温泉医学研究所所長	
				寺崎竜雄	日本交通公社理事観光地域研究部長	
76		12/22	温泉とメディアー伝える力	石井宏子	温泉ビューティ研究所代表	東京文化会館
				飯出敏夫	温泉紀行ライター	
				板倉あつし	プレスマンユニオン代表理事	
77	2018	2/22	地域（温泉地）の魅力を伝える映画づくり	岩崎雅公	andpicturesプロデューサー	東京文化会館
				鶴谷武親	日本ブランド・マーケティング事業本部長	
78		3/28	ニューウェーブ2018ー温泉新時代を拓く	松浦弘幸	鳥取県三朝町長他関係団体専門家計5名	東京文化会館
79		4/26	超高齢化社会における、近代医療と温泉の役割	信川益明	日本健康科学学会理事長	東京文化会館
80		8/21～8/22	肘折温泉療養相談30年	荒川光昭	山形県大蔵村診療所所長 温泉療法医	山形県肘折温泉つたや肘折ホテル・いで湯館
81		9/13	湯野浜温泉百年の挑戦	阿部公和	山形県鶴岡市湯野浜温泉亀や社長	東京文化会館
				井上浄	株式会社ヒューマノーム研究所代表	
82		11/15	ローカルインパウンドの極めてー感交（かんこう）と温泉	アダム・フルフォード	異文化コミュニケーション（NHK言語アドバイザー）（政府インパウンド対策委員）	東京文化会館
				江頭実	熊本県菊池市長	
83		12/21	人工知能（AI）と温泉	桜田一洋	国立研究開発財団理化学研究所科学技術ハブ推進本部 医科学イノベーションハブ推進プログラム副プログラムディレクター	東京文化会館
84	2019	1/22	健康寿命延伸におけるヘルスケアと温泉	宮下大典	経済産業省商務・サービスグループヘルスケア産業課係長	東京文化会館
85		2/14	グローバルサマーリズムー日独温泉共同研究の挑戦	ヨハネス・ナウマン	BAD KROZINGEN 温泉保養施設VITA CLASSICA クリニック所長（医学博士）	東京文化会館
86		3/26	自然回帰と健康ビジネスーその先端トレンドを探る	春日未歩子	保養農園ホテル山梨 ディレクター	東京文化会館
				黒野崇	BEACHTOWN 代表取締役	
				小山芳久	護持の里たまゆら代表理事	
				嘉田良平	四條畷学院大学教授	
87		4/23	温泉新時代への展望ー温泉史として、平成を`考える`	神崎宣武	旅の文化研究所所長 民俗学者	東京文化会館
88		7/23	温泉新時代への展望ー湯治場からの提言-1	畑田素子	酸ヶ湯温泉療養相談室主任 看護師 温泉利用指導者	東京文化会館
89		8/27	自然と温泉その癒やしの環境学	下村彰男	東京大学大学院農学生命科学研究科教授	東京文化会館
				上口昌徳	山中の自然・文化蘇生会議議長	
				谷口江里也	ヴィジョン・アーキテクト 詩人 建築家	
90		9/24	エビデンスにもとづく政策立案（EBPM）と温泉	津谷喜一郎	東京有明医療大学保健医療学部特任教授	東京文化会館
91		11/26～11/27	湯治場からの提言-2みなかみ温泉郷（国民保養温泉地）	みなかみ温泉関係者	みなかみ町、同観光協会、国民保養温泉地協議会	群馬県みなかみ温泉郷
92		12/20	健康と温泉ーその未来への挑戦	関口陽一	経済産業研究所研究コーディネーター上席研究員	東京文化会館
				野中ともよ	NPOガイア・イニシアティブ代表理事	
93	2020	1/29	競走馬のリハビリテーションー馬の温泉の役割	潮崎友樹	日本中央競馬会競走馬リハビリテーションセンター所長 獣医師	東京文化会館
94		2/27	観光・健康資源としての`温泉`その2020年の展望	小林誠	観光庁観光地域振興部観光資源課新コンテンツ開発推進室課長補佐	東京文化会館
				内田明美	経済産業省商務・サービスグループヘルスケア産業課係長	
95		10/30	温泉地のまちづくりと分散型宿泊施設	大野正人	横浜商科大学教授	北とびあ
96		11/20	新型コロナ台風の渦中。澄んだ青空を見つける奇跡の生命論、今話題のベストセラー「亜種の起源 悲しみは波のごとく」を学ぶ	桜田一洋	国立研究開発財団理化学研究所科学技術ハブ推進本部 医科学イノベーションハブ推進プログラム副プログラムディレクター	北とびあ
97		12/14	シリーズ「コロナ新時代の温泉ウエルネスの期待と展望」第一部「全国の事例から学ぶ現場からの課題と提言」	石井宏子	温泉ビューティ研究所代表	北とびあ
				北出恭子	スプリングラボ代表 温泉家	
98	2021	4/22	シリーズ「コロナ新時代の温泉ウエルネスの期待と展望」第二部「増富温泉の事例研究から学べた可能性と課題」	KAY武居	ケイズケア代表 国際美容アロマ研究家	ONLINE
				小山芳久	塚原緑地研究所研究員 ネイチャーガイド	
99		5/18	コロナ新時代の温泉地活性化、リモートワークとその現状を探る	山口春菜	企業（株式会社パソナJOBHUB）	ONLINE
				福井崇弘	自治体（兵庫県新温泉町おんせん天国室長）	
				守屋邦彦	シンクタンク（公財）日本交通公社観光地域研究部地域戦略室長 上席主任研究員	
				福永香織	シンクタンク（公財）日本交通公社観光政策研究部活性化推進室 主任研究員	

あとがき

上口 昌徳

石川県加賀市山中温泉 かよう亭 亭主

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 理事

「コロナの今とその後先の考察－小さな宿の主として」

これからの21世紀日本の地方の振興にとって大切な役割を果たさなくてはならない歴史ある温泉観光地及び信念をもって振興の道程にある新温泉地にとっても「日本の温泉地及び日本の温泉旅館の成り立ち」について余りにも誤った論述が権威ある観光の専門紙にしかも観光の専門家によって展開されていたので、我々温泉町及びその町の宿の主であり、その町の旦那衆として繁栄に大切な役割を果たして来た先達の名誉の為に、更に温泉地の21世紀に向けての展望の為にこれをただしておかなくてはなるまい。その記事を先ず紹介したい。

「江戸時代に街道沿いの旅籠や温泉湯治の宿などがあり、小規模で脆弱な資本力で営業を重ねて来たのであるが、同じ場所で数軒の宿が軒を連ねお客様の袖を引き合うような体質がもともとあった」そして「これはまさに原始的な過当競争の姿だった」と述べている。大きな誤りである。

山中温泉のみならず近隣の山代、栗津等の温泉地には数軒の数百年の間、その地の繁栄の指導者即ち旦那衆としての大切な文化的役割を果たし続けて来た。1973年のオイルショックさえ乗り越え2000年直前のバブル崩壊に至る迄生き続けた。

一例であるが1689年（元禄期）松尾芭蕉は「奥の細道」の道すがら、旅の疲れを癒やすべく一寒村であったであろう山中温泉を訪れるのだが、山中の宿の主達の文学的見識の深さに驚嘆、投宿の「泉屋」の14歳の若い主に雅号（桃妖 とうよう）さえ与え八日間の滞在中「不易流行」の境地に達した。これら数百年間家業として営み続けられた日本の温泉文化の存在は意義深く、これからの21世紀温泉地の生き方に示唆を与えてくれている。

予想を超えてコロナの不安と低迷の日が続いている。そんな最中であるが、心ある旅人の来訪が細々と細々と乍ら続いている。だからこそ密度の濃いもてなしで充実感と心安らぐ不思議な日々が続いている。

特に都市から遙々来訪の旅人の生々の声だが、「久し振りに深呼吸が出来る」「緑の風が心地よい」「久し振りに熟睡が出来ました」と旅人の私達には当たり前の自然に感動してくれる声が全く新鮮に聴けることは、コロナの到来あればこそで、従って私にはコロナ禍の「禍」はない。そして今、旅人の「旅する目的」が変わったことをしみじみ実感の日々でもある。

即ちこれからの人生、今のコロナ苦の様な、独りでは耐え難いことが、いつ起こるか解らない。それを乗り越えるには「人間愛」「家族愛」そして「夫婦愛」を何より深めることと悟ってのそれを確かめ合うことの旅となっている。そしてコロナ後もこの様な旅人の旅は生き続けると思うし、そうで在りたい。

さてこのコロナの日々は宿の経営から考えると苦しい、そしてまだ明るい展望は見えない。しかし今、コロナに至る迄の過去を検証し、コロナ後の温泉観光地のあり方を模索しなければならない。地域の自然と文化に根ざした観光は政府主導では眞の成功はあり得ない。「健康と温泉フォーラム」の様な複合体を通じて「官民の夢展望」を策定されるべきと思う。温泉を原点に据えて、地方の振興を果たすことの大切さを皆で共有し進みたい。



編集後記

合田 純人

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 常任理事

「日本の温泉の今後を考える一有識者からの提言集」委員会 委員長

「温泉は、真に結び付けの力を持たなければならない。人と人の、人と地域の、自然と人の、そして、治療と名付けられたからだの充満と不足の空間を、慈悲と無慈悲に揺れ動く天地の振幅を、記憶の折り畳まりと意識の立ち上がりを……、互いが互いを補おうとするものの間を、繋ぎ合わそうと、促していく、そうした運動態として温泉は、今も私達の前にある。」

東日本大震災と原発事故により社会が大きく揺れた2011年、震災から半年後の9月に東北地方で民俗学を研究する友人と一緒に「温泉文化と地域の再生のために」の副題で対談集を出版した。そのあとがきにあるこの言葉が、今回の新型コロナウイルス感染拡大によって分断され、日常が非日常になり、困惑する人々や混迷する社会を思う度に心に蘇生した。大切さに気付き、動かされた。これが今回の「温泉への思いと心を絆ぐプロジェクト2021」の始動となった。思いを共有できた仲間と一緒に、日本の有識者に呼びかけることができた。

そして、2021年3月中旬に依頼した、貴重な提言は70を超えた。今回のプロジェクトの為に編成された委員会の専門委員、関口陽一、坂本誠両氏によって、行政、旅館、医療・保健、研究・教育、オピニオン・リーダーズの5区分に分類し、それぞれ巻頭に各分野のエキスパートによる小括を設けた。分断された思いを絆ぎ、共有する事、そしてこの未曾有の世界的パンデミックを機会に、私達の生活基盤やその価値観の原点を改めて見つめ直すこと。その行為がその先に私達がこれから目指す社会の中で、本質的な温泉の価値の創造の一步となることを願って遅れ遅れでのやっとの発刊となった。寄稿いただいた有識者、そして小括をまとめていただいた専門委員や関係した全ての皆様に深く感謝いたします。ありがとうございました。

「私たちの内にある自然治癒力こそ真に病を治すものである」表紙の胸像、紀元前5世紀に「鉱泉論」を起草し西洋医学の父と呼ばれたヒポクラテスが私達に残した言葉である。



日本の温泉の今後を考えるー有識者からの提言集

温泉への思いと心を絆ぐプロジェクト
新型コロナウイルス感染症パンデミックを超えて

発行日 2021年8月20日

発行者 特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム
〒151-0066 東京都渋谷区西原1-50-2-403 ☎：03-6804-8575
ホームページ：http://www.onsen-forum.jp

編集者 「日本の温泉の今後を考えるー有識者からの提言集」委員会
委員長 合田 純人 特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム 常任理事
委員 関口 陽一 独立行政法人経済産業研究所 上席研究員 フォーラム専門委員
坂本 誠 特定非営利活動法人ローカル・グランドデザイン 理事 フォーラム専門委員

© Photos and copies by The Forum on Thermalism in Japan 2021 printed in Japan 300

